Shigematsu, Nobuhiro
Kokugogaku Kokugogaku shi

国語学

国語学史

重松信弘

國語科學講座

— III —

國語學

國語學史

重松信弘

株式會社
明治書院

國語科學講座

— III —

國語學

國語學史

重松信弘

株式會社
明治書院

目次

國語學史

重松信弘

第一章　序論

一　國語學史の意義　國語學史は國語研究の歴史であり、その對象は過去に於ける國語研究のあらゆる業績を含む。その業績の限界の決定は國語學に於いて研究すべき問題である。今過去に於ける主要な問題を一瞥するならば、(一)性質を明かならしめる部門として音韻・品詞・語法・文體等の研究があり、(二)意義考究の部門としては語義・語源の研究が主として註釋書及び辭書の形に於いて爲され、(三)文字に關する諸種の研究、(四)地域的の考究、(五)歷史的の研究、(六)諸外國語との關係に於ける諸種の考究等が存した。これらの問題は國語學の體系考察に於いて、それぐ位置が與へらるべきもので、學史はかゝる研究が過去に於いて發展した樣相を明かならしめる事を任務とする。

固より夥しい業績はその歷史的價値によつて取捨せらるべきである。云ふ所の歷史的價値とは、その業績が研究の進展に參與するの功過によつて決する。假令今日の標準に照して採るに足らぬものであつても、その時代の研究の進展に寄與する所があるならば、充分歷史的價値を持つものとせねばならぬ。かゝる歷史的意義を無視した學の絕對的

價値よりする超越的な批判、又過去は現在の鍵索とする觀方の如きは、歴史的考究の本意に背く。固より過去の業績を現代の學に資する所あらしめる事は可能でもあり又必要でもあるが、そはその業績の歴史的意義を問はないで、現代の業績と同一水準に於いて考究するものである。現代の國語研究の立場から過去の業績を觀る事と、歴史的考究の立場から觀る場合とは峻別すべきである。

國語學史は各業績の本質を究め、その歴史的意義を明かにし、更にそれらをつらねる展開の樣相を把握するとともに、業績乃至展開の樣相を生み出すに至つた事由を考究し、以てそれらの事象に對する基礎づけを爲すべきである。(一)業績の本質を究めてその歴史的意義を明かにし、(二)それらを結ぶ展開の樣相を把握し、(三)前二者に對する歴史的解釋をなす事は學史の最も重要な任務とする。

二　時代區劃　從來學史を編述する方式をみるに、各方面の業績を綜合的に觀察して時代區劃を立てるものと、時代區劃は立てず、研究項目によつて區分して記述するものとがある。前者は國語學全般の展開の樣相を把握し得る特色を有し、後者は各研究項目の一貫した發展のあとを明かにし得る點に於いて優る。後者はそれ自身獨自の意義を持ちはするが、同一人の業績(時に一部の業績さへ)も分析されて取扱はれるが故に、その人の研究(或は一部の業績)の特色乃至意義を綜合的に考究するの便宜に於いて缺ける所があり、又推移展開して行く時代的特色を把握する點に於いても、效果的でないものがある。時に有機的な存在を人工的に分析する不自然さもあり、一種の特色はあり得ても學史としての本格的方式とするには疑なきを得ない。依つて今ここでは綜合的立場に立つて時代の區劃をする。

歴史的考究に於いて樹てる時代區劃は、發展の樣相それ自身のもつ必然性に基くべきである。時代區劃を樹てると

云ふ事は、過去の研究の性質が特色を以て概括せられると云ふ事でなければならぬ。從つて特色の把握の如何によつて自ら區劃も異る。從來樹てられたものに二三の方式をみるが、それらを參照して第一期契沖以前の時代、第二期契沖より宣長に至る時代、第三期宣長以後幕末に至る時代、第四期明治大正時代の四期とする。

第一期契沖以前の時代は後期に見るやうな實證主義的方法に乏しく、小數不確實な材料を以て考究し、その成果も多くは概然的妥當性を有するに過ぎず、客觀性に乏しいものがあつた。從つて嚴密な學問的意義を以てすれば「學以前の時代」とも云ふべきである。併し長年月間の國民の國語への關心は、研究さるべき多くの問題を孕んで、未發達のまゝに包攝してゐた。後に發展すべき多くの問題を包藏してゐたと云ふ點からは、研究の萠芽時代とも云へる。不徹底な探究に止つたのは今迄諸家によつて云はれた如く、歌道に資する目的のもとに研究せられたといふ事情もあるが、根本は我國の學問意識が未開發の狀態にあつたが爲である。即ち學術研究の意識及方法も甚だ進まず、稍もすれば秘傳秘密に囚はれてゐた時、しかも文藝に資する副次的目的を以て研究したのであるから、方法に於いて粗漫であり、成果に於いて妥當性に乏しいものとなつたのである。

第二期は契沖の和字正濫抄の成つた元祿の初年から本居の歿した享和初年までの約九十年間とする。この期は前期の萠芽を飛躍的に發展せしめ、假名遣・てにをは・活用・音韻・文字・語釋等の各方面に亘つて力強く新研究の道を拓いた。その特色は實證的方法に基いて、廣範圍に亘る獨創的な新研究を樹立して行つた點にある。かくの如き發展をみたのは間接には近世學術の興隆により、直接には母胎たる國學の勃興による。國學はこの期に於いて儒學に對抗して新な存在の地歩を獲得するに至り、大なる發展の途上にあつて、潑溂たる生氣に溢れて居り、國語研究も獨創的

な開拓に特色を持ち、沈潛し吟味する精密さに於いては缺けてゐた。

第三期は本居の歿後幕末まで約七十年間とする。この期の研究は前期に樹立した範圍の精密な吟味補正を主要な任務とした。これは前期の稍粗雜な研究に引續く當然の道程で、前期との性質の相違は第一期と第二期、本期と第四期の間に於ける程甚しいものではない。又前期の研究の進展の度は範圍によつて異るものがあり、一樣の補正を見たのでもなく、且多少の新傾向もあつたが、概括してその特質は前期の補正的考究にあつたといへる。前期の詞の玉緒やこの期の初頭に出た詞の八衢の末書が各十數種出た事の如きもこの傾向を雄辯に物語る。かくて新研究の樹立に乏しい憾はあつたが、學の絕對的價値はこの期の補正を俟つて著しく進められた。併し第二期の力強く開拓して行く健全な研究力は纖細となり、時に迫力に乏しい低回逡巡せる末書的業績をも多く生み出した。卽ち第二期に奔流した力が停滯して善い一面を表はすと共に、穿鑿を事とする末學の風も伴ひ、この期の特色たる精緻性を幾分邪路にも導いたのであつた。

第四期の研究の特色は今迄の分裂的研究を綜合的に考察するにあつた。この傾向はすでに前期の末から見られてゐるが、明治の初年以來文法的性質の書物が年と共に出現の勢を增し、敎科書類を除くもなほ明治年間には數十種の業績が出た。この文法的考究は明治大正時代を貫く大勢であると共に、國語學史上類例を見ない現象であつた。諸種の問題、諸種の研究も存したとは云へ、大勢の中樞たる事は出來なかつた。かゝる綜合的考察は第三期の分裂して行つた後に來る必然の要求でもあるが、直接の動因となり發展の大勢を作つたのは西洋の學術の影響であつた。

以上各期の特色を概括するならば、第一期は研究の萌芽時代、第二期は開拓樹立の時代、第三期は補正的考究の時

代、第四期は綜合的考究の時代とすべく、その中第二期と第三期とは特に緊密な關係にあつた。

第二章　第一期の研究

一　第一期の研究概觀

一　研究の起源と研究問題　古代に於いて言語の研究が初められる動因は、主として異る言語に接觸し、そを理解しようとするにある。異る言語は外國語である場合もあり、又自國の古語である場合もある。我國に於ける研究の起源も亦かゝる事情に基く。卽ち古語及漢語・梵語の理解を求める活動が、初期の言語研究の萠芽をなしたが、後二者は只今の問題外である。併し性質を異にする支那印度語の輸入は、延いて國語考究の上に種々重要な影響を與へた。殊に支那文化は國民文化を培養すること著しく、漢字は輸入以來國語書寫の文字(或はその文字の基礎)となり、國民文化の內容に浸潤すること甚だしいものがあつた。

初期國語研究の一面は、漢語そのものの性質に由來するものがあつた。その一は漢語に適當な國語を充當するにあり、そは漢語の輸入と共に徐々に行はれたと考へられるが、後には諸種の漢語抄或は和名類聚抄等の如く、研究的態度を以て爲される事ともなつた。その二はかくして一旦充當された古語を、漢語の意味を考へつゝもとの形に復活するにあつた。古くは日本紀私記に、稍降つては萬葉集訓點の研究等に於いて、その著しいものが見られる。又漢字音そのものの性質は悉曇と相俟つて五十音圖の製作に有力な動因となり、以て國語音韻の組織に基本的形式を設定する事ともなつた。

かくの如く漢語・梵語等の主たる影響の下に研究が進められると共に、別に古語の研究も行はれた。日本紀私記に於いては假名書きの古語及漢語より復活した古語の意義の考究にも力を注いでゐる。稍下つて平安朝末期から鎌倉時代にかけての歌學に於いても亦古語・歌語の意義の研究が爲された。それらの古語・歌語の研究は意義を主としたが、研究の進むと共に漸次國語に內在する條理をも發見した。歌學に於いては分析的に研究すると共に、(一)語音に相通の現象のある事、(二)音韻增減の現象のある事、(三)觀念語の外に運用辭のある事等の重要な理法を發見するに至つた。これらの研究には悉曇學の影響が少からず存したが、第三の意識は漢語との比較、和歌の藝術的効果を考究する活動等と相俟つて、鎌倉時代にはテニヲハなる一群を觀念語の外に分立せしめ、次いで室町時代より活用ある言語の存する事にも注目するに至つた。又鎌倉時代からは、記載語と口語との不一致より導かれた假名遣の問題も提出された。これらのテニヲハ・活用・假名遣等の考究は意義の理解より一歩進んで、理法の考究に及んだのではあるが、この期は問題の所在を指示した程度に止り、そのよき解決は擧げて次期に委ねたのであつた。

二　本期の時代區分　この期の研究を細分すれば略、初期・中期・後期と爲し得る。初期は奈良朝頃より平安朝中期頃まで、中期は平安朝後期頃より鎌倉時代の中期頃迄、後期は鎌倉時代の後期頃より德川時代初期迄とする。初期は古語の特殊な書寫に伴ふ訓讀とその意義の探究が、書紀を中心として爲されると共に、他方に於いて五十音圖の考究があり、國語研究の第一の礎石が置かれた。中期には歌學の中に於いて古語の意義を考究する事を問題の中心とし、又訓讀にも及び、さま〴〵の理法が考究された。前期が傳唱時代の古語を主として對象としたに對し、この期は萬葉をはじめ、古今・後撰・拾遺等の歌語が主として問題とされ、考究の對象を變更し且擴張した。この對象の變更は云ふ

までもなく研究母胎たる學藝の變更に起因する。後期は研究對象として中期の歌語を含む外、更に擴張して新古今時代の頃までも下り、且又平安朝の物語類にも及んだ。蓋し中世人の平安朝文化への憧憬が、この對象の著しい擴張を敢てしたのであつたが、この擴張にもかゝはらず、語學的な解釋法はさまで進歩せず、殆ど中期以上に出なかつた。寧ろ歌語の考究に於いては中期の成果をそのまゝ傳承する如き態度が著しく存した。社會が亂れ概ね研究不振の時期ではあつたが、なほ且解釋學より一歩進んで、てにをは・假名遣・活用等の如き國語の理法への意識が強くなり、次期の研究に有力な動因を爲した。前二期に於いて解釋學に混じてゐた語學も、この期になつて初めて假名遣・てにをは等の獨立した業績の出現をみるに至り、學藝衰微の時代にも徐々に伸びて行く研究力の進展を認め得るのである。

二　初期の研究

一　古代人の國語意識　云ふ所の國語意識とは未だ研究にまで至らない國語に對する諸種の觀念を意味する。しかもそは後に發展すべき種々の問題の暗示を爲すものがある。それらの觀念は古事記・日本書紀・萬葉集・祝詞・宣命・風土記・古語拾遺等によつて窺ひ得るが、その著しいものは古語・俗語・方言・訛語轉語等の觀念である。

古語の觀念を強調したものは古語拾遺であつて、書名もその意を表はすが、書中に古語と指稱するものも二十餘に上る。例へば「重播」に「古語志伎麻伎」、「瑞殿」に「古語美豆能美阿良可」と註するが如きで、これらによつて記紀にも甚だ多く古語のあることを推察し得る。古事記の序文に、舊辭・先代舊辭といふは個々の語を意味するのではないにしても、その中に古語の包含を推察せしめるものがあるし、又「上古之時言意並朴」とあるも、古代語の特殊性を意識してゐることを思はしめる。書紀に見える多くの訓註も亦恐らく古語なるべく、時には古の語とも記してゐる。

古語に對して一方に俗語・方言の觀念も存した。前者は「謂ニ海中嶋曲碕岸一也、俗云ニ美佐祁一」（繼體紀）とか「俗語云以レ族續レ錦」（萬葉十七）等の例によつて知られる如く、雅言・正常語に對する卑俗語の意味ではなく（漢語或は古語に對する）通俗平常語の意味であつたらしく、雅語に對する俗語は平安朝中期の頃より發生した。方言は或特殊な地に行はれる故、その地の俗語として表はされ、特に萬葉集・常陸風土記等に東國の方言が多く傳へられてゐる。當時は交通不便のため、多くの地方語が存したらうが「此島白水郎・容貌似ニ隼人一、恒好ニ騎射一、其言語異ニ俗人一也」（肥前風土記、値嘉島の條）とある如きは異色の甚しかつたものと推測される。

語音轉化の觀念も亦屢見る。欽明紀には「語訛不レ正未レ詳」とか「語訛未レ詳」等の自註があり、古語拾遺には「今俗號ニ稚子一、謂ニ和可古一、是轉語也」「今俗謂ニ之掃守一者、詞之轉也」等とある。肥前風土記・豐後風土記にも、各數箇所訛語を說く。古語・平常語・方言等の觀念が存し、他方に於いて轉訛の現象が認められる時、これらの種々相の由來も亦時々裡に自ら解釋を得てゐたものであらう。古語拾遺の說く二例は古語より平常語への轉訛を說くものと考へ得る。かくてこの後古語は直ちに研究の對象となり、方言は歌學に於いて特殊語として扱はれ、轉訛の現象は音通・廣略等の種々の觀念によつて說明されるに至つたのである。

二　宣命書の意義　宣命書とは宣命・祝詞等を記す大小の漢字を交へる文體をいひ、今傳はるものは文武天皇御卽位の時の宣命を最古とする。大體に於いて大字は觀念を表はす語、小字はそを運用する辭となつて居り、觀念語より略てにをはを分け、又用言の語幹より活用を分けたのである。大伴家持が詠霍公歌二首（萬葉十九）の一には「毛能波三箇辭闕レ之」とし一には「毛能波氐爾乎六箇辭闕之」とした如きも、運用辭卽ちてにをはを使はず、殊更に困難な作歌

を試みた事を示す。ここにも運用辭なる特殊なものを認識して居り、宣命書に存する意識と相通ずるものがある。
かゝる認識の由來は、思ふに漢籍の訓讀に存すべく、小字の部分は略訓讀の際附加して讀むべき部分に相當する。漢文との措辭の相違は反點を以て排除し得るが、用言の活用・てにをは等は必ず附加せねばならぬ。この事は漢文の訓讀と共に毎に生起せられる故、宣命書にみる分別の意識の起源は相應に遡るべく、かくて漢語との比較より國語の性質に就いての一種の自覺が生じたものと考へられる。

三　古語研究　漢字傳來以來、漢字で記されてきた國語を適當に讀む事は時と共に困難となつたらしい。記・紀の著者がすでに多くの難讀・難解の語を古記錄の中に見出してゐた事は、夥しい自註によつて察せられる。從つてかゝる漢字を適當に訓む事と、語義を探究する事とは、初期の國語研究の重大な仕事となつた。

書紀は官撰の單なる史書ではなく、國家成立の大本を記した治國敎化の經緯であつて(古事記は當時書紀程重んぜられぬ)、之を會得することは朝廷の祭政を執行ふ上に重要な意義を持つた。されば朝廷に於いても撰進後屢講究せられ、講師たる博士達の私記も、養老・弘仁・承和・元慶・延喜・承平等の際のがあつたといふ。併し皆逸して傳はらず、たゞ纔に釋日本紀に引用せられたもの、及二三の零本(增訂本國史大系第八卷所收、及古典保存會復製本)によつて窺ひ得るにすぎない。

撰進の翌養老五年の私記が存したといへば、撰進後直ちに研究が始められたのであつた。釋記に見える數箇の斷片によれば、訓註と簡單な釋義とであるが、その後の私記も亦訓註と釋義に努めてゐる。書紀の冒頭の、「天地未剖」に「安米津知以末太和可禮須」、「陰陽未分」に「女乃古遠乃古和可禮奴止岐」(大系乙本)と註する如く、稍讀み難いものは

何々皆訓を施した。その訓は研究家の直觀的理解に基くらしく、新な研究家によつて種々の新訓が考へられた。「漢津而合芽」などには、(一)阿加久良爾之天、(二)保能加爾之天、(三)久々毛利天、(四)久良介奈須太太與比天、(五)久良介奈須太由太比天(大系丁本)と五說の存するを見ても、研究家が訓註に心をつくした事が察せられる。

次に釋義をみるに　單に意義を說くものと、語源的解說をなすものとがある。「以レ鶏爲二造綿者一」に「止比乎毛知氐和太津久利止須、死人令沐浴人也」(大系乙本)と釋し、「稜威」に「稜威者是可畏之義也、蓋古謂二可之許志一爲二伊都一也」(釋紀卷六)と釋する如きは前者の例であり、「淡路」を釋して「淡路猶レ言二吾恥一也、言、吾初自謂二必生二珍子一、而今不意先生二此惡子一、故名二吾耻島一也」(釋紀卷五)とし、「美許登」(尊・命)の所由を說いて、「凡神人相共受二天之御事一而奉行之、次神者、又受二貴神之御事一而奉行之、故尊與レ命同號二美許登一、猶如レ言二御事一也」(釋紀卷五)とするは、後の例である。この尊の語義は公望私記の釋する所であるが、同書には更に「又問云如レ此倭語皆爲レ有レ所レ由乎」との問を設け、「答曰、於レ理論レ之必可レ有二其由一也、但古來曠遠、書記散亡、未レ有二詳知一、假令謂レ拜爲二乎加無一等之類、皆是可レ有二所由一也、言是乎禮加加先也、是可下折二屈身躰一而奧閉上也」と說く。即ち文獻が散亡して明かでないが、理論上は皆語源を有する筈だとするは注目すべき考へ方である。

なほ古語の特異性の認識、國語中に混用せられる梵語の摘出等も注目すべきであるが、發語・語助・省語・音通・接辭等の現象を說くことは、初めて見る語學的說明たるのみならず、中期の研究に關連する所がある。

私記で發語といふは、或語に冠してその語を引き起す機能を有するものを意味する。從つて主とする所は枕詞であり、時に序詞をも含む。それらを單に或語の發語と說くに止まるものと、冠せられる所由を說くものとがある。「つ

ぎねふ山城川に」とつゞく「つぎねふ」に、「欲レ讀二山城一之發語也。泥者山也。莵藝者繼也、言山相建繼也」（釋紀卷二十五）とするは、冠せられた所以を解說するものであり、「いさあき野に、蒜摘みに、蒜摘みに、わが行く道に、香ぐはし、花橘云々」の「蒜摘みに」に就き、「先稱二臭氣物一欲レ稱二芬芳物一之發語也」（釋紀卷二十四）とするは、修辭的効果を持つて下文を引き起す序詞の如き機能を說くものである。

又「湯津爪櫛（ユツツマクシ）」を釋して、「湯者是潔齋之義也（中略）津者是語助也、故天津等皆是也」（釋紀卷六）とし、「婀我褒屢（アカホル）」に「我保利須留省語乎」（釋紀卷二十七）とし、「白銅鏡（マスミノカガミ）」に「萬曾美（マソミ）」と讀むべきかとの問を設け、「答、古者須與レ曾音通用、故或云二麻須美一或云二麻曾美一譬猶二素戔嗚尊之處曾與レ須相通一也」（釋紀卷六）とし、「眞經津鏡」に「眞是例文褒美稱也」（釋紀卷七）、「眞名鹿」に「眞名是褒美之例也欲レ示下與二凡鹿一異上故云二眞名鹿一耳、猶如二天眞名井之類一也」（釋紀卷七）とする如き解說を見る。こゝに見る語助・省語・音通・接頭辭等の意識は莫然たる觀念ではあるが、研究の萌芽として注目すべく、要するに書紀の研究は國語研究の最初の母胎を爲し、後に發展すべき幾多の萌芽を宿してゐる點に、研究史上意義深きものがあるとせねばならぬ。

四　辭書　漢土よりは早くから字書・韻書等の渡來があり、我國でも空海の篆隷萬象名義や菅原是善作と云はれる東宮切韻（今傳らず、江談抄云「東宮切韻者、菅家主刑部尙書、集十三家切韻、爲一家之作者」と）の如きものも出た。かゝる字書の形式に倣ひ、和訓を求める要求に基き倭名類聚抄の出現を見るに至つた。

漢字に對する訓義の研究は書紀に於いて著しいものをみたが、この種の考究はその他の書にも、通用の文字にも爲された。記・紀・風土記等に見る訓註を日本靈異記は各章の終に記し、新華嚴經音義私記（奈良朝末のものと言はる）・

辨色立成・楊氏漢語抄(以上二書今傳はらず和名抄による)・和名本草等にも訓註が存した。倭名抄の序によれば、楊氏漢語抄はすでに「養老所傳」と見え甚だ舊いことを思はしめるが、「其餘漢語抄、不レ知二何人撰一」とあるをみても、古く漢語抄と呼ぶ辭書の多く存した事も推察され、又楊子漢語抄や和名本草にも國訓少く、公望の日本紀私記にも「古語多載、和名希存」として、新に倭名抄を要求するに至つた動機の記述を、前掲諸書の趨勢に思ひ合す時、漢語に和名を對照せしめる事を目的とする辭書は、生れるべき時代の要求であつたと云へる。

倭名抄に先立つて出た新撰字鏡は、昌泰年中僧昌住の製作した漢字の字書で、略偏傍によつて分類し、所收の漢字約二萬一千に及び、その中約三千に國訓を施す。「亦於二字之中一、或有二東倭音訓一、是諸書私記之字也」と云ふによつて、その國訓も皆諸書より蒐集せられたものなることを知り、漢字書にして猶且かく多數の訓註を交へる所に、當時漢語と國語とを對譯せしめることが學問上緊要であつた事、及その試みの既に多く爲されてゐた事を知る。併しこの書は訓註を主目的とはせず、漢字書より倭名抄に至る過度的意義を持つものとみられる。

倭名類聚抄十卷は(二十卷本は後人の增補あり)勤子内親王の命により、源順が承平年間に作製した。意味によつて二十四部、百二十八門に分類した漢語に、出典・解釋、時に字音を註記し、和訓を施し、和訓が主要目的となつてゐる點に於いて、新撰字鏡よりも國語との關連が深い。この事は「欲下近二於俗一便二於事一臨二忽忘一如レ指レ掌」と云ふ點と相俟つて日常に便益多く、又漢語抄とも云ふべき性質を持ち乍ら倭名抄とする所にも、國語に對する親昵と自覺の漸く進まうとしてゐることを窺ふ事が出來る。要するに字鏡及この書の訓註は、漢語に對する訓讀の要求が強くなつた所産とすべく、その背後には教養の擴張、及一般化、典籍の弘通等、漸く文化の進展の著しきものゝ存することを思

ふべきである。

五　音圖　五十音圖の製作者及時期に就いては古くから諸種の說が存し、近くは大矢透博士の「音圖及手習詞歌考」に於ける研究があるが、しかもなほ決して明快な解決を得てゐるものとは爲し難い。たゞ、(一)現存する音圖の中には略平安朝中期のものと推定せられるものがある故、中期以前に製作せられたと云ふ事、(二)初期の音圖が專ら漢字音反切の用に供せられてゐた形迹のある所より、製作の意企亦その點にあると云ふ事、(三)音圖の原始形は悉曇家が製作せるものか、或は音博士等の漢學者が創始したかと云ふ點は確定しがたいとしても、種々雜多で統一のなかつた五音及十行の順序が今日の如く整頓せられたのは、悉曇家に因ると云ふ事の三點は信じ得る。

この音圖は當時行はれた假名文字を配列したもので、當時の國語音全部に組織を與へたものではない。併し五音と十行の組織は國語音に內在する理法で、用言の活用、音韻の變化などはこの理法に從つて行はれる。かゝる根本的な國語音の理法に基いて音圖を組織したことは、國語の音韻研究史上最も重視すべき最初の成果であり、中期には更に悉曇學者の手によつて、音圖を基とした國語音の精細な研究がなされた。音圖の製作それ自體が研究史上意義深いのみでなく、音韻轉訛の解釋に、又續いて活用の說明に用ゐられ、國語研究の上にも多大の貢獻をなした。音圖と並び稱されるいろは歌も平安朝中期の頃製作された。平安朝の初期片假名・平假名が作製され、その中異音の假名を網羅してあめつちの歌、大爲爾の歌等が作られたが、兩者はいろは歌が出て後行はれなくなつた。いろは歌は當時のあらゆる音節を示すのみで音圖程の意味を持たない。

三　中期の研究

一　悉曇學よりの國語音研究　この期に於ける悉曇學者の研究には、前期に組織せられた五十音圖を中心とした國語の考究が存し、當時隆盛となつた歌學にも影響する所があつた。悉曇の傳來は古く、これに關する著述も亦少くないが、國語と關聯せしめた最も著しいのは明覺(堀河天皇時代)である。

彼は反音作法で(寛治七年成る)五十音圖と聯關して反音の法を說き、悉曇要決で悉曇を解說しつゝ國語音の解說に觸れた。前者で反切に音圖を用ゐる所以を說いて音圖を記した後、「アイウエオノ五字者是諸字ノ通韻」でア字はアカヤサタナラハマワの韻、イウエオは各イ列ウ列エ列オ列の字の韻で「世人多不レ知二此五韻字一、反音多謬矣」とし、反切の法を解說して後反音圖をあげた。即ちカ行はクにアイウエオが韻となり、サ行はス、タ行はツ、ナ行はヌ、ラ行はル、ハ行はフ、マ行はム、ワ行はウ、ヤ行はイ(但エ列は例外あり)にア行が韻となるとする。これは母音・子音の關係に於いて、國語の音韻組織を明瞭にしたものである。

「悉曇要決」では更に精緻な考察をし、「以二梵文意一竊案レ之、以二九字一爲レ經、以二五字一爲レ緯、織二成四十五字一」とし、又「梵文既三十四字爲レ經、十二字爲レ緯、織二成四百八字一和音豈無二經緯一耶」と音韻組織の相通ずべきを云ふ。又「竪讀二五字一爲レ紐、横讀二九字一爲レ韻、大唐天竺、於二此韻紐一、或有二通用一、本朝或有二通用時一」とし、天竺は紐音が、唐は同韻が多く、我國では人多く竪の五音は通用し、橫の韻は通用しないと云ふが、それは誤であるとし、

日本ニキヤキチヲ云二カイテト一、サシテヲ云二サイテト一、ムラアメヲ云二ムラサメト一、ハルアメヲ云二ハルサメト一、野人ミノヲ云二ノトニキヲミラトイヒ、ミソヲニソトイヒ(中略)ナマイネヲ云二ナマシネト一、ツキイネヲ云二ツキシネト一、此等同韻故通用歟、テノゴイヲタナゴヰトイヒ、フネビトヲ云二フナビト一、カネモノヲ云二カナモノ一、キシリヲ云二コシリ一、同聲故通用歟

と國語に於ける韻通・音通の現象を說いた。かくの如く竪横の通用は一般言語の原理であるとし、更に梵語漢語の通用の實例十數について細說し、所々に國語を引用し、かゝる相通は發音箇所が近似してゐる故だとした。

次に彼は言語樣相の意識を、一には地域的に、二には時代的に、三には位相的に把握してゐた。(一)地域的に言語に變化の存するのは氣候風土の差異に基くとし、北天風强き故に音も濁り、南天風柔氣溫なる故音も柔淸で、「本朝北州風强人剛、故其音濁麁矣、越中越後ニハモリヲホリトイヒ、イヒモルヲイヒホルトイフ、南州其音柔也」とし、「三朝雖レ異依ニ風土ニ語異其旨一同」と說いた。(二)時代によつて言語の甚しく變遷する事も、飜譯された梵文の發音の等しくない事から强く意識して國語の變遷を說いた。我國にも王城の人の語は他國語を學んで展轉改變し、古語は却つて田舍に存すと考へた點などは注目に價する。(三)又天竺にも濫れた語のある事をいひ、我國にも卑俗語とも云ふべきものを考へた。前揭野人の語といふもそれに近いが「下人サシスセソヲ云ニタチツテトト、サルベキヲ云ニタルベキト、スルヲ云ニツルト、シリテヲ云ニチリテト、セメテヲ云ニテメテト」等とも注目した。雅語・俗語の意識は倭名抄に僅に見えるが、彼はその意識を明確にしてゐるのである。

以上の如き明覺の考究は國語を對象としてなされたのではなく、悉曇の理法顯現の實例を國語に求め、又漢語に求め、以て根本たる言語の理法を說くにあつた。とは云へ國語音に就いて闡明する所甚だ多く、しかも彼の研究の世に流布したらしい事は悉曇反音略釋(反音作法成りてより七十餘年後の永萬二年に成る)に「大日本國賀州明覺、爲ニ略作法ニ擧世用レ之」とあるによつても察せられる。明覺より大凡七八十年經た文治元年に成る管絃音義中にも、亦音圖に基き發音について說く所がある。「阿」は喉の中正から出て響きの變改せぬ音で、牙齒脣舌等の緣によつて種々の音と

なる。

謂此阿音、正身牙出時、生二阿詞一、少動二口脣一、生二和詞一、自レ當正出時、生二夜詞一、少動レ頷、生二那詞一、合レ脣急放、生二婆詞一、少合緩放、生二摩詞一、卷レ舌生二羅詞一、以レ舌付二上腭一放、生二多詞一、舌少付二上腭一、放而自二鼻内一出レ音之時、生二奈詞一也。

とし、又同様にイウエオの音は各その列の音の基礎となるとした。五個の母韻を基とし、發音機關の種々の調節を經て各の國語音となる所以を説くもので、この書全體の論述からみてかゝる考究は悉曇學から導かれたと推測される。要するに悉曇學を基礎として國語音の性質が著しく闡明された。この結果は直ちに國語の解釋學に影響し、中には仙覺の如く特に牽强の甚だしい者をさへ見るに至つた。

なほ鎌倉時代に成ると思はれる悉曇八囀聲鈔は、更に進んで國語の活用を悉曇の八囀聲に準へて説いた。八囀聲とは體聲・業聲・具聲・爲聲・因聲・屬聲・於聲・呼聲を云ひ、我國に於いては音圖五音への轉聲を云ふとし、「木斫ル」の例について「木斫ラフ」は體聲、「木斫リ」は具聲、「木斫ル」は業・爲・因・呼の四聲、「木斫レ」は屬聲・呼聲に當るとし、然る所以を説いた。活用の事實は歌學に於いて多少音通を以て説く所あるも、活用の意識は未だなく、その後時に發達した。その活用の意識の發生に、かゝる悉曇學の影響があつたのでないかとも考へられるが、未だ徴證は見出し得ない。

二 歌學に於ける國語研究 前期に行はれた和歌は引つゞきこの期にも甚だ盛であつた。而して萬葉・古今・後撰等は時代の隔りによつて漸く古典となり、歌人は歌道の源流として之を尊び、又歌合の流行と共に批判が行はれ、創作の外に吟味考究の事も盛となり、一層源流たる古歌に顧るの勢を盛ならしめると共に、又歌道が歴史を得るに至つ

て諸種の故實も集績し、ここに歌學が大いに勃興するに至つた。藤原仲實の綺語抄、源俊頼の俊秘抄、藤原範兼の和歌童蒙抄、同清輔の和歌初學抄、袋草子・奥義抄、顯昭の袖中抄、稍後れては上覺の和歌色葉集、順德院の八雲御抄等をその主なものとするが、藤原教長の古今集註、顯昭の古今集註・拾遺抄註、その他の註釋書も出た。これらの歌學書を通じて古語古歌の解釋に甚だ力が注がれて居り、その解釋から種々の國語研究が發生したのである。

その中最も著しいものを音通說とするが、これは嚴密に云へば、音圖の竪に通ふ狹義の音通と、横に通ふ韻通とがある。前者は「繩たき」と「繩たく」、「田のも」と「田のむ」、「けけれなく」と「こころなく」、「こゆるぎの磯」と「こよろきの磯」(以上奥義抄)、「ききす」と「ききし」、「月よみ」と「月ゆみ」、「さねかつら」と「さなかつら」、「ほとろ〱」と「はたら〱」(以上袖中抄)の如く五音の通用をいひ、後者は「いなのめ」と「しののめ」、「しばし」と「しまし」、「うばたま」と「むばたま」と「ぬばたま」(袖中抄)等横列の音の通用をいふ。前者は同音・同聲・同詞・通聲・五音の字・同五音・五音通ふ・五音同じ等と云ひ、童蒙抄・奥義抄、教長の古今集註等に見え、顯昭の諸書(殊に袖中抄)には特に多い。韻通は同じひゞき(同響)といひこれ亦袖中抄に著しい。概して韻通は少く、袖中抄は音通七八十に比して約一割餘にすぎず、明覺の當時、韻通否定說の存した事と思ひ合はされるものがある。

音通の事實は既に私記でも認めてゐたが、明確な原理となつて盛に用ゐられるに至つたのは明覺の研究の如き悉曇學に據る。この事はその說明に悉曇學の用語を交へる事からも推測される。かくてこの二原理は古語は固より、方言の解釋にまで用ゐられたが、必ず妥當な解釋が得られるものでもなかつた。顯昭は時に童蒙抄・奥義抄、教長の古今集註等の音通說を採らず、五音が通じても必ずしもよるべきでないとの反省を持つてゐたが、その當否の據所に就い

では考へてゐなかつた。

次に意味に關係なく、本體の語に音が省略又は添加されるといふ現象を認めてゐた。略音は童蒙抄・奥義抄にも見えるが、明瞭に說いたのは顯昭である。例へば「みのも」は「水のおも」の、「きじ」は「きぎし」の、「さなつら」は「さなかつら」の、「みてしが」は「みてしがな」の略とする。約音の事は述べないがその事實は認めてゐた。「すまへば」は「すめば」、「きえぬらし」は「けぬらし」、「たのむ」は「たのもし」（袖中抄）といふ詞だとした。音の添加は童蒙抄・奥義抄等も注目してゐるが、精しく說いたのは顯昭で、多くは体詞と助詞（若くは詞の助、助字）の二類を說く。前者は、むかつ尾・とつ宮所・瀧つ瀬等の「つ」、穗ろ・日ろ等の「ろ」、おきその風の「そ」、うつら〳〵の「ら」、春べの「べ」、手なふれその「な」等である。後者は子ろ・根ろ・來ろろ等の「ろ」、島つ・くぐつ等の「つ」、さ闇がり・出づさ・入るさ等の「さ」、い吹きの「い」、玉藻刈りしくの「く」、うはへなきの「う」、さぶしへの「へ」等で、「ろ」「つ」「う」の三者は体詞と共通する。その實例及び說く所ではこの兩者の機能に異る所があるとも見えない。兩者の指す所、粗雜な類同ではあるが、本體の語に對して意義に關聯を持たぬと考へる點に於いて、これらは共通性を有して居る。

奥義抄に湯津つま櫛を釋して「湯はいはひきよまはる詞なり津は詞の助也」と私記の說を記してゐるのは、かくの如き一類を考へるに至つた源を想像せしめるものがある。又この省略・添加が何故に行はれるかに就いては明瞭には說かぬが、教長が言葉を捨て、足らぬに加へるといひ、顯昭も事に從ひて略する事がある等と云ふ點より、歌詞の修辭的必要に基くと考へたらしい事が推測される。

當時の歌學に於ける語釋は概して直觀的概括的な云ひ替へが多いが、清輔・顯昭等は時に或は用例を求め、或は語

源的に分解して意義の考究をした。例へば袖中抄で「さにつらふ」を釋して「さは狹也には丹なりつらふは頰なりすこしあかきかほと云るなり紅顏と云心なるへし」とし、神の枕詞「たまちはふ」を釋して「たまは玉しゐなり靈とかけりちはふはたはふと云歟たはふはたまふなりたましゐを給ふ神と云なり」とする如きは單語を構成要素にまで分解して說く精密さを示してゐる。又枕詞が下句に接續される意味、序詞の下句へのかゝり方、或は懸詞の意味の吟味等に於いても、顯昭の考究の精密さを見る事が出來る。之を要するにこの期の歌學に於ける解釋は、私記の古語研究に比して著しい進歩を見得る。

次に當時の國語樣相の意識を見るに、力をつくして解いた歌語の外に、古語・世俗の詞・風俗の詞等があつた。古語は歌語でもあるが、普通でない特殊なものを指した。例へば「ウケクハウキニトイヘルナリ、サムケクナドイヘルガゴトシ、フルクハカヽルコトバヅカヒモハベルナリ」(教長古今註)とか、「三輪山をしかもかくすか」を釋して「シカモカクスカハ然モ隱也、古語也、此カトイフ文字ハ物ヲ共歟ナドトフニハアラズ、哉トイフ詞ヲイヒサシタル也、是モ古語ノ體也」(顯昭古今註)とする如きである。ここでいふ古語は初期の古傳說時代の語を意味したのとは異り、萬葉・古今等の語であつた。世俗の詞といふも亦往々見るが、顯昭は「ウシロメタサニトハ世俗ノ詞ニハウシロメタナシト云ヲ歌ニハウシロメタトヨメリ」(拾遺抄註)と歌の詞と對立せしめて居り、後世にみるやうな雅語俗語の分別が存したと考へられる。方言の概念も亦屢見る。奥義抄に「くやる」は駿河の風俗、「けゝれなく」は甲斐の風俗といひ、袖中抄にも「きけし」は「しげし」で東國の風俗の詞、「おほおそとり」「ころろ」等はあつま詞、「みさえた」は下枝で美濃國の詞、「にほとり」は「にひとり」で下總國の風俗か等といふ。これらは皆特殊異樣のものとの意識を持つてゐ

る。固より言語の意味及外形變遷の意識を持つて居るが故に、かゝる樣相發生の因由は自ら抱懷する所ではあつたらうが、明覺の如く說く所はなかつた。

三　**仙覺抄と釋日本紀**　歌學の隆盛をみた平安朝末期から約百年後の鎌倉時代の中期に出た仙覺の萬葉集註釋と、卜部兼方の釋日本紀とは、主要部に於いて先行せる歌學を承け繼いでゐるが、なほ特殊な點を有した。兩者共に專ら漢字を以て記された文獻を對象としてゐる點に於いて、先行歌學と稍異る研究態度を有し、仙覺は梨壺五人の古點及その後の次點、兼方は私記及師說を承けて訓讀にも意を用ゐた。

古點・次點の訓讀態度の明かでない今日、新點たる仙覺の註に諸種の訓註を施すに至つた過程を示してゐることは、萬葉訓註史上最初の貴重な收穫である。彼は萬葉の用字法を眞名假名・正字・假字・義讀の四種に考へ、或は字音に據り、或は古典の徵證により、或は既決の訓讀に基く等、種々の方法に據つて訓讀に努めたが、萬葉歌語の解釋に至つては先行歌學の方法を踏襲する所が多かつた。音通は同內・同內相通・五音相通・親疎相通等と呼び、又あ行五音を特に本韻、その他を末韻として區別する所もあつた。韻通は同韻・同韻相通等と呼び、又特にあ列音を男聲、その他を女聲として區別した。この分別は悉曇に基くもので、國語に於いては無意味である。

略音も亦先行歌學を承けてゐるが、「あさなさな」は「あさなあさな」の、「ねもころころ」は「ねむころねむころ」の、「いよよ」は「いよいよ」の略とし、國語を重ねる時次の度は上の字を略する習があるとする見解の如きは、先行歌學よりも進んでゐる。又約音も說明が一歩進んで二音をかへす・和す・ひきあはす等と云ふ。音の添加には休詞と云はず、詞の助・助の詞等を用ゐたが、その指す所種々で統一を缺く點、先行歌學より雜駁である。又添加語の中に別に發語

なるものを立て「い行き」「いかくる」「いそのかみ」等の「い」及び「ゆつり」（移）の「ゆ」をそれとしたが、この考へも悉曇に由來する。釋義に際して多くの音義的解釋をした事も亦悉曇に基く。「アハアクル義也」といひ「タハタカキ義、トハトヲキ義」ありとし「天の原富士のしはやま」を釋して「富士トハヒ（火）シケシトイフコトハ也、ハヒフヘホトモニ火界ヲムスヘルコトハナレトモ、フトイヘルハ黒色ヲ顯ス詞ナレハ、ケフリ（烟）ニカタトルベシ云々」（仙覺抄第八）と云ふ。後者の如きは密教に附會しようとするもので、この點に於いて近世のそれと趣は異にするが一種の音義說とみらるべきものである。

總じて彼には悉曇の理法をそのまゝ國語に應用し、稍もすれば悉曇の習だとして強ひるの傾向があつた。「ハツヲハタトイハンコト、タトヒ作例ナシトイフトモ、悉曇の同韻同內ノ相通ヲコ、ロエントキ、イハレナカルヘキニアラス」と云ひ、國語の理法を無視する所も少くなかつた。「悉曇抄ニハヨミノクニトハエムマノクニト云也、エトヨト同內ノユエト尺セリ、マコトニサモイハレタリ」といふを見ればかゝる附會說には由來する所があつたらしい。この期の初に明覺の國語と悉曇とを結合した考察があつてから、漸く國語研究と結ばれるの勢を致したが、仙覺に至つては悉曇應用の極點に達した。

仙覺抄より稍後れて出た釋日本紀は、仙覺の新說の創始の著しかつたのに比して、寧ろ保守的であつた。私記の考說・師說、その他斯の學の範圍に關するものを廣く採り用ゐつゝ、なほ先行歌學の方法をも採る所があつた。音通は五音相通・五音通として夥しく用ゐ、韻通亦同釋として用ゐた。略字を說き、音の添加を說く點亦異らない。但し休詞とするは稀で殆ど助語としその指す所仙覺よりも先行歌學に近い。い行き・い笛の「い」の如きを仙覺は發語と

して特立せしめたが、釋記は助語とするに止まつた。又私記の統を承けて發語は枕詞を意味し、仙覺は「諷詞」を以てそれを呼ぶ等、學統の異るものあるを思はしめるものがあつた。

注目すべきは「詞」なる項を立ててゐる點と、感動詞の如き一類を認めてゐた點である。前者は「宇破奈利餓。那居波佐摩、伊智佐介幾。未廼於明鷄句塢。居氣優被惠禰」（釋紀二十三）の「佐摩」「被惠禰」の如く觀念語の後に附してこれを助けるてにをはの如きもので、これを一般助語と區別したのである。又「はしけよしわきへの方ゆ」の「はしけよし」は「褒美之詞」、「この酒の、あやに、うたゝのしささ」の「あやに」は「褒物之詞」、「たまきはる内の朝臣」の「たまきはる」は玉墩張るで「褒物之辭」とする等、略感動詞に近い性質の一類を特立せしめてゐる。これは私記の褒美の辭といふとも異り、又仙覺のほむる詞とも異る。仙覺もこれを區別したが粗雜で、釋紀の略概括し得るに及ばない。釋紀は概して私記系統と、歌學系統の學を交へた研究であり、仙覺抄は歌學系統の學に悉曇學を入れたもので、略時代を同じうし乍ら、兩者は稍異る成果を示したのである。

四　辭書　漢字のみで記した前記の辭書のあとをうけて、この期の初頭には片假名で註記した類聚名義抄が出、つづいて更にいろは順に配列して一層國語的となつた色葉字類抄の出現を見た。

類聚名義抄十一卷は略院政時代の初期の頃、眞言僧によつて作られたらしく（菅原是善作といふは信ぜられず）、三寶名義抄・三寶字類抄、等數種の異名がある。漢字を扁旁によつて分類し、字體により正字・俗字・通字等の別を記し、音は漢字又は片假名で示し、時に「和音」も記す。訓は殆ど皆片假名で、說明も出典も記さぬが概して多く、甚だしきに至つては二十を越すもある。點によつて清濁・平上去等を示し、又東國の方言とか卑語等をも記す。訓註は證

撰又は師說あるものもあり、著者が諸書から集めたのもあるが「凡此書者爲ニ愚癡者一任レ意抄也、不レ可レ爲レ證矣」と云ひ、その記載が倭名抄程の根據は持たないにしても、當時行はれた國語を實情のまゝによく傳へる所があり、新撰字鏡・倭名抄に比して一層日本化したものと云へる。

色葉字類抄は國語を基として編成した最古の辭書である。二卷本（四册ともす）、三卷本、十卷本があり、もと存した色葉和名（世俗字類抄）に橘忠兼なる人が天養の頃より增補し、長寬頃二卷本を、治承頃三卷本を作り、十卷本は鎌倉時代に何人かゞ增補したものといふ。編制は語の頭字によつていろは四十七に部類し、その各部を更に分つて天象・地儀・植物・動物・人倫等の二十一とする。各語は漢字で示し、音訓共に片假名で記し、間々解釋も附するが、之等の註記は出典を示さない。初めての和漢對譯辭書で、國語を主とし、漢字を從とした點、字音までも假名で表はした點、いろは順の配列法を採つた點、その漢字は日常の國文を作るに用ゐられる性質のものである點等は名義抄に比して著しく國語化されたものと云はねばならぬ。

なほ編制に於いて字類抄の影響をうけ、寬元頃に出來たと思はれる字鏡集は、名義抄の系統の字書であるが、音訓は片假名で註し、又鎌倉時代に成る平他字類抄も、いろは順の配列に於いて字類抄の影響をうけ、片假名で音訓を記す。要するにこの期の辭書は前期に比して著しく日本化してきた特色を見得る。

五　假名遣の問題の發生　假名が漢字から脫化して成立した當時は音の單位と一致して居たので、假名遣の問題は存しないが、時代と共に發音は變遷し、次第にもとの記載法との一致を失つた。かくて一の假名で二三の音を、又二三の假名で一の音を表はすに至り、假名使用上の混亂が生じた。混亂の端は古く奈良朝頃に萠してゐるが、平安朝中

期頃から稍著しくなり、末期になつて益甚だしくなつた。この混亂を意識して問題とする事となつて、初めて假名遣の問題が發生する。この期の歌學に於いても特殊なものの記載は問題とされてもゐたが、この問題に大きな最初の解答を與へたのは定家假名遣である。

俗に云ふ定家假名遣は行阿の增補した假名文字遣を指し、それは定家の時の原始形ではない。行阿の序によれば、その書の原始は祖父親行が拾遺愚草の淸書を定家に賴まれた際「をおえゑへいゐひ等の文字の聲かよひたる誤」があるので、定めて置きたいとて書いたのを、定家が承認したものだといふ。拾遺愚草の成立は建保四年故(後增補あり)この事も亦略その頃であらうが、定家はすでにそれよりも十數年早い正治二年に「しろたえ」とあるを「しろたへ」とすべき由を、院に申上げたこともあり、又親行も定家も共に古書の校合に異常な力をつくした人であつて、この問題に特に注目したことも亦首肯出來る。

定家の承認した原始形に最も近いと思はれるものは、文永奥書の下官集に載せる嫌文字の項で窺ひ得る。「を」には、をみなへし・をとは山・をくら山等八語、「お」はおく山・おほかた・おもふ等九語、「え」は十五語、「へ」十三語、「ゑ」十一語、「ひ」九語、「ゐ」四語、「い」二語である。制定の趣意は「當世之人所書文字之狼藉過于古人之所用來、心中恨之」(下官集)といふにあり、根據は下官集に「右此事ハ非師說、只發自愚意、見舊草子可思之」と見え、なほその他にも同樣の趣を示すものがある。然るにをくつゆ・おしむ・おきのは・おのへの松等あげる所に十數個の誤が存し、爲に語勢に基くかとの說を見たが、それは據所とした書に旣に混亂があつた爲と考へられる。

一度この制定を見るとよく世に行はれたらしく、諸種の傳本をみるが、その間に漸次增補されて行つた。言塵集及

麒麟抄所收のものには數個の出入があるにすぎぬが、人麿秘抄には約三十語多く、弘安三年識の下官集には「ほ」「ふ」「ひみふむ」の三項目、百數十語を增して居り、增補の極行阿の假名文字遣となつた。元來この假名遣は「を・お」「え・ゑ・へ」「い・ゐ・ひ」の三類の混亂を正さうとしたにあるが、平安朝末期には「う・ふ」の如きも亦亂れてゐた。思ふにこはその著しいものについて制定したものなるべく、年と共に增す發音の變移と、一度問題を提出されて注意を喚起せしめられた事と相俟つて、益この問題を精緻ならしめた。

四　後期の研究

一　槪說　古典中心の初期、歌學中心の中期を經てこの期になると、歌道を中心とはするが、中期の歌學とは趣を異にした。歌學が主力を注いだ古歌古語の解明にはこの期は新たな力を注がないで之を承け繼ぎ、註釋の主力は源氏物語・伊勢物語の如き散文文學に向けられ、又和歌をよむ事は漸く觀念的となると共に、一方に於いて連歌の著しい流行があつた。この事は創作の一語一音にも細心な反省考究を伴はしめ、假名遣・てにをはの硏究をも進め、延いては國語の品詞的分類の意識を誘發し、又用言の活用にまで思ひを及ぼさしめるに至つた。卽ち和歌連歌の傾向が中期と異る方向に國語硏究を導いたのであつた。而して又そは中期にみた悉曇學の應用の如き外部的なものではなく、國語に存する自らなる性質に基いて爲されてゐる點に於いて、前期に比して國語そのものにより親昵した硏究だと云へる。

他方に於いて註釋の主力の向けられた源氏或は伊勢の硏究に於いては夥しい註釋書が出、個々の言葉・故實・有職・準據・文意等の解明が爲されたが、語學的の方法に至つては前期の歌學よりも乏しかつた。內容本位の解說が主で、

語の形式的方面の考慮の乏しかつたのは、一には對象たる作品の時代が稍下つて、特殊語の少かつた事もあらうし、又作品の性質上之を味ふ上に、或一二の音節が重要な効果を持つと云ふ事もなかつた等の事情にも基くであらう。

又この期は今迄つねに文化の源泉であり中心であつた宮廷生活が著しく荒廢して、文化史上の一大衰退時代を現出したが、この事は他面に於いて文化を弘通せしめる事ともなり、連歌の如きは武人庶民を通じ、又京洛以外にも盛に行はれた。されば概して研究には深きを求める事は出來ないが、擴大された文化圏から第二期以後發展すべき萠芽を各方面に培養した。

二　假名遣の發展　中期に發生した定家の假名遣は、南北朝時代の頃親行の孫行阿によつて大增補をされたが、他方に於いて略時を同じうして僧成俊及び長慶天皇の如く、この假名遣に對する否認的見解も發生した。成俊は文和二年に萬葉集に奧書して、萬葉の假名遣と定家のそれとが一致しないことを指摘し、萬葉で遠は「登保(とほ)」であるが當世は「登乎(とを)」と書き、又植は萬葉は「宇惠(うゑ)」（下官集に「うへ」とす）で、かくの如きものが多いとした。かくて「依レ之人々似レ背二萬葉古今等之字義一者也」と云ひ乍ら、敢て之を否定する迄には至らず、單に萬葉に合はぬと云つたに止まつた。

長慶天皇は御著仙源抄の跋文でこの事を論ぜられ、和字には心なく、集つて意味をなすもの故、字義から假名遣は決定せられず、又各字は時により平上去の何れにもよまれる故、聲調によつても定められぬ。然るに定家の定める所は聲による如くであつてそれにも合はず、制定の根據がわからぬとされた。併し進んで新たな規定はされず、成俊にしても院にしても共に根據を疑ひ乍ら未だ否定し去らぬ所に、定家の勢望と中世特有の師承傳受の學風の根强く働いてゐる事とを思はしめられるものがある。

他方に於いて行阿の行つた增補は、殆ど原形の面目を變じてしまふ程大規模であつた。項目に於いて、「を・お」に「ほ」を加へ「え・ゑ・へ」「い・ゐ・ひ」はそのまゝとし新に「わ・は」「む・ふ・う」の二類を加へ、總計六字を增して三類八字を五類十四字とした。語數は諸本によつて甚だしい出入があり、語學叢書所收の二書は共に總數約千九百、天文識の古寫本（山田孝雄博士藏）は約千四百である。約五百の差があるのみでなく、例へば山田本に「おけ桶こおけ小桶」とあるに對し「おけ（こなけの時／はなり）桶」とあり「なまじひに慭」とあるに對し「なまじひ（なましい共／なましゐ共）慭」とある等、標準にすら異る所がある。後者は漸次記入して亂雜となつた趣があるが、山田本にも約五十の書き入れがあり、萬葉假名遣（元祿十一年刊）の著書が據つたといふ耕雲書寫の應永の舊本が、千二百八十言であつたと云ふ事を思ひ合はせる時、行阿の原本は略千三百語前後であつたらうと推測される。

行阿增補の六字の項にのせる所は誤謬極めて少く、大體信憑し得る典籍によつたと考へられるに反し、八字の項には稍甚だしい誤謬を含む。この條にはすでに原始形に誤が多く、同じ態度でその後に增補したものを收めた所に、誤謬の多きを加へたものであらう。かくてこの假名文字遣も定家假名遣の名の下に行はれ、これを基として種々の考慮が加へられ、增補改訂され乍ら契沖の時代に至つた。

行阿後に出た書は行能卿家傳假名遣（室町時代初期に成るか）、二條良基の作といふ後普光院御抄、一條兼良の作といふ假名遣近道、三條西實隆撰といふ假名津可飛、肖柏の手に成るかなつかひ近道、三條西實條の假名遣近道抄、寬文六年刊荒木田盛徵の類字假名遣、延寶四年刊の一步假名遣、元祿四年刊の初心假名遣、元祿八年刊の蜆縮涼鼓集、元祿十一年刊の萬葉假名遣等を主なものとする。

之等を通じて條目は、へとめ、ひとみ、みとむ及ん、ふとむ、むとう等の通用の例、音便の際の書方、じとぢ、づとずの別、延音の書方、字音假名等を増した。又假名文字遣は語數の夥しいにも關らず、殆ど條理のない蒐集であつたので、この中の要用なるものを採り出してこれに綱目を作り、或は又條理を立てようとする傾向が生じた。かくて、(イ)活用・音通、(ロ)漢字、(ハ)輕重・發音法等の內部的條理による整理と、(ニ)條目の設定、(ホ)分類等の外部的整頓が爲された。

(イ)音通。例へば「思ひ・思ふ・思へ」、「願ふ・願ひ・願へ」の如くふ・ひ・への三に通ふものは「へ」と書くとか「やゐゆゑよ相通故にゆゑ通かな皆中のゑなり」(假名遣近道)などとした。

(ロ)漢字。小の漢字に相當するは「を」、大は「お」、自・已・各等は「を」、蓬生・淺茅生等のうとよむ生は「ふ」、居・井・意の時は「ゐ」等とした。

(ハ)輕重・發音法。「ゑ」「お」は重く、「え」「を」は輕く、「おほはら山」「おの上」等は重く、「小原」は輕い等とし、又むとうと通じて唇音はむ(梅・馬等)、齒音はう(牛・兎等)、字音の延假名にはう、訓にはふ等とした。

(ニ)條目の設定。頭に書くい・中に書くい・末に書くいとか、ふをう・む・おと使ふ場合とか、ふ・む・う三字通用の場合とか、前揭(イ)(ロ)(ハ)の場合とか、その他種々の條目を立てて整理した。

(ホ)分類。「近道」又はそれに類似するものは要點のみを記したが、江戸時代になつては著しく增補の傾向が生じ、類字假名遣・萬葉假名遣の如きは語數實に五千數百にも及んだ。從つていろは順とか、天地・時節等と類別して殆ど辭書の形式をとつた。

一方に於いて簡便化されると共に、他方に尨大な增補もみたが、何れも假名文字遣よりは整頓された。その補訂には正確さを增したものもあるが、依然として信頼出來ぬ文獻や、怪しげな音聲論による等、契沖の出るまで據所は變改されなかつた。とはいへ類字假名遣が源氏・萬葉・紀・伊勢・倭類抄・本草・八雲・言塵等と據所を記すは、歷史的なる用法に準據するといふ意識と、實證的意企とを示すもので、文獻の吟味に未だしいものがあつたとは云へ、契沖に至る過度的意義が認められる。

三　てにをは研究の發生と發展　國語に特殊な地歩を占めるてにをはの一類の存する事は早くから注目せられてゐたが、これを歌學の上から最初に論じたのは八雲御抄であり、研究的態度で取扱つたのは手爾葉大概鈔である。八雲御抄(第六卷用意部)ではてにをはが惡くてもよいといふ事はないが、強ひて整へようとするはよくない。「うら吹く風に霧はれてやそしまかけて」と云ふ歌は「て」文字がさしあつてゐるが惡くもない。併したゞてにをは一字で同じことがよくもあしくもなるから、てにをはの眞髓を悟るべきであるとせられた。院はてにをはを大事とはするが、その使用にとやかく惱むのは末で、優れた創作精神の高揚を寧ろ根本とせられたので、そは歌人の立場からは當然で、手爾葉大概鈔のこれに拘泥する趣意とは著しく異る。併し他の一面に於いて「あらぬしらぬ」等の「ぬ」文字は使用を愼重にすべく「昔せしいかにちぎりし」等の「し」文字は然らずとせられる點は大概鈔に稍近い。

手爾葉大概鈔は六百四十餘字の記錄體の文章よりなり、定家がその子爲家に與へ、爲家・爲世・頓阿・經賢・堯尋・堯孝・常緣・宗祇・實隆・公條・實枝・公澄・藤孝・實條・通村・氏成・宣之・宣易と傳來されたと云ふ。定家の作とするは古くから疑はれたが、彼の時代にてにをはを略しててにはと用ゐた例をみず、又大概鈔中にのべる所が

拾遺愚草の歌と屢矛盾し、明かに彼の作でない。文明十五年に宗祇が「手爾波大概鈔之抄」なる註を作つてゐるのでそれ以前に成り、又その頃定家の作と信ぜられてゐた事は知られる。

この書は先づ概説して、てにをはは漢文の置字に相應し、詞に附隨して云はんとする心持を發揮するとし、「詞如ニ寺社一手爾葉者如ニ荘嚴一、以ニ荘嚴之手爾葉一定ニ寺社之尊卑一、詞雖レ有ニ際限一、新レ之自ニ在之一者手爾葉也、光書心於是顕然矣、豈忽ニ緒之一哉」と作歌上甚だしく重んじた。擧げる所は、つゝ・見ゆ・こそ・し・しか・や・ぞ・の・か・ものを・ものかな・かは・やは・やめ・も・かも・かな・にて・かし・綱字、及び手爾葉連續留とした「なりにけるかな」「なりにけらしな」で殆ど皆助詞で、僅かに動詞・助動詞・合成語を含む。說く所は主として、(一)歌の結びに及ぼす作用と、(二)各のもつ意義とである。例へば「こそ」に對してはえけせてねの通音、又はし・しかのてには、或は休詞を以て留める。「ぞ」にはうくすつぬの通音、又はき・し・を・しに・しか・らむ等の字で留めるが又「の」「や」もこの「ぞ」に代る職能を持つと說くが如きである。(二)は例へば「や」はなりや・疑のや・てには・願ひ・尤むる詞・詞・様・押並・残詞・略するやの十種とし、「か」は疑ひと哉の二種とする如く意義に注目したのである。

この書は、(一)てにをはを以て明確に觀念語の運用辭と認め、(二)その作用が文の結びを制約する事に注目し、(三)これが國語そのものへの省察から生れてゐる事等意義深きものがある。今迄てにをはの性質をこれ程明瞭に說いたものはなく、又未だ活用が意識されない故音通を以て係結を說くも善い。音通說や活用が源流を悉曇に見出し得るに比して、この研究は獨特の意義があると云へる。只この書の成立年代の明確ならぬは遺憾であるが、もし之を歌道上よりせば八雲御抄の如き大乘的見解に對し、著しく字句の末節に拘泥した小乘的述作たることは否定し得ない。創

作術動に於いて低調となり、作歌が著しく觀念的活動となつた中世の歌學が發酵せしめたと云ふ事は、この考究に相應しい母胎を得たものと云へる。

二條良基（元中五年薨）の連理秘抄・連歌新式・知連抄等も連歌作法の方面からてにをはに注目し、心敬（文明七年歿）の馬上集も亦屢諸種の（大概鈔と異るものあり）てにをはの意義と係結の關係を論じてゐる。宗祇の白髮集にも發句の切字として、哉・けり・もがな・し・ぞ・か・よ・せ・や・れ・つ・ぬ・へ・ず・いかに・し・け・らんの十八をあげて各その意義を述べ、なほ七種のやを說き、又ぞ・か・よ三字の結びをのべ、又にての止りを說く。說く所は皆各てにをはの意義と一句の結びに關し、連歌は句形短かく、しかも充分のまとまりを要する點より考說に切實なるものがある。連歌に於ける研究は大概鈔と相通じつゝも多少相違し、その淵源の前後乃至影響等の事は遽に決定し難い。

大概鈔は時に抽象にすぎ、宗祇の鈔之抄を得て初めてその意を推測し得る如きものがあり、鈔之抄は大概鈔の敷衍として、殆ど離るべからざる關係を有する。この鈔之抄に增補訂正して姉小路式なる書が出來た。一はねてには、二ぞ、三こそ、四や、五か、六かは、七しを、八假名を略する事、九假名を休むる事、十同てにをは數多おく事、十一かな、十二ころどまり、十三にて・を、の十三卷（但全卷十數枚にすぎぬ）より成り、大概鈔のつゝ留め、見ゆ留め、も・かも・かし等の類を缺くが、擧げる項目では所說が精しい。例へば大概鈔の例字に相應するはねてにはでは、らむ・けむ・なむ・せむ・見む・思はむ、等のむ（一本皆んとなる）等をあげ、これらの止りには上に、や・か・かは・かも・なに・なぞ・など・いつ・いづく・いかに・いかなる・いかでか・いくたび・たれ・いづれ等を要するものとし、又「ぞ」に於いては大概鈔の趣意を敷衍する外、下知のぞ、云ひすつるぞ、ぞ・か・よの三者通用の事等を新に說

き、「や」の條は十四ケ條（大概鈔と出入あり）とする如きである。

この書を更に增訂したものに細川幽齋の作と傳へられる春樹顯秘抄がある。「入魂之詞」として、たゞ・猶・さへ・だに・など・いとど、を補ふ等多少の新味はあるが、概して姉小路の踏襲である。更に有賀長伯の春樹顯秘增抄によつて一層精しくなつたが、敷衍しつゝ所說を擴張して、てにをはの內容が稍亂雜になつてゐる。延寶四年刊行の一歩はこの系統の外にあつて過去・現在・未來・疑ひ・治定等と別個の體系を立てた。

要するにこの期のてにをはの研究は國語より運用辭の一類を取出し、その意義と係結の關係を考へたのであつて、その考說は將來の發展への契機となつてゐるのみでなく、又中期の單語音韻に注目した語學から、文章の結構意義に關する語法へ意識を向けた所に、充分な歷史的意義を認むべきである。

四　國語の品詞的分類と活用の意識　てにをはが明かに注目せられると共に、觀念語なる物の名と活用語との識別も生じ初めた。爲家の子爲顯の作と云はれる竹園抄（但今川了俊の落書露見では著者を疑ふが、この書に見える以上室町初期を下らぬ）には「上下の句の中にても、一句のうちにてもてにはの字、もしは物の名、詞字にても、みゝにたつを可嫌なり」と見え、又「物の名と詞と、差合うたにいはく、鶯もみえすなりゆく霞かな木の下くらき春の夕暮。鶯のすとみえすのすと是をきらふべきなり」ともある。即ちてには・物の名・詞の三に區分し又「鶯」が物の名で「見えず」が詞である事も示す。連理秘抄・連歌新式も物名・詞字と區別し、新式追加條々には「詞字・つゝ・けり・かな・らん・して」と見える。一條兼良の連珠合璧集の「詞類」に集める三十餘語の大部分は動詞で、僅かに形容詞を交へる。即ち室町時代前期に於いては體言たる「物の名」、用言たる「詞」、助詞たる「てにをは」の三分法が朧氣乍ら成立してゐ

る事を知る。

併し新式の詞字のつゝ・かなは大概鈔にあり、釋紀が詞とする所も感動詞とも云はるべきものであつた。弘安頃に出來た塵袋の「詞字」の條も用言と副詞を主として他を交へてゐる。之等を通じて見るに、徐々に內容が變じ、詞が用言の意味となり、三分法が意識されてきた事を知る。然るに室町末期の頃からは漸次體・用の語に移つて行つた。

良基の新式に「春と云句に弓と付て又ひく・かへる・をす・など付べからず、是用なる故也、本末とは付べし、是體なる故也云々」とあり、又、岡・嶺・洞・麓等は山の體で、梯・瀧・杣木等は用。海・浦・江・湊等は水邊の體で、波・水・泳・鹽等は用と云ふ。後者の如き考へがある以上、未だ後世の體言・用言と意味を等しくするものではないが、前者の如きはその淵源となつたと考へられる。細川幽齋聞書では梅・櫻等は體、咲き・散る・匂ふ・さかり等は用とし、誹諧枝葉抄では煙(ケブリ)は體、けぶるは用。霞(カスミ)は體、かすむは用。流(ナガレ)は體、ながるは用とする。この書は元祿十六年の刊行であるが固より之より早く連歌誹諧で行はれたらしく、契沖の代匠記精撰本(元祿三年頃成る)も體・用を體言・用言の意に用ゐてゐる。かくて物の名・詞は、體・用に代られ、之にてにをはを加へた三分法の意識が存續した。

「詞」又は「用」の活用は既に述べた如く假名遣の方面から考へられてゐた。良基の後普光園院御抄にうやまふ・うやまひ・うやまへ、したがふ・したがひ・したがへ等四段の三活用形、及び消え・消ゆ・絕え・絕ゆ、等下二段の二活用形を擧げ、兼良は假名遣近道でこの事を五音相通を以て說明し、且消え・消ゆる、見え・見ゆる等「る」の添はる連體形をも擧げた。肖柏も近道假名遣でこれらを踏襲し、思ふ・思ひ・思へ、云ふ・云ひ・云へ、等數十を列擧した後で「此外に中のひの字をのぞきたるあり」としてこれらから、辨まふ・辨まへ、備ふ・備へ、答ふ・答へ(良基は答ふ・

答ひ・答へとす)等の下二段の活用形を辨別した。實條は假名遣近道抄で更にき・く・い・し・うの五字にかよふものとして無き・無く・無い・無し・無う、闇き・闇く・闇い・闇し・闇う等形容詞の活用形(但しいはきの、うはくの音便)をあげ、一歩もこの說を襲用して遠き・く・い・し・う、近き・く・い・し・う等とあげ、且つ思ひ・思は・思へ・思はん、通ひ・通ふ・通へ・通はんと四段活用の全活用形をあげ、寶永五年刊の假名遣拾芥抄も亦は・ひ・ふ・へと四段に通ふ數個の例を擧げた。

かくの如く活用の事實は漸次發展してゐる。それらは假名遣の條理を立てる上から音の通ひとはしてゐるが、活用といふ意識が存しなかつたのではない。天正年間に作つた木食上人の無言抄の以呂波詞「る」の部に「くれとくるとはたらくによりてるるにきらふとの說尤なり」とあり又「し」の部にも「はつかし・かなし・おし・ほし・ましなどの類のはたらかぬし」とある。殊に前者は「はたらくによりてきらふとの說」とある故當時はたらくと云ふ意識の存した事も知られる(契沖などは固よりはたらくと云ふ)。かくてこの期には活用の意識も明確になり、この後に發展し整備さるべき基礎が出來てゐるのである。

五　辭書　この期の辭書は皆簡便な日用語辭書の傾向を帶びて居り、又刊行の事もあつて弘通の勢が著しく見られた。漢字を中心とするものには室町初期頃に出來た頓要集、中期頃の節用集、文安元年に成る下學集、享德三年の序ある撮壤集、文明十六年に成る溫故知新書、文明十八年の識ある類字文字抄、天文十七年に出來た運步色葉集等があり、皆この通俗的傾向を持つ。頓要集・下學集・撮壤集・文字抄は分類法を採り、節用集と色葉集とはいろは順、溫故知新書は五十音順に配列し、漢字に訓をつけることを主とし、註は概して少い。これらは皆或は國語、或は內容に

よつて文字を探し求めることを目的とし、常用の語を多く載せ、音註なく、前期中期に比してより多く日本化されてゐる。この中節用集は天正十九年の昇本、慶長二年の易林本、略同じ頃の饅頭屋本をはじめ、その後夥しく刊行され、下學集も亦天和三年以後數版を出した。

次に國語辭書の體裁を持つものでは長慶院の仙源抄が最も古く、源氏物語中の語句約一千がいろは順にして解說してあり、室町時代には多少改訂され類字源語抄、その他の名目で行はれた。江戸時代初期に出た源氏目安（源氏爪印とも）も亦同樣の辭書で、語數は著しく多い。言塵集・藻鹽草・匠材集・無言抄・歌林撲樕・呉竹集・和歌八重垣等は和歌連歌に用ゐる言葉の或は意義を釋し故實をのべ、又付合を說いた。この中歌林撲樕は松永貞德の著で、之等の中では最も國語辭書の形態を備へて居り、又彼には和句解の著もあつて、常識的ではあるが語源を考へてゐる。以上の如き國語を說くものも槪して簡單で、通俗を旨とする點は漢字を主とするものと傾向を異にしない。しかもこれらが室町末期から江戸時代に入つて多く出、又刊行もされ、愈文敎弘通の勢が見られる。

第三章　第二期の研究

一　近世國學の成立と本期研究の槪觀

一　近世古學の成立　我國に於いては、古代中世を通じて、古代ギリシヤの如く知識的理想が文化の本質を爲す事はなかつた。平安朝の文化は主情的で美的要求が核心を爲し、中世に入つては主意的傾向著しく、宗敎的道德的要求が旺盛であつた。されば學術研究は未だ充分な背景を得ず、國語に對しても亦その內部に存する理法を研究しようと

する強い要求をみなかつた。然るに文教政策を採る德川氏の治世となつて約百年近くを經た元祿前後には泰平の確立漸く久しく、國民の活力は充實し、反中世的な現世享樂・生活肯定の機運を生じ、自由伸張の趨勢は文藝にも產業にもあらゆる方面に溢れた。この生活の開放伸張の機運に伴つて、傳統に囚はれない自由討究の精神が發生し、ここに新學問を現出せしめるに至つた。

しかもこの新學問の代表者たるや何れも布衣の平民で、從來の師範家の秘傳に對して關係なく、寧ろ反對する立場にあり、その學の對象は何れも後世の濁れるを嫌つてその源に遡らうとする古學となつた。この機運の最も力強い現れは儒學に見え、次いで國學の成立となつた。既に戰國の諸侯は宋學を修めた學僧を招き、儒學は五山の禪房から次第に外界に出たが、家康も惺窩・羅山等を用ゐた。羅山の獨立自由の態度、藤樹の陽明學の提唱等に於いても傳統から離脫する傾向をみるが、古學としての著しい面目を發揮したのは伊藤仁齋・山鹿素行・荻生徂徠等であつた。之に呼應するの勢に於いて國學方面では戶田茂睡が歌道に於ける自由主義を唱へ、契沖が國語研究に於いて自由討究に基く偉大な成果をあげた。

二　國學の成立　仁齋は官學たる朱子學に反抗した自由主義者であり、孔孟に遡つた古學者であり、研究態度には獨創的のものがあつた。契沖も亦傳統に反抗し、萬葉の古典に遡り、古書に基く實證的學風を樹立して、これに近似した傾向をもつ。仁齋學は學問の性質上演繹的主觀的なる傾向を帶びたに對し、契沖學は純粹に歸納的客觀的で、仁齋學に存した知的要求が道德的要求の下位に押しやられてゐた如き嫌を脫却した點に於いて、我國の學問意識發達史上、仁齋學よりも遙かに意義が深い。この契沖學に於ける知的要求の純粹さが、國學に於ける學問研究の精神の基礎

を置いたのである。

併し國學の有する國家的信念の樹立に至つては荷田春滿の出現を必要とした。契沖は皇國古代の風儀を純朴なりとし好意はよせたが、流石に僧侶たる彼はこれを理想の時代とは見ず、國語音の如きも梵音に相通ずるが故によしとするのであつた。春滿に至つては我國の古代文化に存する古道に理想的價値を見出し、これを復興せんとして古學を提唱した。創學校啓に於いて「古語不レ通、則古義不レ明焉。古義不レ明、則古學不レ復焉。先王之風拂レ跡、古賢之意近レ荒」といふ。彼の古學は神皇之敎・國家之學の探究であつて、そこに指針を得、理想を得、情熱を得た。卽ち學であると共に又敎でもあり道でもあつた。古代文化に對する理想化に伴ふかゝる敎學的性質は、その先驅者であり、對抗者である儒學に對して作り上げられた歷史性で、契沖の研究精神に春滿のこの信念を得て近世の國學は成立した。

春滿は契沖の歿後三十餘年活動し、その弟子眞淵亦春滿の精神をうけて師の歿後三十餘年、古道の定立と研學とにいそしみ、眞淵の弟子宣長亦國學を學問的に又思想的に躍進せしめて師の歿後三十餘年活動した。春滿・眞淵・宣長等はその學問思想に多少の相違はあるも、相繼いで國學の二要素を益發展せしめ、學問の發達・思想の確立と相俟つて近世文化史上の偉觀を呈した。かくて國語の研究は歌學・神學・歷史學・有職故實の學等と同様、國學の學問の一內容を構成すると共に、國家主義的信念よりする國語尊重の觀念ともなつたのである。

三　本期研究の概觀　旣に眞理探求の知的要求の著しい發展を得て、國語の研究も資料の選擇と方法の定立とに面目を一新した。國學の理想に從ひ、資料は最も純粹なさまに於いて我國民文化を顯示してゐる古典に第一義的な價値を認め、專ら實證的方法を以て之に對した。主として爲された研究形態は註釋で、語釋を主として、事實の考證、文

意の解明、趣意精神の發揮にまで及んだ。註釋の外には假名遣・てにをは・活用・音韻・文字・辭書の各方面に於いて、第一期の研究を繼承して飛躍的な進展をみた。

新しい方法を以て押し進めて行く研究態度は屈托のない氣力と伸展力を見せた。之を第三期に比すれば、考察の粗雜なものはあつたが固より開拓時代に於ける當然の性質である。又前期の研究は皆他に依存したが、この期に於いてもその傾向があるとはいへ、知的要求それ自身が大なる興味と價値とを自覺し、前期とは大いに異る所があつた。即ち研究精神はそれ自身の興味の爲に研究を進め、殆どそれらの意義を忘れたかの趣を有し、學問の爲の學問に今一歩の距りを殘した。固より國學そのものの精神も、當時の思想も、純粹に學問のための學問たることを許さず、從つて他に意義上の從屬をしてゐたとしても、決して中世のそれと同一視すべきものでなく、その制約が實際研究に際しては殆ど無力であつたことに注目すべきである。それにもかゝはらず根抵に存した信念は、時に學問的認識の範疇を超脫せる自國語優越の主張を生み、後世の史家をして研究そのものまでに慊焉たる思ひあらしめるものがあつた。この期及次期の研究に往々にしてみる國語に對する國家的偏見は、國學の持つ理念が學問に對して不用意のうちに混淆したものとして想すべく、研究そのものの眞價は充分に認むべきである。

二　契沖の研究と假名遣

一　**萬葉集代匠記**　契沖學は萬葉を中心として記紀(歌謠)にも遡り、伊勢・古今・源氏等にも下り、主として古語の闡明に力をつくした。萬葉に傾到した理由には長流・光圀の存在も考へられるが、彼自身亦萬葉を以て汙濁なき純粹な和歌の聖經・古語の標準的文獻と認めたにもよる。かくて傳統の說を排し、實證的方法によつて古語の訓義を考究

し、萬葉集代匠記二十卷（初稿本・精撰本）の劃期的業績を爲した。

代匠記（以下元祿三年頃成る精撰本について云ふ）卷頭の總釋は作者・年代・枕詞、その他諸種の事項を説くが、その中雜説及び集中假名の事の項に於いては多くの語學的考説をみる。文字遣には正字・義訓・音の假名・訓の假名・假名の反、その他特殊なるもののある事を指摘し、てにをはに就いては倍那里・加氐里・忘良延奴・比里布・毛登奈等十個をあげて古風なりとし、又「今衣吾來禮」「然爾有許曾虛蟬毛嬬乎相格良思吉」等の如き呼應の法の特異なものをあげ、萬葉語法の特殊性に注目した。假名に就いては四十七字の中、その音互にまがふ事多きをのべ、「此度和名集ヲ初メテ日本紀ヨリ菅家萬葉集等マテノ假名ヲ考ヘ見ルニ、皆一同ニシテ此集ト叶ヘリ、又行成卿ナトノ比マテノ假名ヲ見ルニ此集ト違ハネハ、其後漸々ニ誤レル歟」とし、以・爲・比・乎・於・保・江・惠・倍・和・波・宇・布の假名遣百數十を示し、且、宇・武・奴、三字の相通を説いた。これは「集中ニ見エタル假名ノ中ニ、今ノ人ノ用ルト違ヒタルヲ思ヒ出ルニ隨テ少々是ヲ出ス」もので、假名遣説はこの時成立してゐる。彼の假名遣説は萬葉研究と共に成立したもので、それは古代文獻に共通するのみでなく、「仁賢天皇ヲ初ハ億計ノ王ト申シ、顯宗天皇ヲハ弘計王ト申シキ、億ハ於ニ同シク弘ハ遠ニ同シ、遠於ヲ混セハ昆弟ハイカガ分チ奉ラム」と云ふ如く、語義の標識として是非從はねばならぬものなのであった。代匠記總釋のこの考説の更に一層の進展を見せたものは和字正濫抄・倭字正濫通妨抄・和字正濫要略の三書である。

二　假名遣　正濫抄（元祿六年序、八年刊）は第一卷に於いて總説して著作の趣意及び音韻文字の一般論をなし、二卷以下で假名遣の實例を記す。即ち行阿の假名文字遣は誤謬多しとし、記・紀・萬葉・和名抄等の古書を引いて假名

遣を定めた。二・三・四卷は大體假名文字遣に記す所を目安とし、五卷はその後に問題とされた諸種の項目を基として約二十項(例へば、中下のふ゜、う゜とむ゜とかよふ類、へ゜とぬ゜とかよふ類、中下に濁るち゜等)を立てて記す。その語數約二千で、文獻の記載を缺くもの殆ど三分の一に及ぶが、それらには活用・音通・音便・約音・略音・語源等から推定したものもあり、又從來の例によつたものもあり、更に將來の研究を必要とするものがあつた。

契沖のこの復古假名遣の提唱は反響を呼んで直ちに反對者を出した。正濫抄刊行の翌元祿九年、嘗て假名字例を出した山崎吉里は倭字古今通例全書を出版して反對の態度を表明した。その總論で記・紀・萬葉等の如き古書は「よみこゑとりましへ又はを・お、え・ゑ、亂てあり、今かやうの書を假名の證據とさためかたし」とし「假名の法は平上去入の四聲にしたがひてさだまりぬ(中略)なんぞ舊記になづまんや、只理の正道にしたがひて可也」と云ふ。かくて四千三百餘の語をいろは順に配列し以て假名遣を示した。彼は十年に倭字正濫通妨抄を書いて反駁し、且正濫抄の補訂をも試み、翌十一年には更に改訂して和字正濫要略とし益研究を進めたが、依然として約三分の一の引證は缺いだ。

三　契沖以後の假名遣の大勢　この後も定家假名遣の亞流は絕滅するに至らず、この派の書も多く出たが、學界の主流は次第に契沖の說に贊し、實證を缺く部分の研究をした。約七十年後に出た揖取魚彥の古言梯(明和二年刊)は廣く古書に求め、契沖の知らぬ新撰字鏡の如きも用ゐて、約千九百言に殆ど皆出典を示した。この後は學者多く之に準據し又之が補訂をもした。村田春海・淸水濱臣の說を加へた增補標注古言梯、村田春海の假名拾要、市岡猛彥の雅言假字格・古言梯拾遺、山田常典の增補古言梯標注等を主なものとし、之等によつて復古假名遣は大成するに至つた。

かゝる大勢の中にあつて上田秋成は靈語通の假字篇(寬政九年刊)で「或御說」なるものを記し、之を敷衍して自由放

任主義の假名遣說を立てた。古代には假名遣なるものなく、その法則は後世の學者の勝手に立てたものである故、假名は言葉の音のまゝに書けばよいといふ。固よりこは古代に條理の存した事を無視した論で世に行はれず、却つて寺田長與の太津可豆衞、岡本保孝の靈語通砭鍼等の駁擊を見た。又幕末に於いては音義派の特殊な假名遣說も存したが、學界の信奉する所とはならず、復古假名遣はゆるぎなき地步を占めて現今に至つた。

三 語釋と辭書及方言

一 語義研究 平安朝末期の歌學に於いて見た活潑な語義の探究は、この期になつて又重要な意義を帶びて復活した。契沖・春滿・眞淵・宣長等の研究の主要部分は古語の意義の探究で、大抵註釋の形に於いてなされた。歌學に於ける語義の考究は實證的方法に乏しく、多くは直觀的に爲されると共に、又和歌に伴隨する傳說浮說等を交へたが、この期には前期の音通・反切・延約等の方法が襲用發展せしめられると共に、多くの確實な資料に基いて歸納的實證的に精緻な考究が爲された。この事は契沖・眞淵の硏究にも勿論みるが、宣長の語釋は往々時代意識の中に働く語の實相をよく明かならしめてゐる點に於いて、語義研究の最高に位地するものであつた。

國學に於けるかゝる新研究は前期の歌學乃至は註釋學に接續した發展であつたが、更に又兩者の中間的意義を持つと見られる研究も存在した。そは舊註釋學を綜合大成した加藤磐齋と北村季吟との研究である。磐齋には伊勢・枕・新古今・徒然等の註が存し、必しも舊註の集成に終らないで、事實を古書に求め、語釋を例證に稽へ、考說創見に富んだ。たゞ屢見る牽索附會の僻說は、古典觀の根本に於いて、又研究の方法に於いて、未だ新學問の意識に充分目覺めない過度的存在以上の意義を附與せしめざらしめる。季吟は註釋の對象磐齋よりも一層廣く、研究態度に於いては

集成を旨とし、蟠齋程の獨創性を持たないと共に、又蟠齋よりも妥當性に富んだ。就中源氏・枕・徒然等の註釋はよく行はれ、舊註の精粹を傳へて新國學に接續せしめた。蟠齋にみた實證的傾向、季吟にみた穩健な客觀的態度は、共に前期の註釋より一歩進んで、新國學への過度的な存在を爲した。

新國學はかゝる舊研究に比して學問の意識を新にし、方法を新にしたとは云へ、學の根抵に存する古道追求の意欲は、神典・歌書等の古代文化を內容とする書の註釋を旺盛ならしめたが、それらを斷片的に破碎した個々の語を取扱ふ辭書の製作には未だ赴かしめなかつた。古道の究明に思想的興奮を懷いた春滿・眞淵・宣長の如きは、かゝるわざよりもより緊急の問題を意識してゐた。國學の四大人を始め古學を道とし教とする意識の旺盛な學者に、大部の辭書類の著述に乏しかつた事は次期に於いても同樣で、この傾向にも亦教學たる國學の性質がはたらいてゐる。

注目すべき辭書類は國學の主流に位置する者よりも、稍これから離れた學者、卽ち漢學を本領として國學に興味を有する人、又は獨立派の學者等の手によつて爲された。かくてこの期には語源書と云はれる貝原益軒の日本釋名、新井白石の東雅、又最も國語辭書らしい辭書である谷川士淸の倭訓栞の如きが出て、辭書の面目を一新した。由來漢學者にして國書に親しみ和歌を嗜む者は往々存し、益軒亦この傾向を有し、假名遣をとく和字解の書もあり、又多くの和文書も書いてゐる。白石亦和漢の學に通じ、殊に國史に深く數種の著があり、又同文通考の如き文字の研究書もある。日本釋名が劉熙の釋名に倣ひ、東雅が爾雅に倣つて東方の爾雅の意であるのも、共に漢土の學を主とする人らしい名づけ方である。士淸は闇齋學派の神道を學び學和漢を兼ね、日本書紀通證の名著をものし、國學に於ける造詣は益軒・白石よりも深いものがあつた。

二　益軒の研究　日本釋名（元祿十三年刊）は約千百の語を天象・地節・地理・宮室等二十三に類別して意義・語源を說く。卷頭の汎例で和語をとく事は謎をとくが如くで、その要訣として、（一）上古自然に云ひ出だされた自語（父・母・天・地等）、（二）音通に基く轉語（上を君、盗を鼠等）、（三）音の省略による略語（墨研を硯、前垣を籬等）、（四）他語を借用した借語（日を火、上を神等）、（五）義理に基く義語（諸越を唐、氣生を勢等）、（六）假名反しによる反語（はたおりを服部、ひらを葉等）、（七）母字より生ずる子語（日より晷・光、水より源・汙等）、（八）漢字音（菊・桔梗等）、唐音（杏子・石灰等）、梵語（尼・斑等）等の音語の八を知るべしとし、又上代語に漢字・近代語を當て、或は子語から母語を解く如きは避くべく、且やすく素直に解くべく無理に解いてならぬ等の注意をも記す。

實際の解釋は他書に稽へること少く、又國語音の性質慣習を顧ることなく、上揭八種の要訣を以て勝手に略音を說き（風は吹せ、柴は下葉、木は生の略等）、相通を云ひ（夏は暑、鼠はぬすみの音通等）、義理を說き（腹は張る意、花は實より早く生る意等）、その結果は著しく非學問的なものとなつてゐる。要訣を說くに際しては精緻なるものがあり、又概ね妥當なるにかゝはらず、かくの如き結果を見たのは、畢竟儒者義理の學に通じ理論には長じてゐても、國語の素養乏しくその性質を解せず、且謎を解く如き態度を以てする等根本に於いて過誤が存したによらう。

三　白石の研究　東雅（享保二年成）は名詞六百數十を天文・地輿・神祇・人倫等二十に部類してその義を釋し、所說時に百科全書的に、或は歷史的に、頗る詳密に亙る。卷頭の總說で說く所は種々なるも、國語變遷發達の歷史的見解及び音韻の論に於いて注目すべきものがある。

語には古言今言があり又方言がある。相異る五方雅俗の言は混淆して時と共に變化する。三韓の歸屬以來三韓及び

支那の語が入り、殊に漢字の浸入は古語を著しく衰へしめた。後佛教と共に梵語が、禪宗と共に宋元の語が、最近は西洋の蕃語が入るが、唱へ易く國語化されるを普通とする。語釋はこの變遷發達を知悉し時代を考へて爲すべく、古語を釋するに略音の說あるも、元來古語は素朴なるを本質とし、後世に於いて發達して長大となり、長大となつて略音も行はれるとし、又語音變轉の由來をなす五方の音に存する輕重淸濁等はその俗の相違に基き、俗の緩なるは呼ぶ聲開き、急なるは合ひ、云ひ難きは他の音に轉ずると云ふ。その他諸種の事項に及ぶが、就中國語發達の意識は珍重すべく、それに伴ふ音韻論亦一見識とするに足る。國語發達變遷の意識は、契沖に於いて未だ明確でなく、この後成章・宣長等をはじめ多くこの事に注目するに至つたが、白石の說はその先驅を爲し、しかも彼は一方言より他方言を訛謬とする如きは不可とし、且又この變遷に何等の價値觀を交へぬ所、宣長等の國學者と異る。語義の研究に謎を解くが如しとする態度を排し、古書に基いて解くべしとし、益軒の唱へた略語・轉語・借語・反語等にも考慮未だしきものありとして、語意研究の用意を著しく進めた。卽ち益軒の平面的抽象的な論に對し、彼は時間的(歷史的)に又音韻論的に一步深く考へたのである。

實際の解釋を見るに記・紀・萬葉・舊事記・倭名抄等多くの古書を引用し、又史的事實を交へつゝ實證的に說くところ、日本釋名と著しい對象を爲す。釋義の方法に於いては平安朝末の歌學、仙覺抄等のそれを踏襲し、發語・詞助等に分解し、音通を說き音義を說く。所說頗る詳密、論考亦益軒よりも愼重で、日本釋名に比しては面目を新にしてゐる。併し彼の本領の學は國語になく、素養に缺くる所あり、益軒と相似た過誤を屢犯す。例へば民は田部の、繩は合ふの、妻はをとめの轉とし、又「う」に大の意ありとして海、大人を說き、「き」に下の意ありとして垣・關を說き、

板・糸の「い」を發語とし、園（その）の「の」、垣（かき）・門（かど）の「か」を語助とする等の論を見る。固より語源學の性質上正確を期し難い點あるも、國學者ならぬ彼の研究には素人らしい多くの過誤が存した。

白石の語學方面に對する關心はこれのみに止らず、采覽異言・西洋紀聞・古史通等にも見られ、又音韻を考へた東音譜、文字を研究した同文通考の如き注目すべき著もある。殊に同文通考は日本及支那に行はれた文字に就いて廣く考究した最初の業績で、四十項目を立てて先人の說をあげ自說を記す。その中神代文字・片假名・以呂波等の論考は次期の平田篤胤・伴信友の文字研究の先驅をなすものである。

四　士清の研究　士清（安永五年歿）の和訓栞（歿後五回に刊行、又活字本二種）は卷頭の大綱の條に於いて、古言・今言・語義・文字・音韻・假名遣・淸濁・方言・てにをは・音圖・聲調・音便・活用・漢字音等に就き系統なく諸說を記すが、その中方言に關しては知識甚だ廣く、田舍詞共通の特色の外、四國・美濃・三河・遠江・九州・土佐・阿波・尾張・若狹・伯耆・豐後・信濃・奧州・出雲・安藝・志摩・上總・安房等の方言の特色を記す如きは注目するに足る。

所收の語は五十音順に配列し、單語・熟語・慣用句・固有名詞・外來語・方言・俗語にまで及んで其數甚だ多く、資料とするの書は記・紀・萬葉等の古典は固より、歌集・歌學書・物語・日記・隨筆・註釋書類・歷史・歷史物語・說話集・記錄・有職故實書・辭書・漢籍・佛典等に及び、當時の國學者の敎養の全般に亘る空前の廣汎な資料に據つて自ら考究するの外、辭書・註釋書・歌學書等の解釋をよく採り用ゐ、その記述は簡潔で要を得て居り、又徒らなる推測に墮する語源の鑿穿に力を傾ける事をせず、說く所概ね妥當で東雅よりも著しく進んでゐる。又各地の方言・俗語を多く說き、外來語を載せ、時に語の時代を說く等尊重すべき用意を見る。釋義の方法として、反切・助語・音通・發語・略音・約言等を以て

する事は從來と異らないが、その方法の適用に益軒・白石の如き無理が少い。

固より單語の性質が分明でなく、又用言の語尾を反切・助語で說くものがあり、同音多義の語を雜然と集め、固有名詞・慣用句を交へる等、解釋及び編述の方式に多くの缺陷があるとは云へ、之を前代の辭書に比する時、質的にも量的にもその發達に隔世の感があり、國語辭書はこの書によつて初めて本格的業績を得たものと云へる。益軒・白石の不成功に比して士清の成功を得た所以は、(一)彼の國學の素養の豐であつた事、(二)强ひて語源的解釋を求めず、廣汎な資料に基く客觀的考究及び記述を爲した事、(三)彼の學問の正確であつた事等にその理由を認むべく、正確の學風は日本書紀通證に於いても亦見られ、實に士清の學の特色であつた。

日本釋名より十數年後に東雅成り、東雅の後大凡五十餘年を經た頃和訓栞成る。東雅は日本釋名を見、和訓栞は東雅をみて共に前著とその用意を異にしたが、益軒・白石の教養の近似はこの二著の傾向を等しくせしめ、獨り和訓栞のみは辭書として一段の進展を見せた。固より前期の諸種の辭書より直ちに和訓栞に接續すべきものではなく、そが出現の歷史的過程としては、勃興した國學を背景としつゝも、前期の辭書との間に東雅の如き先行辭書の介在する事も甚だ自然なるを覺える。こは單に和訓栞が東雅の如きを用ゐてゐると云ふ意味に於いてではなく、國語そのものを釋する態度に於いて、釋名・東雅の如きは前期になく、多くの差異を有し乍らも和訓栞とこの重要なる點に於いて共通し先行するを以てゞある。

五　歌語方言の研究　和訓栞の如き廣汎なものでなく、特殊な歌語又は歌集・物語等の語を對象とした書も少からず出た。歌語解釋の書には北村季吟の和歌詞之抄、中堀僖庵の萩の栞、楫取魚彥の楢の嬬手等があり、枕詞を釋した

ものには長流の枕詞燭明抄、契沖の代匠記（卷頭）、眞淵の冠辭考、服部高保の續冠辭考、楫取魚彥の續冠辭考、上田秋成の冠辭考續貂等が出た。又萬葉集中の語を釋したものには、海北若沖の萬葉集類林、堯以の作かと云はれる萬葉集見安（萬治四年刊）、池永秦良の萬葉集安見補正（寛政八年成）、五井純禎の萬葉集詁等が出、源氏物語の語を釋したものには契沖の源偶篇、五井純禎の源語詁等が出た。これらは必しも辭書の體を備へるものではないが註釋書とも異り、語句を摘出して解する點に於いて、特殊辭書とも云はるべき性質がある。併し之らの中、冠辭考その他一二を除く外は概して釋義の上に多くの價値を有するものではなかつた。かゝる雅言と反對の方言卑語の研究も亦行はれた。

　應仁の大亂以來京都には諸國の武士が入つてその言葉を亂したが、信長秀吉と打續いて勢威を張るに及んで尾張方言が多く入つたと云ふ。かくて世の動亂と共に變り行く言葉に對する歎息は、標準語・卑俗語の意識をも生ぜしめる事ともなつたが、他方に於いて德川の治下となり諸國の人々の往來が繁くなるに伴ひ、各地方語の接觸の機會を多くし、方言の意識を著しく進める事ともなつた。かくて前に白石・士淸等の方言への關心をみたが、この問題は早くから注目されて居り、著しいものとしては主として前者の意味を持つ安原貞室の片言（かたこと）（慶安三年刊）と、後者の意識に基く越谷吾山の物類稱呼（安永四年刊）とが出た。

　片言は貞室がその子に正常語と卑俗語とを識別せしめる爲に書き、約八百語を蒐集し、承認さるべき語、云ひ方、避くべき方言・訛語等を記すことを主とし、時に意義・語源・出典・故事・變遷等にも及んだ。その成立が戰國時代の國語錯亂期を承けて、京都の公家及文筆に携はる人々の間に生じた國語の規範意識に基く點に、意義深きものがある。この書よりも四五十年早く慶長年間に成るロドリゲスの日本語典（長崎吉利支丹學林刊）中にも、九州・中國・關

東等特有の音韻・語法等を記し、京都言葉の標準を說いた。又元祿八年刊の世話重寶記も、片言をも用ゐて俚諺・成句をいろは順にして意義出典を記し、訛言・訛音を記して正邪を示し、貝原好古の諺草(元祿十四年刊)も諺を記して意義出典と共に俗語・訛音を載せた。

物類稱呼は序に於いて「大凡我朝六十餘州のうちにても、山城と近江又美濃と尾張これらの國を境ひて西のかたつくしの果まで、人みな直音にして平聲おほく、北は越後信濃、東にいたりては常陸をよび奥羽の國々まで拗音にして上聲多きは、是風土水氣のしからしむるなれば、あながちに褒貶すべきにも非ず」とし、又「他鄕を知らざるの兒童に戶を出ずして略萬物に異名ある事をさとさしめて遠方より來れる友の詞を笑はしむるの罪をまぬかれしめんがために編」むと云ふ。方言を西部東部に大別した事、各方言の間に優劣を附すべきでないとした事、單にあるがまゝに諸國の方言を書く目的の下に成り規範意識を交へない事の三點は注目すべきである。

貞室の時代及彼が堂上文學の流を承けてゐた事等を考へる時、片言の標準語意識が理解されると共に、吾山が武州越谷の農家出の江戶の俳諧師なる事、その時代が貞室より百年以上後で、貞室が經驗した如き(又師貞德から敎へられた如き)國語混亂の意識を持たなかつた事等が、片言と異る意企の方言書を作らしめたものと考へしめる。かくて天地・人倫・動物・生植・器用・衣食・言語の部類に約五百五十言を配して諸國の方言を記載し、又時に意義・語源・轉訛等の說明をも加へた。「街談巷說を聞るにしたがひてしるし侍」と云ふが、江戶に集る諸國人より得たらしく、蒐集の範圍は全國に亘り、我國最初の全國的方言辭書であつた。この後も江戶の言葉と各藩の言葉との對照の必要より各地の方言書が數多く作られたが、この書の如く全國的のものはなかつた。要するに德川氏の封建制度は各地に方

言を發生せしめると共に、又相互に相通ぜしめる機會をも與へ、以て多くの方言書が作られる事ともなつたが、それらは標準語意識によつて作成せられると云ふよりも、物類稱呼の如く通用を主たる目的としたのであつた。

四　荷田春滿と賀茂眞淵の研究

一　**春滿の學**　春滿の學に於ける萬葉・伊勢等の研究は契沖の學と共通し、記・紀・續紀・三代實錄・令等の神道・歷史・制度等の學は契沖になく、新に內容を增した。又契沖と實證的語學的方法は等しくし乍ら、契沖の專ら分析的であつたのに比して、幾分綜合的に觀察し、又客觀的であつたのに比して、理想化・規範化の傾向を帶び、以て學の對象に對して一層深い意識を持ち、古代文化の理念に硏究の統一原理を樹てた。古語の考究に創見豐かなるものはあつたが、彼の國學史上に於けるかかる地步は、その硏究中に國語の形式的方面の學を發達せしめるに至らず、契沖に比しても弟子眞淵に比しても國語學的業績は乏しかつた。萬葉集僻案抄にも枕詞を冠辭とし、疑辭・發語辭・命令辭・助語辭・歎辭・決辭等を立て、又略言・約言を說く等の多少の考慮はみられるが、未だ前期歌學の方法の域を出ず、又これを統括する迄には至らなかつた。

二　**眞淵の學**　その弟子眞淵も亦學者であると共に、哲人的一面を有する古文明主義の思想家でもあり、萬葉調をよくする歌人でもあつた。その學は記・紀・萬葉より、平安朝の和歌・物語・歌謠等の註釋、國意考・歌意考・文意考・書意考等の論考、語意考・冠辭考等の國語學的硏究、その他故實・歌論等にも亘り頗る廣く、之等の硏究を貫くに上代素朴の文化を理想化した古文明主義の理念を以てした。かくて彼はこの理念を主として萬葉に於いて把握し、契沖・春滿に見なかつた獨自の內面的價値を認識し、古代主義者たると共に詩人たるの面目を遺憾なく示した。されば

ば彼も亦その業績の夥しいに關らず語學的研究乏しく、纔に冠辭考に於ける精緻な語義の探究と、語意考に於ける論考を見得るに過ぎない。

三　語意考　語意考は晩年の未定稿とも云はれ極簡單で、記す所の大旨は、(一)國語の特性に對する見解と、(二)國語の理法の研究との二點にある。(一)國語の特性に就いては、支那印度は人心巧緻奸惡なため、事も言も繁多なるも、我國は人心純朴で事も言も少く僅に五十音で足るとし、言の意の明かになる活用は「天地の神祖の教へ給ひしことにして他國にはあらぬ言」で、音圖は「いともたふとき神ならふ代に天御孫命の御代の千五百代にもかはらぬ國のもとをしめさせ賜ひしもの」と云ふ。(二)國語理法の考究は、(イ)用言の活用、(ロ)音韻變化の現象の二を主要事項とする。(イ)活用は音圖の横の列に活く意味を考へ、あ列は事を初めておこす初めの音(行かん・こさん等)、い列は體音(かゝぶり・おふぎ等)、う列は用音(かぶる・あふぐ等)、え列は令音(なせ・行け等)、お列は助音とした。但しお列はその理種々で、あらゆる言の下についてその言を助け理を分つものとして別に說き、實例に於いては第五音、行こ・臥そ・打と等は行かも・臥さも・打たもの約で、平言とした。なほ活用言を各行に亘つて表示する所もあるが、まだ整備されてゐない。併し四段活用形の外に助動詞を伴はしめたものもあり、今後の活用研究への暗示とはなつたであらう。(ロ)音韻に就いては延言(花ちるを花ちらふ、うつるをうつらふ等)、約言(にぎたへをにぎて、わがいもこをわぎもこ等)、略言(過去を過にし、うら〳〵をうらら等)等はその事實の既に知られてゐたものを確實な概念とし、清濁に就いては、ば行とま行(神奈備を神奈美、加夫利を加武利等)、ざ行とな行(しらじをしらに、見ずと見ぬ等)、だ行とな行(かだしをかなし、おどれをおのれ等)、が行とら行(たぎとたり、わごとわろ等)の通用を說き、漢

字音にも馬美武米母を呉音はまみむめも、漢音はばびぶべぼとし、又儺爾弩禰廼を呉音はなにぬねの、漢音はだぢづでどとする等と、呉漢二音にかゝる現象の存する事を云ふ。その他古に於ける清・濁・文字の通用・連濁・形容詞の音便等についても說く所があつた。

眞淵の國語優越性の主張は春滿に發した國家思想が獨特の古文明主義に結實した結果とみるべく、宣長・篤胤に於いては更に發展をみせた。音韻に於いては在來の諸說を明確に概念化し、又整理する事を主とした。活用に就いては谷川士清も日本書紀通證の附錄で音圖に基いて表示する所があつた。「遇、アイウエヲ」「書、カキクケコ」「指、サシスセソ」の如きで、あ列は「聲韻一體」、い列は「未定」、う列は「已定」、・え列は「告人」、お列は「自言」とし、その中お列は雅語でなく詠歌・讀書に用ゐぬとした。第五音に對する考へは眞淵に相通ずるものがあり、その他の横列の意味の考方に至つては眞淵の密にして深きに及ばない。かくの如く音圖によつて活用を說明する基礎は第一期の末に出來てゐたが、略時を同じうして音圖の各行に語を配して活用せしめ、且各列の意味を考へたこの二說を見、しかも共に機械的で多くの缺陷があつたとは云へ、今後の發展への基礎とはなつたのである。

四　冠辭考　冠辭考(寶曆七年刊)は冠辭卽枕詞の蒐集及その意義の探究に於いて一新時期を劃した。長流は枕詞燭明抄で百餘を集めて釋し、契沖も代匠記總釋で三百數十を擧げ、その多くに釋した。併しこの二書は枕詞の概念明確でなく、時に序詞・修飾句の如きをも入れ、釋義亦不充分であつた。眞淵は師春滿に從つてこれを冠辭とし、こは歌の言葉の足らぬ所をよそひ、調べをととのへるものとし、その由來を考へて、「ひさかたのあめは象(カタチ)をたとへ、そらみつやまとはゆゑをいひ、ちはやぶる神は性(さが)をあげ、たらちねのはゝはもとをたとへ、弱草(わかくさ)のつまはたぐひをなん引

ける」と五種を云ひ、その多くは上代より云ひ、藤原奈良朝に起るものは少いとした。かくてその數約三百三十を釋したが、古書をよく採り用ゐて考へ、且つ甚だ創見に富み、彼の語學者としての面目、及古語研究の學問的態度を最も見るに足るものである。

五　てにをは研究と富士谷成章の研究

一　本期のてにをは研究概說　手爾葉大概鈔以來てにをは研究の眼目は、各の持つ意義と歌の結びに及ぼす制約とにあつた。この期に於いてもこの二點に研究の主點が向けられ、前者に主力を注いだ富士谷と、後者を主とした本居との研究は最も輝しいものであつた。併し前期の末の研究を承けて、直ちにこの二人の研究に至るものではなく、本期の初頭に過度的意義を持つ業績が存した。遁危子の著和歌童翫抄（寶暦四年刊）は、主として歌の留めに就いて今迄の諸説をまとめてゐる。雀部信頬の手爾乎波義慣抄（寶暦十年成）及び栂井通敏のてにをは綱引綱（明和七年刊）は、富士谷・本居への先驅的意義を充分に持つ。

二　手爾乎波義慣抄　義慣抄はてにをはは神代より定まり、それに違つては言文共に意味通じ難い。その種類には「元にめぐらす有、今のたぐひ有、後をかけたる有、ねがひ有、いひすつる有、程ふる有、添へ足らしむる有」この數々を辨へるが作歌の基だとし、加・太・奈・波・也・良・幾・之・仁等三十餘をあげ、更に例へば「奈」は下知するな、そへたる奈、かなとまり、哉を略するか、「之」はいひながすし、過去現在のし、やすめのし、らしのてにをは、ましのとまり等と細分し、各意義・用法を說き、古今集の歌を引いて例とした。

注目すべき點は、（一）諸說を集めると共に多くの例歌をあげ、時に百・二百に及び、著しく實證的なる事、（二）係

結の關係の意識が甚だ進んでゐる事等である。「こそ」の係を說き又「ぞ」「や」「か」「の」等が五音第三の音又は「き」「し」で止るとするのみでなく「は」及び「も」にも結びに及ぼす一種の制約力を認めた。卽ち「ぞ」と云つて「る」と留るべきを「は」又は「も」と置きかへて「り」となるとし「心づくしの秋は來にけり。」「ぬば玉のやみのうつゝはさだかなるゆめにいくらもまさらざりけり。」等「は」に對するけり・なり・べらなり等の結びの例數十を擧げ「も」も亦同樣だとして「奈良の都もうきなりけり。」「山のあなたもおしむべらなり。」等の例をあげた。又「ぞ」と云ふと「き」と止るが「は」又は「も」とすると「し」となるとして例歌二十餘を擧げ、なほ係がなくてもかゝる結びが行はれるとして其例をも擧げた。本居の第一類の係「は・も・徒」は說く所未だしいとは云へ、全部注目されて居り、第二類の「ぞ・の・や・何」（補はるべき「か」迄も）、第三類の「こそ」も注目せられてゐて、本居への先驅的意義が多分に認められる。

三　てにをは網引綱　網引綱は義慣抄に比して所說精緻とはし難いが、秘傳秘說を破し、自由な立場から說をなす態度が著しく、見識の見るべきもの亦少しとしない。序文に於いててにをはの語につき、出葉とする舊說を排してをこと點に源すとし、てには大概鈔は定家の述作目錄になく明かに僞書である。又屋の字に十品ありとする如きは第一の不審で、かくの如き品目を立てて云ふは古人の敎へと見えぬ。春樹顯祕抄も亦詞とてにをは混雜して尤信じ難いとし、「てには用意の事」の條では「近代てにはの諸註に魂を入るてにはとて、たゞ・猶・さへ・だに・など・いとゞ等を出せり。この說いかゞ、さへだにはてにはにて、只・猶・など・いとゞ、は詞なるを相混じて抄出せる、その理なきに似たり。かゝる杜撰なる書を秘傳などいふ事、かたはらいたき事也」といふ。語詞の下につくべきてにをはと、上にあつて用言を修飾する副詞とを區別し、後者を「詞」としたのである。この混亂は春樹顯祕抄及同增抄・義慣抄等

にあるが、この識別を發展せしむれば富士谷の挿頭と脚結となる。又大概鈔・顯秘抄・同增抄等で「見ゆ」と留めるには五音第三の音でかゝえるとするを破し、何と見ゆ、何に見ゆとしてもよいとして、その證歌をひく等、秘傳を打破し實證的に說を立てる傾向が著しい。

かくて上卷では、「て・にて・とて・して」、「を・しを・物を」等のてにをは十三類六十餘を、下卷は主として「なる・けり・なり・也けり」、「たり・たる・たれ」等十六類の結びを說く。上卷では例へば「はの字は強く物をかぎり、その字は強く物をさしていふ心有」とする如くその意義を說き、下卷亦同樣であるが、活用形をあげて結びを說いた點は注目される。「けり・ける・けれ・けん・き」「めり・める・めれ・め」「たり・たる・たれ」等の形をあげ、これらの結びに緩急の意ありとして「ぞといへばけるとおさゆるはつまりて急なり、こそといへばけれといふはとまらざる意にして緩なり」等と說くは、本居の研究の先驅をなす。後に「くものすがき」を著し、その甲卷では網引綱で說き殘したてにをはを說き、乙卷では、唯・猶・早・先・いで・いさ・將・又・かつ・かつぐ・かて・かく等の虛字八十餘を說いた。但しこの書には安永九年の序文あれば、脚結抄・玉緒より後で、歷史的意義は專ら網引綱に存する。信頼・道敏の研究には多くの新見解を含むも、未だ理法としては確立されたものとは云ひ難く、ただ富士谷・本居等への過度的業績としての意義は充分に存する。

四　成章の語學概說　成章は舊派堂上の歌學を承けて、しかも獨創味豐かな研究をした。主著は挿頭抄（明和四年成）と脚結抄（安永七年刊）とする。言語を分類して挿頭（かざし）・裝（よそひ）・脚結（あゆひ）・物の名の四種とし「かしらにかさしあり、身によそひあり、足もとにあゆひ」（挿頭抄）があり、又「名をもて物をことはり、裝をもて事をさだめ、挿頭脚結をもてこと

はりをたすく」(脚結抄)といふ。挿頭抄はこの挿頭を説き、脚結抄は脚結を説くが、装を説くといふ装抄は傳はらず、脚結抄に記す裝圖を見得るのみである。前期の分類の「體」は「物の名」に、「用」は「裝」に、「てにをは」は「脚結」に相應する。新に入れた挿頭は歌文の上位にあつて、その下の語詞に一種の制約力即ち修飾作用を及ぼすものをいふ。かくの如き一類はすでに二條良基の歌林良材集の「虚字言葉」の條に多くの混雜はあるが、うたて・あやな・あやに・いさゝめ・けに・たまゆら等と擧げる所があり、前記道敏も注目してゐた。併しそれらは皆成章の如く、嚴密に分類された言語の一類たるの意味を持つのではなく、又道敏に至るまで往々にてにをはと同一視されてゐた。彼はてにをはは語詞の下に、かざしは上に位置するものと明瞭に區分し、言語の分類は著しく學問的性質を增した。

かくの如き分類とともに、又言語の歷史的變遷にも注目して時代區劃を立てた。挿頭抄では上古(萬葉まで)、中古(三代集頃)、中ころ(三代以後)、ちかき世(文治建久以後)、脚結抄では上つよ(光仁天皇まで)、中むかし(其後花山院まで)、中ごろ(後白河院まで)、近むかし(四條院まで)、をとつよ(後花園院まで)、今の世(其後)とした。各時代の特性、從つて區劃した理由に就いては述べないが、挿頭・脚結を説くに當つては、その意義用法にかゝる歷史的變遷の存することを説いた。固より言語の歷史性については古くから認められて居り、殊に白石の如きもそを强調したが、成章は語々に存する歷史性を説くと共に、一歩進んで時代區劃を試みたのであつた。

五　挿頭抄　挿頭抄ではかざし九十六種、二百二十餘語を五十音順に配列してその意義用法をとき例歌を示した。その中、あやに・いかが・いくばく・いさ・いさゝめに・いと等の副詞大部分を占め、あはれ・あな・いざ・やよや等の感動詞、あ・か・いづこ・なれ・おのれ等の代名詞及び小數の接續詞・接頭辭・連語等を含む。かくの如き一類

の概念を明確にして獨立せしめたことは偉とするも何等の體系もなく、又實際あげる所も混雜してその概念に相應しないものも多少交り、彼の研究の中では優れたものではない。

六　脚結抄　この書ではてにをはに、「屬(たぐひ)」五種、「家(いへ)」十九種、「倫(とも)」六種、「身」十二種、「隊(つら)」八種の一大組織を與へた。五種の屬とは、詠・疑・願・誂・禁をいひ、各は更に細分される。指す所は、や・よ・な・かな・か・かに・かは・はや等の類で「その心をとりてすべ」、「家」は、ぞ・を・は・も・に・と・し等の十九種で「そのたぐひをえらびてあつめ」、「屬」と共にただちに物の名に接屬する。「倫」は、べし・ず・ん・あり・ぬ・き等の助動詞の類で「其ことわりをもてよせ」「身」も、で・し・めり・なり・ゆく・あふ等の助動詞の類で立居(たちゐ)即ち普通によつて他に動き、「隊」はみ・く・け・かし・なべ等主として接尾辭の類で「倫」「身」に似て立居せず、又この三者は物の名を受けないとした。かくて各を種々に分けてその意義を微妙な心持の點にまで說き及ぼし、俗語譯を爲し例歌をあげて證とする等の事に力を注ぎ、又挿頭、脚結、及装の各活用形等との接續をも記した。

今この組織をみるに分釋原理の「心」と云ひ「ことはり」と云ふは意義より、立居の有無は語形より考へ一貫しないものもあるが、物の名への接續の有無による區分は義理明析である。個々に就いては多少の問題も存し、區劃法そのものの義理にも問題は存するとは云へ、（一）今迄雜然としてゐたてにをはを略類を以て概括した事、（二）資料豐富・考說精緻なる事、（三）他語との接續法を考慮してゐる事等は此書の存在を重からしめる。他面に於いて論考明快を缺くものもあり、又上位の語との接續を說くも下文に及ぼす制約力、即ち文の結びを論ずる所もない。蓋し脚結なる概念は上を受ける意味を專とし、そが係となり結となる相互關係を考慮に入れてゐない點に於いて宣長の見方と異る。

七　裝圖　裝には「事」と「狀」の二種が存し、事は更に今日の動詞を指す狹義の「事」と、ラ行變格有りを指す「孔」とに分れ、「狀」は「在」（裝圖では遙かなりを擧ぐ）、「芝」（形容詞のし活用早しを擧ぐ）、「鋪」（形容詞のしく活用戀しをあぐ）、「かへしざま」（圖にあげず）の四種とする。裝圖では「事」の例十二を擧げるが、今日より見れば、打つ・思ふ等の四段活用、得・捨つ等の下二段、落つ・恨む等の上二段、見るの上一段（但この中に入るべき居は、う・ゐ、と活かす）及び加行・佐行の變格を含み、これに「孔」及び「狀」を加へる時、動詞・形容詞の活用の種類は殆ど擧げつくされてゐる。

更に圖に於いてはその各の例について本・末・引又は靡・往・目・來・靡伏・伏目・立本なる活用形を示す。「本」は語幹に、「末」は終止形に略相應し、「引靡」は本又は末に「る」（芝・鋪はき）の、「靡伏」は「れ」の添ふもの、「往」は連用形、「目」は已然形、「來」は未然形に大體相應し、芝・鋪にのみは「伏目」の「け」、「立本」の「か」が存して「目」「來」「靡伏」は存しない。これを今日の活用形に照應する時、多少の混亂はあるが、活用形の種類を擧げつくして居り、「る」「れ」を添へ、又中心部に「往」「目」「來」の三活用形を立てた如きは、士清・眞淵の音圖そのまゝの機械的なものに比して飛躍的の進歩である。又裝を脚結抄の卷頭で概說した所以は、語詞の下につく各脚結が裝の如何なる語形に付屬するかを明にする必要によつた。從つて脚結に附屬すべき方式は說かれず、脚結が裝に附屬すべき方式が概括されることなく個々に於いて說かれた。要するに、（一）活用の種類をあげ、（二）活用形を考へ、（三）脚結との接續に思ひを及ぼした事の三點は、以前の考究に比して大なる進展とせねばならない。

八　富士谷學派　成章の學が言語全體を要素に分解して、その各（但「物の名」は自明として說かぬ）について考究し

た事は空前の偉觀であつたが、繼承者は本居學派に比して乏しく、纔にその子御杖(文政六年歿)と保田光則(明治三年歿)を得たにすぎぬ。御杖には記・萬葉・土佐日記、その他歌文の註釋及歌道の著書等が多く存した。語學方面では俳諧天爾波抄及脚結抄翼等があり、前者は脚結抄の說に依つて俳諧に用ゐるてにをはの意味・用法を述べ、後者は脚結抄の增補註解である。光則には挿頭抄の補訂をした挿頭抄增補、脚結抄の補訂解說をした脚結抄考、及脚結抄增補、傳はらぬ裝抄を補はうとする新撰裝抄等がある。本居學派に比して概して振はなかつた所以に就いては、或は術語の難解を以てする說もあるが、寧ろ本居學の內容豐富で、中心に新しい理想を懷いて熱情を持ち、甚だ學的魅力に富んでゐたに比して、學の門戶內容本居學に及ばず、又揭ぐべき新理想に乏しく、且學者としては比較的早世(安永八年四十二歲で歿)した點等を根本とすべきであらう。

六　本居宣長の研究

一　宣長學概說　宣長は京都遊學時代に早くも契沖の諸書に接して、その文獻學的態度方法に於いて啓發される所があつたが、三十四才の時眞淵に接して以來古道主義の精神を承け、古事記研究に學問の中心を得た。眞淵には一面道學的色彩が存し、老子の思想に好意をよせたが、宣長はそを排し、古典に於ける自らなる神道を唱へ、眞淵の理想化された古文明主義をより切實に古書に卽して理解しようとした。ここに契沖の實證主義の影響の存すると共に、契沖以上に出て古文明なるものを概括的に把握した點に、眞淵の古道主義の影響が認められる。よい意味に於いて契沖と眞淵の學を承け、眞淵の如く古道主義者であつて、しかも契沖の如く古典に卽した實證的研究家でもあつた。

かくて彼の學は古事記以下の神典を中心とした古道の學と、源氏物語以下の文學書を中心とした文學說と、廣く一

般古典の研究より得た語學說との三大部門を有した。彼自身は物まなびのすぢとして神學・有職の學・歷史・歌・物語の學等を舉げて語學を云はないにもかゝはらず、實際に於いて研究する所のあつたのは、それらの內容の學に對する基礎的勞作としてであり、未だ語學のための語學でなかつたことを意味する。それ自身が目的ではなかつたとしても、古書理解の、又歌文作成の缺くべからざる基礎として、國語に內在する理法乃至は古書に記載された語義・音訓の探究が爲された。國語理法の探究としては、主として中古の歌文より歸納されたてにをはの研究及び活用の研究が存し、理解の爲の考究は主として上古の文獻に就いて爲された音韻・字音の研究が存する。

二　てにをは研究　この研究は彼の語學中最も光彩のある部門で、天爾遠波紐鏡(明和八年刊)及詞玉緒(安永八年著)をその主著とする。紐鏡は係結の一枚の表で、玉緒はそれを豐富な例を以て解說し、且種々精細な考究を加へたものである。彼のてにをは觀の根本はその本末をかなへ合す點にあるとし、これを漢文の助字に比するはこの本末呼應の關係を知らぬ謬見だとした。紐鏡は三類の係結を表示し、係(彼の云ふ本)の第一類は「は・も・徒」(徒は係のなきもの)、第二類は「ぞ・の・や・何」(何はなに・なぞ・いかに・いかで・いつ・いづく・いづれ・たれ等の類)、第三類は「こそ」とし、結(彼の云ふ末)はこの三類に應じて「し・き・けり」「き・し・しか」「ず・ぬ・ね」「り・る・れ」「なり・なる・なれ」「けり・ける・けれ」「つゝ・つる・つれ」「す・する・すれ」等と三轉するとして四十三の例をあげた。即ち終止形・連體形・已然形の三種の活用形をあげて、三類の係に對する結びを示したのである。

玉緒第一卷ではこの三轉の證歌を二首宛舉げ(但缺くもあり)、第二・三・四・五卷はこれら及その他のてにをはの樣々なる場合の意義用法を細說し、六卷は結び辭の意義用法を說き、七卷は古風の部及文章の部とする。古風の部で

は王轉の法が行はれながらもなほ別に存した上古特有のてにをはを、主として萬葉集に就いて說き、文章の部では古今集序・伊勢・土佐・源氏等の假名文について檢し、前に明らめた法則は古今に又歌文に通ずる大道なりとした。

彼のてにをは研究は三類の係結を中心としてゐる點に於いて成章と著しく異る。固よりこの三類に盡きるのではなく、そを考究の中心としつゝ廣く一般のてにをはにつき、その意義、歌文の斷續に及ぼす機能、三類以外の呼應、重ねるもの、單獨に用ゐるもの等をも考究した。係結に關係のない、かな・かも・かに・かや・はや・ばや・と・とも・を・ど・ども・に・て・で・み・よ・てよ・ね・し・しも・らく・まく・まし・しか等を說くことも多い。これは彼が專ら揭言しててにをはの要訣は本末をかなへ合すにあるとする事とは合はず、又實際かゝる形式的職能以上に各個の意義を說くが、主とする所は呼應を中心としたと云へる。從つて係に應ずる結びには動詞の活用を導入した。三類以外のてにをはの雜然としてゐた點は、成章が全部に體系を與へたに比して遜色なきを得ないが、三類の設定は又成章の及ぶ所でなかつた。

第二類・第三類の係は早くより略知られて居り、第一類も義慣抄で注目してゐた。又前述の網引綱の諸種の考究もその先驅的意義なしとしないが、殊に「てにをはの義數品あるやうなれども所詮は切ると續くとの二つ也、文章に句讀あるがごとし、句讀を辨ふればその理よく明也、歌もてにをはの切ると續くとのふたつにて一首の道理はとゝのふへし」と云ふ如きは宣長の考究の中樞と相通ずる。網引綱が宣長の藏書目錄中に存し、又その藏書印ある書の現存（山田孝雄博士藏）する所から考へても、彼の研究に網引綱の影響の存する事は否定し得ない。かくの如き總ての先行條件を考慮に入れても、猶彼の研究の卓越せる事を否認する理由とはならぬ。何となればそれらの總ては研究のいとぐ

ちを示すに止り、そを整備し、確立するためには廣汎な資料に立つ證明、優れたる論考を必要とし、そのわざこそ最も學問的意義に富むからである。

又宣長の文獻本位の研究に比して成章の研究は凡てに亘つて思惟的、天才的傾向を帶びてゐた。そのてにをは研究には皆川淇園の漢文の助字研究の影響も考へられるが、そは示唆の程度に止り、その本質をなす分類・意義・用法の考究の如きは在來の研究の上に、獨創的な考究を進めたものとすべきである。脚結抄より紐鏡は二年早く、玉緒は七年後になり、略時を同じくして二人の書は出來たが、互に影響の認むべきものなく、歴史的には大概鈔以來存した二つの研究方向を互に異る方面に發展せしめたものと考ふべきである。

三　活用の研究　この方面の主著は御國詞活用抄であるが、玉緒にも亦見るべきものがある。終止・連體・已然の三活用形をあげ、「き・し・しか」「ず・ぬ・ね」等他行に亘る活用までもよく整備したが、又活用形の意義及活用形とてにをはとの接續に就いても考慮をしてゐた。玉の緒三卷ばの條で「濁るばに、既に然る事をいふと、未ダㇾ然ラ事をかねていふとの二つあり、既に然る事をいふは花さけば、花ちれば、月出れば、月入れば、などのごとし、未ダㇾ然ラル事ハをかねていふは花さかば、花ちらば、月いでば、月いらばなどの如し」とし、既に然る事を云ふ「ば」は、「ど」「ども」と相對ひ（咲けども、見れども等）、未だ然らざる事をかねて云ふ「ば」は上を轉じて「と」「とも」（花咲くとも、月出づとも等）に續くものと相對すると云ふ。

これと三類の結びとを合せると活用形に存する未然・終止（切る格と云）・連體（つゞく格と云ふ）・既然等の意味の意識が窺へる。又、玉緒より六年後に刊行された漢字三音考に於いては、四段活用に就いて、第一音は未だ然らざる

に、第二音は方に然るを下へ云ひおくるに、第三音は方に然るを云ひ定むるに、第四音は然せよと令するに用ゐ、第五音は用ゐぬとした。ここに於いて連用形・命令形の意義が考へられて居り、東條義門の活用形の考説の如きは纔に今一段の進展によつて生れ出るの素地が出來てゐる。

又「は」及び「ど」「ども」「と」「とも」と用言の接續に一定の活用形と結ばるべき法格の存する事をも意識してゐるが、この用言とてにをはとの接續に就いては屢言及した。例へば文の中にある「や」は必ずつゞく格の辭より受け、文の結びにくる「や」は必ず切れる格の辭より受けるとし(あるや戀しき、なきや悲しき等とありや・なしや・見ずや等)、更に「いづれのてにをはにも皆つゞく辭より受ると、切るゝ辭より受るとの定まりは有事なり」(四卷)と云ふ。又文の終りの「か」(あるか・なきか等)はつゞく辭の格より受け、「や」が切れる辭の格より受けると異ると、接續法の相違を述べ、又「と」「かし」は切れる格の辭につゞき、「こそ」の結びの格は、「仰する辭」となり、又「ば」「ど」へつゞくといふ(五卷)。玉緒本來の研究意企が歌文の切れると續くとの法式を考究するにあるならば、廣く用言との接續法も考慮せねばならぬ。従つて言及する所のあるは當然であるが、活用言とてにをはとの接續の一般的考究は缺いだ。かくてこの玉緒の示唆と、御國詞活用抄とに基いて、次期に活語斷續譜・詞八衢等が出來たのである。

御國詞活用抄は語尾變化を基として、二千二百數十の活用言を二十七會に分類蒐集したものである。第一會より第六會までは四段活用(第六會の後に、あり・をり、等を附記し「り」が終止となる點を特異とした)、七會より十五會までは下二段、十五會より二十二會迄は上二段(さ行・な行變格を上二段の形にあぐ)、二十三會は下一段、二十四會はさ行・か行變格を上二段の形に、二十五會は上一段及下一段、二十六・二十七會は形容詞を擧げる。この中四段の

みは全活用形を示すが、一段二段は「れ」を添へず、形容詞も「けれ」を缺いで不完全な形である。多くの資料の蒐集と一應の分類を了したもので、こは將來の研究への準備的事業とも見られる。要するに宣長の活用研究は成章の深さはなくて廣く、且玉緒の活用研究への關與にしても活用抄にしても、共にそれ自身の價値よりも將來の發展への契機たるの意義が著しい。

四　音韻　宣長の音韻研究は國語音と漢字音の研究を交へ、その主著は字音假字用格（安永四年成）漢字三音考（天明五年刊）地名字音轉用例（寛政十二年成）及び上田秋成との論爭の書、呵刈葭（天明七年成）の四部とする。字音の學は享祿年間に韻鏡の刊行があつて以來、これを中心として漸次盛となり、眞淵と略時を同じうして釋文雄（寶曆十三年歿）が磨光韻鏡（延享四年刊）三音正譌（寶曆二年刊）等の書を著してより、音韻書としての面目を發揮するに至り、宣長の字音の學も亦文雄に負ふ所があつた。國語音に就いては、（イ）國語音の優越の主張、（ロ）音便の研究、（ハ）鼻音及國語音に關する秋成との論爭、（ニ）喉音三行及オヲ所屬の考說等を著しいものとし、字音に就いては、（ホ）字音及その歷史、（ヘ）上代の地名記載の字音の特殊性の研究等を主なものとする。

（イ）國語音優越の主張は漢字三音考に於いて見られる。萬國の主長たる皇國は萬事萬物皆勝れてゐるが、殊に人の聲音言語の正しく美しい事は遙に萬國に優り、其音淸朗にしていさゝかも曇りなく、又單直にして迂曲る事なく、眞に天地間の純粹正雅の音である。五十音は一もこれに加除すべからざる人の正音を全備し、この外は皆鳥獸萬物の聲に近く溷雜不正の音である。外國の音は不分明・溷雜・紆曲・急促にして鼻音・半濁音を正音とし、鳥獸萬物の聲に近く皆不正なるに、皇國の聲音言語を侏離鴃舌等と云ふは「近世狂儒輩」の迷妄なりとした。

(ロ)音便の研究は漢字三音考の附錄に見え、皇國の古言は五十音以外の溷雜不正の音を交へず、字音も賤しめて皇國言に近く轉じて呼んだが、漢字に馴れると次第に賤しき字音を交へ、遂に國語音に音便が生じたとして五種の音便を說いた。即ち(一)イと云音便(后をきさい、詩歌をしいか等)(二)ウと云音便(小路をこうぢ、思ひてを思うて等)(三)ンと云音便(南をみんなみ、重みすをおもんず等)(四)急促る音便(全をまつたく、以てをもつて等)(五)ハヒフヘホの半濁の音便(南風・もつぱら・あつぱれ等)を詳細に說き、こは凡て漢字音に存する現象で、それより移つたものとし、此中イ・ウの音便はやゝ正しく古くより存し、「ン」は不正の聲で古くは見えず、促音・半濁音は殊に不正鄙俚の音なる故中古まではなく、今も歌物語等をよむに交へないとし、又「ン」は後世の文字で古くは「ム」と書き「ム」と發音したが、後世訛つて「ン」と呼び「ム」「ン」を混ずるに至つたと說く。例證豐富、事實の說明は傾聽すべきも、正不正の標準に至つては言語發達の歷史的考慮を缺き、專ら五十音を正雅として他を非とする點、白石よりも固陋であり、上田秋成の攻擊する所ともなつた。

(ハ)秋成は古代に「ン」の音なしとする宣長の說を非とし、假令文字はなくとも連聲に隨ひて自然に「ン」の音あるべく、漢字には「ン」の韻ある事明らかで、萬葉集に見點、告兼、行覽等とあるは、「ン」音なるべく、單獨に記すには字なき故武・牟・舞・無等で表はしたとしても、自然に「ン」ともよまるべきであると主張した。宣長は自然に發し得るとしても不正なる故古代は言語に用ゐず、又てん・けん・らん等もてむ・けむ・らむと定かに云つたが、點・兼・覽等の「ン」は「ム」に近い故借りたに過ぎず、「ム」もその發音に馴れれば決して不便ではないとした。又秋成は他國の音は長いが故に不正とするならば、萬國が日本の音は單直なるが故に不正と云はゞ何とすべきか、單直が正、長きが不

正と云ふは宣長個人の考へにすぎないとした。之に對し萬國に同じきが正なる場合もあり、異るが正なる場合もある。皇統無窮の如きは萬國に異つて正なる例で、國語音亦之に同じきものと云ふ。「ン」の存在の論は秋成は論證不充分であつたが、正不正の論は理論的に透徹せるものとすべく、宣長は文獻に憑據しつゝも、自ら自國尊重の信念の學說に混淆するを免れなかつた。

(ニ)字音假字用格は其初に喉音三行辨、次にオヲ所屬辨があり、前者に於いては喉音にあ行・や行・わ行の差別の生じた所以(イ・エにあ行五音重なりてや行となり、ウ・オに重なりてわ行となるとす)及三行音の輕重等を說き、後者では從來の音圖に於いてあ行に「ヲ」わ行に「オ」を所屬せしめた誤りを正した。その論證の主要點は五音相通の事實(息と於伎、阿多古と於多岐通ひ、居と乎流、多和夜米と多乎夜女と通ふ等)、古代に一字の地名に韻を添へて二字とした際「オ」が添へられてゐる事(和泉郷名呼唹、參河郡名寶飫、日向郡名都唹等)、古歌の字餘りの句はアイウエオに限られてゐる事等である。この所屬は鎌倉時代の頃より誤られ、契沖の如きも音通を說くに際し「ワ」と「ヲ」、「ア」と「オ」は隈ちがひに通ふ等とし、成章亦挿頭抄で誤り脚結抄で訂正したが、脚結抄の刊行は字音假字用格刊行の後であり、又論證を缺き、この訂正は宣長の功績とすべきである。

(ホ)字音假名に就いては字音假字用格に於いて、既述二項の次に字音假字總論、字音假字三會圖說の二項を論述して後、字音假名の實際を列擧した。又その初の部で國語音の優越を強調した漢字三音考は、それに續いて漢字三音即ち吳音・漢音・唐音の性質、我國に傳來の歷史、その優劣等を記し、吳音最も古く傳來し、漢音はその後に入り、皆我國の音によつて正されたが、兩者の中、吳音は國語音に近くて漢音より正しく、唐音は近世の音で最も不正溷濁な

りとした。

（へ）上代の地名記載の字音の特異性に就いては地名字音轉用例で研究した。古代に於いては諸の國・郡・郷の名を文字に關らず身刺・針間・多遲麻等と書いたが、後好字（和銅六年の詔）二字の嘉名（延喜式）に改めるべき事となり、尋常の假字又は字音ではその名に叶ひ難く、字音を種々に轉じ特異の用法を以てこれに充てたとし、地名の稱呼のその字の本音に合はないものを聚めて條理を立てて轉用を説いた。例へば「ウ」の韻をカ行に轉じたもの（相模・相樂等）、（ン）の韻をマ行に用ゐたもの（安曇・印南等）、「ン」の韻をナ行に用ゐたもの（信濃・讃岐等）等二十餘項に類別して轉用の事實を明にし、以てそれらの稱呼が後世の訛音でない事を明にした。

宣長の音韻論は著しく玉石混淆の觀を呈し、オヲ所屬辨の如き卓説、地名地音轉用例の如き新分野の開拓、音便の如き總括的研究等の貴い業績を含み乍ら、音韻の一般論になるとやゝもすれば自國語尊重の思想を學説に混ずる傾向が著しかつた。蓋してにをは活用等は國語内の理法の研究であるが、音韻論は直ちに他國音との比較に亘るが故に、國家的精神の自らなる發現をそこにみたものとすべく、吾人はそれらを拂拭し去つたあとに、彼の研究の赤裸々なる相を看取すべきである。

五　用字法其他　記傳の卷頭に於いて記の用字法を假字書・正字・借字・これらの混用、及慣用法とし、又續紀以下の書は假字の清濁音訓混淆するも、記・紀・萬葉は清濁の別が明かであり、殊に記・紀は假字に字音のみを用ゐ、その中紀は漢音・呉音を交へ、又一字を三四音に通用せしめるが、記は呉音のみをとり、且一字は唯一音に用ゐ、最も古語を正確に記すものとした。或は訓法に對する種々の考慮を致し、或は助字（之・於・者・而・矣・乎・哉等）を

考へる等、周到な用意の程を示す。萬葉集研究をした契沖も、日本紀の研究をした士清も、各の書の假字訓法に就いて考察する所はあつたが、宣長の如く周到精密ではなかつた。

宣長のかくの如き用字法の研究を更に發展せしめたのを石塚龍麿（天保六年歿）の假名遣奥山路（寛政十年序）とする。古事記の假名につき、同音の假名も語によつて使用に定まりのある事を發見した宣長の研究を承けて、廣く上代文獻に於ける假名の用法を調べ、エ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ヌ・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロの十三（記には此外チ・モあり）の萬葉假名が二類に分れ、同類は相通じ異類には相通ぜず、語によつて定まりの存することを明にした。これ上代の音聲に於ける多様の區別をも推測せしめ、意義深き研究であつた。なほ龍麿は古言清濁考（寛政六年序享和元年刊）に於いても記・紀・萬葉等に於ける古言清濁（清音・濁音・清濁通用等）の事を明かにし、又次期に於いて奥村榮實は古言衣延辨（文政十二年成）によつて、ヤ行の「エ」とア行の「エ」が上代に於いて區別されてゐた事を用字上より論證した。かくの如き上代文獻の用字法の研究は延いて上代音の研究ともなり、宣長の用字法の考察は實に意義多き發展をしたのであつた。

宣長は語學を本領とはせず、上古・中古を對象とした文獻學の廣大な規模の中に於いての文化の究明を主目的としつゝ、その文獻の形式たる言語の研究をもしたのであつた。從つて未だ多くの粗雜さを包含し、次期の補正を受けなければならなかつたが、總じてその研究は開拓的意義に富むものであつた。

而して次期の東條義門の研究を以て宣長の研究よりも優れたものとする說が存するが、それは學の絕對的價値よりみる見方であつて、歴史的意義に於ては、宣長の研究は義門に優るとも決して劣るものではない。

第四章　第三期の研究

一　第三期研究の概觀

本期の研究は殆ど皆第二期研究の課題の繼承にあつた。第二期の研究は假令第一期の問題を繼承したとは云へ、對象に於いて、方法に於いて、又意義に於いて、殆ど更改されたのであつたが、第三期の研究はさる本質的意味に於ける變改をみない。從つてもし歷史的區劃を更に概括するならば、第二期と第三期とは合して一とし、その前と後とに三分する事も不可ではない。併し課題を繼承する所に自らなる發展があり、固より前期と異るものは存した。

蓋し第二期は新しい方法による課題の定立を主とし、未だ課題の解決にまで至らなかつた。少くとも多くの補正的考究を加へるべき契機を多分に藏した。便宜前期に併せ說いたとは云へ、復古假名遣の完成も實は本期に於いてであつたが、この問題のみは本質的部分を前期に於いて解決してゐた。活用研究の如きに至つては前期は殆ど發足點を示したのみで、本期の考究に俟つべきものが多かつた。てにをはも亦補正さるべきものがあり、前期に白石にみた文字の研究も大いに發展し、又微弱な存在を爲した音義思想は國語音尊重の思想と結んで遂に音義學派にまで發展した。かくの如き部分的研究の進展と共に、これを綜合的に觀察する言語分類の思想も起り、又多方面の研究を綜合する文典編纂の新傾向も發生したが、研究の主流は開拓された問題に對する細心の補訂に存した。從つて學の絕對價値は進められたが、新しい研究問題定立の創造力を缺き、又安定せる學風は壯大の氣魄と清新な味ひを示さないで、多くの末書的業績をも生んだ。

又本居の綜合的學風は漸く分化的傾向を帶び、神典を主とする者、歌物語を主とする者、語學に傾く者等を見るに至り、又學を主とするもの、道を主とするものも生じた。この中春庭・義門の如き語學を主とする研究家の業績には最もみるべきものがあり、强い國家的信念に燃える思想家的傾向の著しい者の研究には僻する所が多かつた。殊にこの國家思想と末學附會の學風との混淆は僻說の母胎ともなつた。

二　鈴木朖と本居春庭の研究

一　朖の語學と雅語音聲考　宣長の學を受けて語學方面に力を注いだものには、その子春庭と鈴木朖とがあり、本領を他に有しつゝ語學研究をもした者に、歿後の門人伴信友と平田篤胤とがある。朖はもと經學を主とし、後國學に力を致し、宣長に入門したもので、その著雅語音聲考(享和年間頃成、文化十三年刊)・言語四種論(文政七年刊)・活語斷續譜(八衢以前に稿成る)は皆小冊子にすぎないが、甚だ豐かな歷史的意義を持つ。その學の特色は着想見解の卓越せる點に存し、研究の精密さに於いては春庭・義門に一籌を輸してゐた。

雅語音聲考に於いては、言語は音聲を以て事物を象り寫す事が多いとして四種を說いた。卽ち鳥獸・虫の聲を寫す言(郭公のホトトキ、きぎしのキキ等)、人の聲を寫す言(吹くのフ、咳むのカ等)、萬物の聲を寫す言(轟くのトドロ、たたくのタタ等)、萬の形・有樣・意・しわざを寫す言(雲・曇・隈・濟・籠む・黑し等皆合口音なる上、クの音にその意ありとす)として多くの例を擧げた。又音聲と言語との關係を論じて、音聲の意は本で事狹く、言語の意は末で事廣く、この心のある音聲と心のない音聲とが共に言語を構成し、言語となつて後には言語の上の意が生じ、その意囀轉變化し以て萬事の用を爲す。言語の意盡くが音聲の意ではないが「言語ノマコトノ本ハ音聲」である故、諸外國の

言語とも互に符合する事があると云ふ。

言語に寫聲的起源の存する事は今日も承認されるところで、か丶る點に注目したのは彼の卓識とせねばならぬ。ただ個々の實例に至つて牽强の甚しきものがあり、又寫聲起源を當然占むべき地步以上に强調する嫌もある。彼の研究を音義說の源流の如く見る說が古く存し、又之を否認する見解が近く存する。彼自身としては音義說唱道の意企はなかつたとするも、この後の音義說と甚だ近似するもののある事は否定されない。例へば第四類の中に明・赤・有・鮮の「ア」とか晴る・張る・原・平・開くに對し「是ラ皆開口音ヲ以テ其有樣意バエヲウツシタルナリ」とか、すぶ〳〵・すぶ・窄(すぼし)のすぼ等は「其聲ト唱フルロノ形ニスボキサマアリ」とする如きは音義說と相通ずる。既に「萬ノ形有樣意シワザ」を寫すとする以上、か丶る傾向の發生は當然とすべく、寫聲說を本意とするとしても、か丶る傾向の存するを以て、後の音義派が眼をその始とみることは必しも無稽の言とすべきでない。(但良鎧・盛典・慧眼等の佛徒、或は其學に虛僞を交へると云はれた多田義俊等は前期に於いて音義說を唱へたが、そは研學の理想を持つ新國學者と同一視すべからざるものがあり、其說も亦學界より認められる事を得ず、舊國學の流派とも目すべきものであつた。)

二　言語四種論　この書は國語の四種類別、卽ち體の詞・てにをは・形狀(ありかた)の詞・作用(しわざ)の詞を說く。體の詞は「何ニテモ一方ニ定メテ指シ呼ブ名目ノ詞」で、形狀の詞と作用の詞はてにをはが附いてはたらき、前者は音圖第二の韻(形容詞の「レ」とラ行變格の「リ」とを指す)後者は第三の韻で終止し、その意前者は體に近く後者は作用を表はす。この三者は詞でさす所のあるに對し、てにをはは聲でさす所なく、詞を玉とすればてにをはをそを貫く緒、器物とすれば動かす手の如く、體の詞もてにをはを添へれば活語となり、「死活ノ詞ドモヲバ又テニヲハシテ貫連ネ、使ヒ動シテ

萬ノ詞トナル」と云ふ。又てにをはを六種に區分し、一、獨立せるもの(あはれ・やよ・いな等)、二、詞に先立つもの(はた・又・そも〳〵等)、三、詞の中間のてにをは(の・に・を・も等)、四、詞の後につくもの(か・かも・な・よ等)、五、活語の語尾、六、詞を活用せしむるものとした。

古くより存した體・用・てにをはの分類に基き、用を二分して四とし、この四者の概念を精密にした。而して用の語尾をてにをはとせば語幹のみが用となるの不合理をはじめ、多くの妥當ならざる見解も存するが、分類のみを專ら考究した業績は本書を嚆矢とする。用を形狀と作用とに分ける事は成章に淵源があり、仔細に檢すれば宣長にも亦その示唆が存するが、又所說に漢語との比較が多く見えその方面からも得る所なしとし難い。成章に比すれば、彼のてにをはの一・二は挿頭に相應し、三・四・五・六は略脚結に相應するが、その意義に於いては異るものがあり、又裝を分割して二とし、又體の詞の意義の限定の成章の皆無なのに比して、そを詳密にせる等多くの特色をみる。

三　活語斷續譜　この書は用言の活用とてにをはの接續關係を示す。神宮文庫本は活用形を八等とし、改訂した柳園叢書本は七段として、詞の八衢・和語說略圖よりの記入をみるが、これは後に記入したもので、述作はこの二書よりも古いとされる。今改訂本をみるに、横に宣長の御國詞活用抄の二十七會より代表語とラ行變格とを置き、縦に七段を劃して各活用形をこの悉くに充て、各段に接續すべきてにをはをあげ、或は終止を說く。從つて活用形及てにをはとの接續法に研究の特質をみ得る。

活用形は宣長の活用抄の語形に新に「れ」を添へ今日の全活用形をあげ成章の裝圖と近似する。今裝圖と比較するに第一段は裝圖の末、第二段は引靡及末(引靡を缺く所に末を充つ)第四段は往、第五段は靡伏及目(靡伏なきものに目

を充つ)、第六段は目、第七段は來に略相應する。たゞ第三段は二十六會まで二段と異らないで、僅に形容詞と良き の部に語形終止し機能連體形なるもの(青かる・惡しかる・有る)を擧げる。裝圖に存した空欄は埋めつくし、又誤謬(居をう・ゐ等と、思ふを思ほと活用さす)も訂正した。この考究が裝圖に基いてゐる事は認められるが、彼も亦多くの創意を以て改訂し、且難解な裝圖を解し易いものとした。次にこれらの活用形とてにをはとの斷續をみるに、第一段は切れ撥ね又「と」なげきの「や」「な」及「かし」等に接續するとし、第二段は下の詞につづくものとして接續するてにをはをあげるの外、ぞ・の・や・何を結びて終止するとした。以下各段皆接續すべきてにをはをあげるが、第五段は、「ば」「ど」につゞく外「こそ」の結びとし、第六段は命令の意の「よ」につゞくのみとする。

活用形とてにをはとの接續は既に成章と宣長とに考究をみたが、何れも斷片的記述で未だかくの如く概括されなかつた。即ちこの研究は宣長の玉緒の研究を發展整備せしめたものとすべく、斷續に關する玉緒の記述は略皆採られてゐる。例へば「と」につき「とはすべて切るる語をつゞくてにをは」とすれば、此書も第一段に前記三種をあげた後「此ニツマコトハツヅクニハアラズ、タダキレタル詞ヲウクルテニヲハ」だとし、又第六段の接續及結びの如きは玉緒から抽いたに止まる。これに反し脚結抄と比較すれば合致せぬものが頗る多く、活用形そのものには裝圖の影響が存するも、中心意企たる斷續の考究は玉緒を繼承して發展せしめたものとすべきである。この研究にも雅語音聲考・言語四種論に見た粗雜さが存し、次に春庭の手によつて整頓せられた。

四　詞八衢　春庭の業績は詞八衢(文化三年成五年刊)と詞通路(文政十一年序)とで共に用言の研究を主とする。前者に於いて注目すべきは、(一)活用の種類の整備、(二)活用形の整頓、(三)各活用形とてにをはとの接續の研究、

(四)活用言の實例の研究の四點にある。

(一)活用は四段の活・一段の活(今の上一段)・中二段の活(今の上二段)・下二段の四種最も多く、その外にし・き・しく」「し・き・く」と活く詞もあるが、加行のみで狭いとし(形容詞の活用に一言僻れたのである)、又加行・佐行・奈行の變格活用をも認めた。良行變格を四段の中に入れてはゐるが、變格たるの事實は認めて居り、下一段「蹴る」は採らないで古語「くうる」を採つて下二段とした。成章・宣長・朖にはかくの如き活用の種類の意識はなかつたが、彼が活用抄・斷續譜等よりこれを概括したのは偉とすべく、多少の留保の下に活用は彼によつて種類の識別を得たものと云へる。

(二)活用形は全活用に通じては五段とし、命令形のみは活用表に加へないで別に說いた。この五段は名目を與へてゐないが、意味を說く所はあつた。例へば四段活用に就いて云へば、第一の音はそのまゝでは未だ語を爲さず、第二の音は用言へ續き、第三の音は切れる詞と、體言へつゞく詞とを兼ね、第四の音はこその結となり、又下知の詞ともなると云ふ。卽ち指す所の實質に於いて今日の未然・連用・終止・連體・已然・命令の六形を具備し、考へる所の意義亦この名目を思はしむるに近い。この活用形は五十音圖に準據して、裝圖・活語斷續譜よりも遙かによく整頓したものとすべきである。

(三)各活用形に接續すべきてにをはも亦よく整備され、第一段には、ず・で・じ・ぬ・ん・まし等、第二段には、つつ・けり・き・けん・なば・ぬる・つる・し・しか等、第三段には、めり・らん・べき・らし・と・とも等、第四段には、かな・まで・に・を・より等、第五段には、ば・ど・ども、下知の詞には四段はそのまゝで他は「よ」を添

へるとした。固よりこは接續すべきてにをはの全部ではなく、代表的なものを選んだのであるが、宣長・朖の研究、就中斷續譜を甚だ要を得たさまに整備したのである。

(四)宣長の活用抄は單に用言を分類蒐集したに止まるが、八衢は蒐集すると共に屡出典を擧げ、又活用の變遷、或は疑はしきものの解說などを爲し、活用言そのものの研究を爲す所があつた。以上四項の中、(一)と(二)を此書の主眼點とすべく、(三)は(二)に聯關してその研究と表裏の關係を有し、(四)はこれらの考究の素材をなす。かくて活用の種類及活用形は此書によつて初めて充分な意味での學問的基礎が出來たと云へる。

五　詞通路　詞通路の主要項目は(一)詞の自他(二)詞の兼用(三)詞の延約(四)詞てに乎波のかゝる所の事の四點にある。(一)詞の自他に就いては、(イ)おのづから然る、みづから然る(驚く・退く等の自動)、(ロ)物を然する(驚かす・乾かす等の他動)、(ハ)他に然する(授くる・賜ふ等「を」「に」の目的を要する他動)、(ニ)他に然さする(退かする・碎かする等、使役で他動)、(ホ)おのづから然せらるる(防がるゝ・斬らるる等、可能で自動)、(ヘ)他に然せらるる(驚かさるる・退けらるゝ等、受身で自動)の六種を說く。自他に就いては宣長が「玉あられ」の中で、とく紐・たつる煙といへば人のするわざであり、とくる紐・たつ煙と云へばおのづからの事となると注目した。彼はそを發展せしめ、動詞の種々の表現形式を意味の上から精密に考へたのである。その自他は今日云ふ所と異り、動詞本來の性質によるものと、助動詞を伴ふものとが混淆し、又說く所必しも明快とはし難いが、彼の研究は遂に表現の微妙な意味にまでも及んで、著しく精密になつてゐる事を思ふべきである。(二)詞の兼用は懸詞の如き詞の用法を考究し、(三)詞の延約は活用言のみに就いて、延約の現象を整頓したものである。(四)詞天爾乎波のかゝる所の事では歌の語句の係結・修

飾等の修辭關係を説く。皆甚だ精密な考究の餘に成るも彼の語學上の功は八衢に存する。八衢は一新時期を劃し、この後增訂・解說等の書十數種を算し、八衢學を唱へられる迄になつた。前期に萠芽し成章・宣長によつて、更に脤によつて一段の進展をみた活用の學は、彼によつてよく整備されたが、なほ細部の補訂が義門の手によつて爲された。

三　東條義門と富樫廣蔭の研究

一　義門の語學と國語の分類　義門の特色は宣長・脤・春庭の研究を承けて、之を精密に補訂した點にある。眞宗の僧でその方面の著述もあるが、寧ろ語學に力を注ぎ業績が頗る多い。研究は廣範圍に亙るも主力は活用に注がれ、玉緖・八衢を承けた組織的方面と、個々の活用言に對する斷片的研究とが存した。その外音韻てにをは等の研究もあるが、それらと共に國語全體に對する總括的な一種の分類意識も、玉の緖繰分の卷末及活語指南の卷頭に於いて見られる。一切の言語を體言と用言とし、體を有形と無形、用を形狀と作用とし、體言無形の中には抽象名詞の外に助詞の如きを入れた。かくてにをはは活用の有無で分割され、一は體言の中に、一は用言の中に入る事となり、延いて助詞・助動詞に分割されるの因を爲した。

二　活用研究の體系的部門　この方面の中樞的業績は友鏡(文政六年刊)及和語說略圖(天保四年刊、同十三年增補)で前者は宣長の紐鏡を增訂し、後者はそを訂正し玉緖・八衢を總括して、活用とてにをはの接續とを圖示したものである。友鏡では紐鏡の三轉四十三段を五轉五十二段とし、その五轉に將然言・連用言・截斷言・連體言・已然言の名目を與へ、更に使令と名付ける一段を置いた。全活用形を擧げた事は紐鏡の改訂としては意味がないが、寧ろ用言の活用表としての意義が深い。和語說略圖は使令を希求言と改めて六段とし、各段に接續するてにをはを擧げるが、固

よりこは八衢に據り、てにをははより多くをあげた。

彼は活用の種類に就いては八衢の四段・下二段・中二段・一段・變格等を襲用し、又形容詞は現在としたが、助動詞の類は之を適當に概括する所はなかつた。形容詞・助動詞・動詞等の活用の全種類を擧げた點は八衢と異り、紐鏡に倣ひ、全活用形及びてにをはとの接續を說く點は紐鏡と異り八衢に倣つてゐる。而して續くてにをはとする中には活用言(助動詞)が存し、從つて先の分類と相容れないものがあり、且八衢は動詞に限られた故、てにをはの接續は活用全部に通じたが、略圖では形容詞・助動詞を入れたため、てにをは中の助動詞類は必しも圖の活用の全部に接續しない。紐鏡八衢を包括した所に論理の徹底を缺くものがあり、又個々の活用形に就いては多少の問題も存するが、全活用形又活用の全種類及てにをはとの接續を一枚の圖表にし、今までの又彼の活用研究の樞要部を凝結せしめた所に意義深いものがある。この略圖を解說したものが活語指南(天保十五年刊)である。紐鏡に對する玉緒の如き關係にあるとは云へ、玉緒は紐鏡を離れた多くの研究を含んでゐたが、この書は殆ど略圖の解說以上に出ない。併し友鏡・略圖・指南の三者は義門の活用研究の體系的部門を爲すものであり、これをめぐる斷片的考究の業績が多く存した。

三　活用研究の斷片的部門　この方面の業績は山口栞三卷(文政初年成、天保七年刊)、活語雜話三卷(天保十年、十一年、十三年の三回に刊行)、活語餘論三卷(天保十三年序)、指出廼磯(文化十二年成、天保十四年刊)、磯の洲崎(文政三年成、天保十四年刊)等とする。山口栞は個々の活用言につきその活用、他の類似の活用との差異、又その意義等を古書に基いて考究するが、下卷に於ける形狀言の研究は特に注目すべきものがある。友鏡・略圖で初めて形容詞の全活用形をあげたが、この書は個々の形容詞を詳細に究明した。活語雜話も亦個々の活用に就いての斷片的研究八

十項目を集め、學術的價値に富む論考の多くを含む。活語餘論亦約九十の斷片的論考より成り、假名遣・音韻・文字等にも亘り、廣く國語學一般に關する隨筆とも云ふべきであるが、活用に關するものが特に多い。指出廼礒は活用研究の重要なことを實例と共に論じ、礒の洲崎に於いても亦活用の事實を說いてその研究の重要性を論述した。この斷片的部門に於いて彼は今迄の何人よりも深い活用研究のあとを示したのである。

四　てにをは及音韻の研究　玉緒を解說補訂して玉の緒繰分（天保十二年成、嘉永四年刊）を書いたが特に見るべき程のものはない。音韻の研究も亦宣長を繼承して於乎輕重義（文政十年成）及び男信（なましな）（天保六年成、同十三年刊）を成した。前者では宣長のおを所屬辨の論證の不充分な點を更に十五證を擧げて補ひ、後者では古代に於ける「ム」「ン」の音の區別を論證した。古書に於ける記載を檢するに「ム」と「ン」を表はすと思はれる文字に區別があり、それは韻鏡の法則に合致する。卽ち記・紀・萬葉等に於いて韻鏡臻山所攝の文字はナ行ラ行ガ行等に轉用し、深咸所攝の文字はマ行バ行等に轉用し、前者は「ン」後者は「ム」となるものとする。呵刈葭に於ける秋成の主張は論證を缺いたが、義門は「ム」「ン」の區別を推測し得る根據を論證したのである。

義門の研究は活用及音韻に於いてみるべきものがあり、その精密な學風は彼以前に開拓された語學の各方面に亘つて補訂をなすに適當してゐた。大きく概括し把握する方面に於いては長とする所でなく、又新研究の樹立もその任ではなかつた。彼の語學の全體は殆ど本居父子の開拓した範圍に止まり、その補訂に終始した如きは本期語學の傾向をよく代表する。活用の研究は彼以後に於いても多少の進展をみたが、その著しいものを富樫廣蔭とする。

五　富樫廣蔭の研究　廣蔭は親しく春庭に學び、同じく本居學を承けた義門とは對抗の地位にあり、玉の緒繰分は却

つて玉緒を繙らしたものとして、之を排した玉の緒解縺の著もある。注目すべきは詞八衢捷徑詞玉緒總括辭玉襷（文政十二年刊）と詞玉橋（文政九年成、弘化三年訂正、明治二十四年刊）とで、前者は簡單な圖表、後者はこの圖表を中心として諸種の考察にも及ぶ。玉橋は卷頭に於いて「言」「詞」「辭」の三分類を說き、言は體言を云ひ形言（月・花・山・川等物の形を指す）・様言（物・事・春・秋等事の様を云）、居言（謠・宿・戀等用言の連用形）、略言（歌・宿・長等語尾を省くもの）、合言（秋風・山川等）の五種、詞は用言を意味し、正格四種卽ち四韻詞（四段）一韻詞（一段）伊紆韻詞（中二段）衣紆韻詞（下二段）と變格（カ・サ・ナ・ラ行）及音雜詞（形容詞のシ及シク活用）の六種、辭は靜辭と動辭（前者は更に三種、後者は二種に分ける）とした。この中てにをはを活用のない靜辭卽ち助詞の類と、活用する動辭卽ち助動詞類とに分つた事は、義門にみた不合理を脫してゐる。元來助詞と助動詞は言語の運用辭たる點に於いて性質を一にし、これを廣くてにをはとした在來の概念は必しも雜駁を以て目すべきではない。併しこの期になつて活用に著しく注目するに至り、その點より從來のてにをはをみれば區劃さるべき外的形象がある。義門はかくて活用のない部を體言の中に入れ、活用ある部を用言に入れたが、こは明かに語の性質を無視してゐる。體言に入れられたてにをはは運用辭であり乍ら觀念語と同一視され、用言に入れられた部分は動詞・形容詞等の觀念語と同一視されてゐる。義門によつて體・用に分割歸屬せしめられたものを取戻して辭としてまとめると共に、そこに體言の如き形象の靜辭と、用言の如き形象の動辭を立てたことは、義門の分類よりはよく國語の本性に合致する。

辭玉襷に於いては四種の正格・變格・音雜詞の外に、動辭の名目を立てて助動詞の活用を圖表にのせ、義門の略圖よりもよりよく整頓し、活用形は未然段・續詞段・現然段（斷止段）・續言段・已然段・仰の六段とし、こ

の各活用形に接續すべき動辭及靜辭は「動靜辭繫様概略圖」に於いて表示した。即ち接續すべき助詞・助動詞がここに於いて明かに區劃された。詞玉橋は初に言語の分類をして後、動靜辭及用言の種々の研究を廣く集めるが故に、文典の形式を爲すとも云はれる。靜辭の部に於いては本居の三類の係を改訂し、第一類を「も・に・を・は・ば」とし、第二類を「の・が・ぞ・や・か」とした。「徒ノ結トイフハ有マジキ道理ナレバ、徒トアル中ヨリに・を・ばノ三ツヲ取出テ上ニ係ナキハ斷テ止ルトイフニ納」めたとし、又「何」として玉緒にあげる所は様言で、「辭」でないから係とはならぬとしてそを省いて「か」「が」を加へた。

六　其他の活用研究　以上の外注目すべき活用研究書も少くなかつた。林國雄の詞の緒環（天保九年刊）と黒澤翁滿の言靈指南（上巻嘉永五年刊）とは、共に僻說が少くないが、前者が「蹴る」を下一段とし、八衢の一段を上一段とした點、後者が八衢の中二段を上二段として下二段に對せしめ、又加行・佐行の變格を三段活用と名づけた點などは一見識とするに足る。又黒川春村の活語四等辨（天保十五年成）長野義言の活語初の栞等は通路の自他の說を補正する所があつた。鹿持雅澄は用言變格例で四段の活用を以て正格とし、其他は四段より變化したものと說き、舒言三轉例では佐行（立たす・問はす等）波行（散らふ・歎かふ等）加行（安けく・待たく等）に舒びた例を集め、佐行は散ふ意、波行は事を緩める意、加行は用を帶せる意があるとし、從來單に延言として何の意義も考へなかつたものに、各異る意義のある事を初めて論じた。權田直助の形狀言八衢（次期に成る）では形狀言「く・しき」「しく・しき」等の別を立てた從來の說を排して「く・しき」の一種に論定した。此期の活用研究は實に空前の盛況を示して其他にも多くの書が出たが、その先頭に立つて研究の基礎を置いたのは八衢で、本期特有の精緻な傾向が多くの業績を生み爲したのであつた。

四　平田篤胤及伴信友と文字の研究

一　篤胤の學　等しく宣長門下であり乍ら春庭は學者的であり、篤胤は思想家的傾向が著しかつた。義門の如きは國學尊信の思想は存したが、佛者として流石に國學者にみた如き國家的情熱は見られず、從つて又國語を客觀的に研究するの立場を執るに都合がよかつた。篤胤の本領は宣長學の古道方面を發展せしめるに存し、春庭の語學方面を發展せしめたのと著しい對照をしてゐる。從つて、客觀的態度を以て精密な事實研究を爲すべき國語理法の考究の如きは、篤胤の得意とする所ではなかつた。併し古語・古代文化を考察の對象とし、且つ廣大な學を有した彼は自ら國語學的方面にも接觸する所があつた。その著しいものは神代文字の研究と、國語音の音義的解決とで、共に國家主義的情熱によつて豐かに裏付けられてゐた。

二　神代文字論　この方面の業績は神字日文傳（かむなのひふみのつたへ）(文政二年成、後刊)であるが古史徴開題記(文政二年刊)中の「神世文字の論」に於いても備れる所があつた。神代文字の否存在說は古く古語拾遺に見え、其後三善清行(昌泰四年勘文)大江匡房(筥崎宮記)等も唱へ、德川時代に入つては貝原益軒(自娯集)太宰春台(和讀要領)等の漢學者を初め、眞淵・宣長の如きもこれに傾いた。存在說は卜部兼方の釋日本紀、忌部正通の神代口訣、卜部兼俱の日本紀神代卷鈔、僧潮音の僞書・舊事大成經等に見え、白石も同文通考で古來の諸說を擧げた後、存否は確實でないが古社に存すると云ふ竹簡なるものは、或は神代文字かもしれないとした。

その後僧諦忍は伊呂波問辨(寶曆十四年刊)によつて諸種の否存在說を擧げて非とし、天照大神より四十七言を承けた大己貴尊は天八意命（アメノヤゴコロノミコト）と共に神字を作り、そを聖德太子が漢字に、空海が草字に寫し換へたものとし、もし神代に文

字なくば神々の名義の辨別、古傳說歌謠の傳來も不可能となる。紀に「一書曰」とあるは此神字の記錄で、現に古社には神字の記錄が殘つてゐる。「日本ノ神字ハ神代自然ノ文字」漢字は卑賤人の作つた「卑詞」だとし「貝原太宰の兩儒、日本ニ生レナガラ共學ブ所ニ僻シテ和國ヲ鄙ジ異邦ヲ崇ムルハ、固陋ノ甚シキナリ、日本ハ元文字ナキ國ナリトテ夷狄戎蠻ノ如ク思ヘリ」と云ふ。なほ此書の反對論に對して彼は更に神國神字辨論を著して答へ、鎌倉鶴岡八幡の寶庫に在るといふ神代文字を發表した。

篤胤は諦忍の說を承けて更に一層强く存在を主張した。開題記ではもと卜占に用ゐた符號に淵源して、天思兼命が創始したもので、釋紀に云ふ肥人書、薩人書も神代文字だとした。併し彼は此時は未だ所謂神代文字なるものを知らなかつた。日文傳は初に小研究史の如く古來の論議を記して、神代文字の存在を信ずべき由を强調して後、各所(主として神社)に傳はる神代文字即「日文」の證據十三種(皆ヒフミヨイムナヤコトモチロラ云々と配列する)を載せ(附錄には疑はしいものを載せ)中には朝鮮の諺文に似たものもあるが、そは「日文」が彼地に傳はつての影響だとした。

彼の後に鶴峯戊申は鍥木文字考(天保九年序)を出して、河內枚岡泡輪神社の土笥に鍥りつけてある阿奈以知なる文字が神代文字だとし、更に後刪定した嘉永刪定神代文字考でも、國粹的思想を以て一層主張を强くし、大國隆正も神字箋・神字小考を著して篤胤の說を支持した。これらの存在論主張の根柢にはおしなべて自國尊重の思想が存し、研究よりは主張である傾向を有したが、その中篤胤の研究は結構廣大、論證該博、最も見るべきものがあつた。

三　音韻論　この方面の業績は古史本辭經(一名五十音義訣)とし、その內容は發題叙言・五十音古圖・五十音圖活用・五十音訂正圖・五十音義解・喉音三行・古言淸濁・古言延約・通略等に分かれる。國語音に就いては眞淵宣長の

說を堅く執り、萬國無比の優秀なものとし、五十音圖は應神天皇の代に我國人の手によつて作られたもので「ら行」は最も賤しく、音圖の最後にあるべきが、悉曇によつて誤られてわ行の前に置かれたものとして順を改めた。その他眞淵・宣長の研究を訂正する所もあるが、最も力を入れて居り又注目すべきは五十音義解である。これは五十音の音義的解釋を爲すもので、最初に總說して音義說の根據を述べ「情に思へば必ず聲に出づ、其聲や必ず其見る物の形象(アリカタ)に因つて其形象なる聲あり、此を音象(ネイロ)と謂ふ」とし、その音象とは例へば加良利(カラリ)とした物を見れば牙齶の加良利(カラリ)とした所に響いて加良利と聞える音が出、佐良利(サラリ)とした物を見れば齒舌の佐良利とした所に觸れて佐良利と聞える音が出る如きで、人の音は必ず見る物を指象(さしかたど)つてそを表はすと云ふ。

熱烈なる國家思想を有する彼は、冷靜緻密な客觀的考究に赴くを得ないで、その說は信念の迸りに壓倒されたものであり、又その主とする所が道德宗敎に存した點からも、一層主觀的傾向を強くして多くの附會の妄說を生んだ。蓋し眞淵・宣長の敎學的一面を極度に發展せしめた所に、語學研究家たるべからざるものがあつたにもかゝはらず、國學の範疇内に存したこの一面にも意見を立てたもので、彼の學說存在の理由と、存在の意義とは解し得るも、國語研究の進展には寄與する所が少なかつたとせざるを得ない。

四　伴信友の研究　篤胤と莫逆の交はりを爲し、しかも後仇敵の如く云はれた信友は冷靜な研究家で、國史神道方面の業績が少くない。國語學方面では假字の本末(嘉永三年刊)と應聲考(天保四年成)の二とし、前者は上卷草假字、下卷片假名、附錄神代字辨の三者に分かれる。上卷では草假字は漢字の草體に基き、區々の字體を空海が一定していろは歌に綴つたものとし、又その通用・各字源・變態假名・いろは歌・其他種々の事項を考察し、下卷では片假字を

音圖と共に吉備眞備の作との說を肯定し、その通用・異體・字源・音圖・オコト點等の諸事項を論じた。白石の同文通考は和漢のあらゆる文字を論じてその廣汎さに於いて特色をみたが、この書は平假名片假名に限られ、精密な點に於いて特色を持ち、所說穩健で創意の著しいものを見ない。

附錄に於いては、神代文字として今傳はるものは唯一神道者或はえせ人等の手に成り、只多少據所あるものは朝鮮の諺文の古體なる吏道、又はその草體をいろは歌の如くひふみよ等と配列したもので、古代に於いて一をヒ、二をフ、七をナ、九をコ、百をモ等と唱へた事もなく、その點からも僞作なることを知り得るとした。その他種々論ずる所があるが、彼が吏道を諺文の古體とみたは誤とするも、所謂神代文字なるものゝ中に諺文より出たもののある事は明かで、又その傳來が殆ど神社に限られてゐることも彼の推測を成立せしめ、神代文字否定論として彼の所說は甚だ有力なものであつた。

片假名・平假名の字源、いろは歌、音圖等に關する考說は前期以來多く見られた。いろは歌空海製作說は院政時代から見え、平假名空海製作說は南北朝時代の耕雲の倭片假字反切義解以來行はれてゐたが、此頃之を疑ふ說も出た。その中有力なものは村田春海の字說辨誤(平澤元愷の片假名・平假名の字源を論じた讀徵字說の誤を辨じた書)で、貫之・道風・佐理・行成等の平假名の字體は草書の本意失せず古色があるに反し、空海の眞跡として傳へられるいろは(それは略當時の字體に似る)は古色なく、筆法鄙俗で空海の作とは思へないとした。蓋し古筆との比較は有力な見解で信友の說に優るものがある。片假名の製作者を眞備とすることも反切義解以來行はれたが、之を疑ふ者もあり、山崎美成は文教溫故(文政十一年序)で四十餘字を一時に作つたものではなく、漢字の省略から漸次に發達したものであら

うとした。信友はこの點に於いても只舊說に止つてゐた。

次に應聲考は應答の聲を研究したもので、その應答の音聲は普通と異り、他から云ひかけられた際、その事情に從つて自らなる喉音アイウエオを以て答へるが、この五音はあらゆる音聲の本なる故、應答にも歎息にも自然に發せらるとして、古書に見えた應答の聲をアイウエオの五種に分類して說いた。材料の蒐集と解說とを含み、この應答の音聲に一定の規制の存する事に注目した點は認むべきである。信友の研究は篤胤の如き思索的・主觀的傾向なく、着實に文獻に卽して爲され、概して穩健な點を特色とし、その學風は篤胤と好對照を爲してゐた。

五　用字法の研究　文字そのものの研究の外、古代文獻に於ける用字法の研究も亦この期に進められた。主なものは關政方の傭字例、春登の萬葉用字格等で前者は漢字音の種々の用例を研究し、男信に於けると同樣「む」「ん」の區別の如きにも(男信より稍後れはしたが)注目した。男信・傭字例等は文字の研究であると同時に音韻の研究でもあり、韻鏡に據る所が多いが、當時に於いては太田全齋が斯學に優れて居り、その著漢吳音圖(文化十二年刊)は磨光韻鏡よりも一歩進んでゐた。萬葉用字格(文化十五年刊)は集中の用字を五十音順に配列し、更にその中を、正音・略音・正訓・義訓・略訓・約訓・借訓・戲書の八種に分け、仙覺以來の諸種の用字法を最も精密に發展せしめたものである。字音と用字法の研究は不可分の關係にあり、この研究も亦前期を承けて著しく精密なものとなつた。

五　てにをは及音韻の研究

一　てにをは繫辭辨　劃期的の名著玉緒が出て以來、祖述增訂の多くの書が出た中、注目すべきものに正系に屬する萩原廣道の研究と、本居學に對抗した橘守部の研究とがある。廣道はてにをは係辭辨(弘化三年序嘉永二年刊)に於

いて玉緒の改訂を試み、第一類を「徒」としてその內容に「は」「も」の外に、「て」「に」「を」「の」「ば」「ど」「ども」「より」「まで」「へ」等を加へ、第二類の中「の」と「何」とを除いて「か」を新に加へた。宣長が「は」「も」をあげたは屢用ゐられる故であらうが、實際には上記の多くが係となるとして實例をあげ、又「の」は第二類の係でなく、時にその樣に見えても餘情を含める略語の格に外ならぬ。「何」も亦係でなく「何」「など」「いかに」「たれ」等は共下に伴ふ「か」が係となるか、又は餘情を含める略語の格かであるとした。

廣蔭は第一類「徒」は係でないとして「に」「を」「ば」の三者を補ひ、廣道は「徒」は包括的意義を有するものとして多くを補つたが、共に「は」「も」とは性質を異にし第一類の係となるべきものではない。殊に廣道の增補は雜駁極まるが、第二類の係に加へた改訂はよい。「何」は廣蔭が削除したが「の」には及ばず、又「か」は加へたが「が」を加へるの誤を犯したに比して、廣道の改訂が優れてゐる(但し「の」が第二類の係でない事は守部が早く云つた)。本居の第一類の係が甚だ了解され惡くてかくの如く誤解されたのに反し、第二類は廣蔭により、更によりよく廣道によつて改訂されたのであつた。なほ長野義言の玉の緒末分櫛、中島廣足の詞の玉緒補遺等にも、玉緒に新に開けた活用等の方面より補ふ所があり、鹿持雅澄の鍼嚢・結詞例にも奈良朝と平安朝の助詞類に就いて研究する所があつた。

二　守部のてにをは研究　守部の學は神典・物語・和歌・語學等の各方面に亙り、規模大きく獨創に富み、且つ宣長との對抗意識が強く、學の中心をなす神道思想は宣長よりも一層神秘的であつた。てにをは研究の業績は助辭本義一覽(天保六年成、同九年刊)、てにをは童蒙訓(天保十五年成)、佐喜草の三者とする。

この中助辭本義一覽を主著とし、上卷に於いて係卽ち彼の云ふ指辭(さしことば)、下卷で結び卽ち受辭(うけことば)を、紐鏡の順序に從ひ、

且玉緒を評しつゝ說いた。紐鏡・玉緒の如き研究立場から見れば、第二類「の」を係でないとした外、特に見るべきものはないが、各指辭・受辭の本義を說く點に於いて著しい特色がある。例へば指辭「は」の音には羽・齒・葉・刃・端等の如く物を切分ち離す性質があり、從つて上に「は」の音ある語には、離る・放つ・葬る・拂ふ・撥く・掃く等の類が多く、助辭として是はよろしと云へば他は惡きやうに、今日は寒しと云へば昨日まで暖かであつたやうにきこえる。又あ行と同じ喉音だから、歎息の性質もあるとする。又受辭「き・し・しか」に就き、「き」は既の義(ありきは在既、見きは見既)、「し」は去の義(むかしは向去、聞きしは聞き去)、「しか」のかは既の「き」の通音で活らくものとする如きである。てにをは童蒙訓はかゝる音義說を交へる事少く、主として客觀的に歌文に卽しててにをはの意義職能を說いた。それだけに彼の研究としては淺いもので、てにをはの眞意をよく說いてゐるものとはし難い。佐喜草では、さへ・だに・すらの三者の相違を研究した。要するに彼のてにをは研究は鋭い直覺力に基く音義的解釋に特色を持ち、深密な神道とも相通ずる彼の神秘的思想の現れであると共に、又時代の一傾向でもあつた。

三　音韻論　守部の一般音韻論は五十音小說で窺ひ得る。音圖は天地萬物の聲の限りをつくして、神代の初より自然に傳來し、上古にはこを言靈とも云ふとし、又空海の作るいろはの字體は各音色の本體に隨つて作られ、「あ」「わ」の如く圓體の音はその形「あ」「わ」の如く圓く、「ち」「つ」の如くつぼやかな音は少し丸く作る。凡て音義を解くには口に唱へ試みてその形より考ふべきだとする。その他開合・反切・延言等も說くが、五音十行の等次・十行の大意等については、特に穿鑿附會の音義的妄說を逞しうしてゐる。

音義說の流行は此期に於ける一現象で、篤胤・守部の如き大學者をはじめ、高橋殘夢・堀秀成等其說を立てる者が多

かつた。音義說の根抵には神代文字存在論と相通ずる思想が存するが、その流行に就いては主として國學の動向に理由を求むべきである。宣長の學は文獻そのものの正しい解釋に基く古代文化の再認識を企圖したが、本期には教學的一面を思索的に發展せしめ、古典に對する客觀的解釋以上に出て、之に哲學的理解を附與せんとするの主觀的態度の著しい傾向が生じた。蓋し宣長の學は古典そのものの闡明に主力が注がれたが、本期には學の對象たる古典の解釋よりも寧ろ意味づけに傾き、その際國學に存した國家主義的思想、乃至は宣長にも已にみた神秘的な神道思想の如きが、その意味づけの傾向を指導した。かくて國學は文獻學より、進んで思索的な哲學的傾向を帶びるに至つた。かゝる傾向の中に在つた學者にして、語學を思索的に取扱ふ時、自ら甚だしい國語音尊重の思想、又は音義說、或は大膽な神代文字存在論ともなつたものと考へられる。固より中には春庭・義門・信友等の如く、依然として文獻本位の客觀的考究に止まる者が存しつつも、地方に於いてかくの如き新傾向をみたのは宣長學の分化發展と考へられる。

六　語釋及辭書

一　語釋と小辭書　國學の確立と共に國典の研究が盛となり、註釋的業績が又著しく出現した。橘千蔭・橘守部・狩谷掖齋・岸本由豆流・鹿持雅澄・萩原廣道・藤井高尙・岡本保考等には、注目すべき業績・若くは多くの業績があり、その他雋胤・信友・鈴木重胤・本居太平・大石千引・香川景樹・尾崎雅嘉・高田與清・石川雅望・加納諸平・大國隆正等もこの期に註釋的業績をものした主要な人々である。その對象は記・紀・祝詞等の神典、令・式・職原抄等の制度、有職故實書類、萬葉・古今以下の和歌書、日記・物語・隨筆等の文學書、その他金石文・字書・歷史等の各方面に亘つた。かくて前期以上に對照を廣くして古語・古文を釋し、恰も理法の語學に於いて前期の研究を補訂する

所が少かつた如く、この方面に於いても遺漏を補ひ誤謬を訂す所が少くなつた。これ等を通じて實證的方法は益行はれたが、漸次語學理法の闡明をみた事も亦自ら釋義を助ける所以となつた。多くの業績の中千蔭の萬葉集略解、雅澄の萬葉集古義、廣道の源氏物語評釋、守部の稜威道別(紀神代卷註)・稜威言別(記・紀歌註)、狩谷棭齋の箋註倭名類聚抄等は注目すべきものとする。

學の流布と對象の擴大とは、これらの古書に通ずる主要な古語を卑近な語を以て云ひ換へる小辭書を多く製作せしめる事ともなつた。鈴木朖の雅語譯解(文政四年刊)、村上忠順の雅語譯解拾遺、河崎清厚の雅言童喩(天保十五年刊)、久檪古之の詞作者久作等はいろは順に、荻原元克の道の枝折(享和元年刊)、源稻彥の古言階梯、鹿持雅澄の古言譯通(天保八年成)、足代弘訓の言葉の數波(天保十年成)、萩原廣道の古言譯解(嘉永四年刊)等は五十音順に配列し、卑近適切に詩の意義を說き、歌文の讀解に資せしめた。古語・古歌の俗語譯は成章・宣長に先例を見るが、本期にはそが時代の要求に合して益行はれたものとすべく、又これは啓蒙的作業であるとは云へ、中には意義への深い省察と正確な把握とを示してゐるものもあつた。特殊なる書の語釋としては、萬葉集に鹿持雅澄の萬葉集品物解(天保中成)、高橋殘夢の萬葉詞通抄(弘化三年成)、源氏物語には荒木田守訓の源氏物語玉の御須磨流(文化十年成)、菅原種文の雅語箋釋(源語箋釋・源語雅言解とも云ふ、天保五年成)、足代弘訓の源氏物語類語等があり、その外歌語解釋の書も出たが前期程ではなかつた。かゝる類と異り、より本格的な業績として雅言集覧と俚言集覧とが出た。

二 雅言集覧と俚言集覧 石川雅望の作雅言集覧五十卷(文政九年と嘉永二年とにイよりナの部まで刊)は雅言をいろは順に配列して解釋するが、雅言とは「延喜よりこのかた歌にも文にも用なれたる詞」を意味する。その意企は歌文

製作に資せしめる點に存し、從つて實例を擧げる事につとめ、語釋は粗雜で時に之を缺き倭訓栞より劣る。語彙の範圍亦狹いが、その範圍内に於いては豐富であり、固有名詞を省き同音異義の語は別項にする等の點は、辭書の編纂法として倭訓栞に優る。保田光則は刊行の部に增補して雅言集覽增補十三卷(文久三年成)及び未刊の部に對し雅言集覽續篇三十二卷(文久三年成)を作成し、中島廣足は全部に增補して增補雅言集覽五十七卷(明治二十年刊)を作つた。

俚言集覽二十六卷は村田了阿(天保十四年歿)の作といふも、必しも彼のみの手に成るものではないらしい。著者の耳にした鄙俗卑近の語を主とするが、雅言も混じ、書物からも採り、五十音順に配して解釋をした。其解は粗雜で、寧ろ蒐集そのものに力をつくした趣があり、單語のみでなく俚諺にも及び、諺語辭書の性質をも持ち、前期の物類稱呼よりも蒐集、解說共に一步進む。雅言集覽に比して、かゝる研究は言語事象そのものの興味に基くものとして意義が深い。言語事象に對する關心の增進は研究を深めると共に、又對象をも擴大したのであつた。井上頼圀・近藤瓶城によつて增補され增補俚言集覽(明治三十三年刊)が次期に出た。

前期の倭訓栞は稍百科全書的傾向を帶びてゐたが、その傾向を一層發展せしめた書も出た。但既に倭訓栞以前に寺島良安の和漢三才圖會が出てゐたが、この期には喜多村信節の嬉遊笑覽、幕命により屋代弘賢總判の下に十餘人で作製した古今要覽稿等が、何れも內容による配列法を採り、名義を釋して多くの語釋をした。その他前期及本期に出た多くの隨筆中にも亦語義・語源の解釋に觸れるものもあり、語義に對する關心の社會一般に廣いものがあつた。

七　語學研究獨立と文典編著との傾向

一　語學の學問的獨立の傾向　國語の研究が古語歌語の理解の要求によつて起り、次いで歌文作成の意企が加つて

進められたものなる事は既に述べた。第二期以來理法の究明が大いに進んだとはいへ、依然として研究が價値づけられる根本的意識としては、この理解と作成の二點が存した。漸々に發達してきた研究は理法そのものの奇しく妙なるに驚きの目を瞠らしむるものがあり、又ひたすらなる研究の道者となつては殆ど知的探究の興味以外に他の意企を意識しないにもかゝはらず、若し研究の意義を質すならば、依然として理解と作成の二點を據所としてゐた。それにもかゝはらず自らなる研究の進度は漸くにしてその實用的意義を超越せしめるものがあつた。

かくて語學研究獨立の傾向が生ずると共に、他方に於いて前期以來次第に發展してきた古道のための研究とも云ふべき意味も强いものがあつた。前者が國學に於ける研究精神の發展とすれば、後者は國家的信念の發現である。前期の眞淵・宣長にみた自國語尊崇の論をはじめ、篤胤等の神代文字存在の主張、國語音尊信の論議の如きは將しく古道發揮の國學精神に基き、歌文の理解と作成との實用的意義を離れてゐるが、寧ろ學問を教義の犧牲としたものであり、學問のための學問とは正反對の方向にあつた。かゝる教學的冒瀆にもかゝはらず、他方に於いて純粹な研究の發生をみたのは、國學に包攝せる二要素の分化進展にその意義を認めねばならぬ。

この實用的意企から離脫する傾向となし得るものは、(一)方言鄙語の研究、(二)言語起源の研究、(三)國語分類の研究の三者を主なものとする。(一)俚言集覽に見た如き方言鄙語の研究は必しも歌文の作成理解に資するものではなく、言語事象そのものの特殊性に興味を感じてゐる事も看取される。(二)朖の雅言音聲考の研究は言語そのものの起源の論考であり、歌文理解の爲の研究とする事は出來ない。延いて音義的研究の如きも、聲韻のもつ自らなる意義を探らうとする意企の中に、他に從屬せしめられないそれ自らの研究意義も存した。(三)國語分類の意企は明かに國語

に存する條理の設定を意味し、實用的意義から全く脱却してゐる。然るにかゝる國語理法の爲の研究も、維新前後に於ける社會の變動に禍され、又國學に於ける教學的一面に牽制されて、僅なる萌芽のまゝで發展をみなかつた。併し研究の分裂と分類の思想とは、西洋文典と相俟つて研究を綜合する文典編成の傾向を發生せしめた。

二　文典編纂の傾向　本期に於いては僅にその萌芽として、從來の語學を一書に綜合しようとする鈴木重胤の語學捷徑(詞の捷徑とも云、弘化二年刊)と西洋文典模倣の鶴峯戊申の語學新書(天保四年刊)との二書をみるにすぎぬ。前者は最初に音韻を説き、體言・用言・自他活言・運用活字・禁止辭・助辭・てにをはのとゝのへ等の項で體言・用言・助詞・助動詞等の品詞を説き、次いで國語假名遣、字音假名遣を記し、又主要なる雅言約八百を簡單に釋し、枕詞を擧げてその接續を説く。卽ち從來の研究綜合の意企を以て成るも、各項目相互の組織は稚拙極まるものであつた。

語學新書は語學の要として九品九格を唱へて和蘭文典直譯の新説を立てた。九品とは實體言・虚體言・代名言・連體言・活用言・形容言・接續言・指示言・感動言を云ひ、九格とは能主格・所生格・所與格・所役格・所奪格・呼召格・現在格・過去格・未來格を云ふ。九品に於いては形容詞を虚體言とし、用言の連體形を連體言とし、代名詞が單に意味の差より代名言・指示言に區分され、てにをはが主として接續言となり又形容言にも含まれる等の不合理が多い。九格の中初の六は、語に助詞の附屬して起る意義による區別(例へば所與格は「に」「と」「へ」所奪格は「より」「から」「ゆへ」等)であり、後の三は助動詞の現はす意味を云ふ。外形的の體系のみは整然たるものがあるが、和蘭品詞考、訂正蘭語九品集、和蘭語法解等によつて知られてゐた和蘭文典の直譯模倣に成り、國語の本質を無視する事が甚だしい。語學捷徑は國語の本質に卽した研究を集めて體系が整はず、この兩者の特質を綜合して從來の研究、卽ち國

語の本性に立脚する研究を、西洋文典によつて啓發せられた體系的文典に綜合する事が、次期に於いて試みらるべき大きな問題として殘された。

第五章　第四期の研究

一　第四期研究の概觀

徳川時代の國語研究は外國學術の影響少く、我國人の手に創始せられた獨自の學問であつた。從つて國語に即して深く沈潜した趣はあつたが、國語觀の根本に於いて、又研究の方法に於いて、狭少なる嫌を免れなかつた。維新以後西洋の言語研究の方法を學ぶに及んで、見解及研究法の更改をみて、國語研究は全般的に面目を改めるに至つた。初期は西洋語學の理法の皮相な適用、又は從來の研究法の踏襲、或は取急いだ折衷妥協等の傾向が著しく、却つて前期よりも國語そのものへの省察に於いては淺薄となつたものも少くなかつたが、廣日本文典の出た三十年以後に於いて、諸方面に優れた研究を見るに至つた。これは日清戰役後國家的自覺を増した事、及漸く西洋の語學研究法の眞意を了解するに至つた事等による所があらう。而して本期を貫通する著しい現象としては文典作成の事を見得る。明治初年に早くも文法書の出現を見、爾後一大傾向となり、主要な國語學者で國文法を著さない者は甚だ稀であつた。本期の特色はこの各品詞を綜合的に考察する點に存したが、なほこれを中心としつゝ、文字・假名遣の論考、國語の歴史的研究及比較研究、語義・語音の研究、國語學の概論的考察等が活潑になされ、主として後半期に於いてよき成果を收めた。かくの如き諸種の研究を通じて現はれた傾向としては、(一)社會的關心の増大、(二)對象の擴張、(三)學問

的獨立の獲得、(四)方法の革新等を著しいものとする。

(一)明治新政府の樹立と共に國家的統制成り、新に諸外國と對立すると共に、前期とは異る新國家思想の發達をみた。この思想は國語國字の問題を國力發展の立場から顧慮するの勢を致し、屢識者の關心を呼んで社會の論議を生んだ。この事それ自身は必しも研究ではなかつたが、延いて研究の促進に有力な動因とはなつた。こは國學に於ける國家主義の如く僻説の母胎とはならなかつたが、稍もすれば目的のために研究の愼重さを缺いで、結論に急ぐ傾向は存した。(二)研究對象は古語雅語等の狹い範圍を脱し、各時代の文語・口語が採られ、又全國の方言・口語も考察された。更に琉球語・アイヌ語・朝鮮語にも及び、又古代稀覯の文獻の探索ともなり、ローマ字・語調等も考究せられ、言語に關する萬般の事象に擴張せられた。(三)何等かの意味で他の價値に意義上の從屬を强ひられてゐた國語研究も、此期に至つて純粹に學問的獨立を獲得するに至つた。但し前半期に於いては實用的意義が强く存したが、後期に至つては理法探究の學としての意義が確立するの勢となつた。こは一般學術の眞義が理解された事に伴つて當然の地歩を得たものと云へるが、この傾向と第一の社會問題として論議せられる目的とは、必しも相一致しないものがあつた。國字・假名遣の問題の如きは此二つの意企の支持の下に未だに解決を得ない。(四)第二・三期の實證的方法は國語より繼承せられたが、その外比較研究・組織的考察及實驗等が行はれるに至つた。比較研究を歷史的に存在する國語の上に適用しては歷史的考究の部門が生じ、地域的に存する國語に用ゐては方言考究の部門が生じたが、外に近接語との比較研究も爲された。こは主として西洋言語學の影響に據るが、組織的研究も亦それに負ふ所がある。本期を貫く主流たる文法の研究にはこの組織的考察が重要な地歩を占めてゐるが、後期に於いて發生した國語學の概括的考察

も亦かかる考究態度を根抵に置いてゐる。比較及組織的研究法は理法の語學への進展と相表裏する。從前の解釋・作法の語學に在つては實證が有力な方法たるを失はなかつたが、本期の如く廣く言語事象の理法を考究するに當つては、かゝる新方法が當然必要であつた。又音聲の研究に於いて機械による實驗の行はれた如きも、注目すべき方法上の革新とせねばならぬ。

二　文典の編著

一　文典編著の大勢　前期の終にみた文典編纂の傾向は維新以後急速に旺盛な傾向となつた。これは分裂的研究の後に綜合的考察に赴くといふ學問發達の內面的要求によると云ふよりも、主として外的事情に基いてゐた。即ち西洋の文法研究に影響せられると共に、又新しく起つた教育に課する上から、前期の個別的研究を綜合する必要を生じたのであつた。かくて續々として文法書の刊行をみたが、初は西洋語學の影響を受けて未だ新方法の眞意義に徹底せず、國語の本性に深く思ひを致す態度が乏しかつた。かゝる大勢の中にあり、又その傾向を受けて最も傑出した業績は大槻文彥博士の廣日本文典とする。この書の出現によつて文典の編述は一時期を劃し、その後は前半期にみた焦燥の態度より脫したより學問的の業績を見るに至つた。多くば啓蒙的なるべき學校の教科に充てる意企の下に成る事をみても、研究の性質を察し得るが、後半期に於いては研究は教科書と分別し、純然たる學問たるの勢を致した。文典編纂の大勢は三十年頃を境として前後に分れ、後期は前期の動搖の後にきた安定省察の相であり、廣日本文典は實にその轉廻の樞軸であつた。

二　前期の大勢　明治四年には大倭語學手引草（中金正衡）及政府の編輯寮の語彙活語指掌・語彙別記が出た。前者

は紐鏡・八衢等舊語學の大要及西洋文典に基く八品詞（實名詞・形容詞・代名詞・動詞・分詞・副詞・接續詞・感嘆詞）を說き、後二者は詞の活用（動詞・形容詞）と辭の運用（助動詞）を主とし、概して舊語學を整理したものであつた。翌五年の學制には小學校に文法科が設けられ、六年には皇國文法階梯（高田義村・西海古海）皇國文典初學（黑川眞賴）が出た。前者は語學捷徑の亞流であり、後者は稍體系を備へ、音韻を略說し、九品詞（手引草の分詞を除き數量詞・助詞を加ふ）を說き、文章法にも及んだ。翌七年に出た小學文典初學（田中義廉）は主として品詞を說き、直譯的傾向が著しかつた。たゞ助動詞を說いた點は注目に價する。明治九年に出た日本文典（中根淑）は文字論・言語論・文章論・音調論を立て、言語論では八品詞（名詞・代名詞・形容詞・動詞・副詞・後詞・接續詞・感歎詞）を說き、活用するてにをはは助動詞として動詞の中に入れ、所說に飜譯氣習は多く存したが、比較的よく整ひ廣く行はれた。

以上の如き西洋風の文典に對する反動として、舊語學に基く文典が出た。明治十年の雅俗文法（里見義）、十二年の語學指南（佐藤正實）等はこの傾向を持ち、共に活用を主として取扱ひ、所說確實ではあるが文典としての組織的考察に於いては未だしいものがあつた。歐風文法の流を汲むものは組織整つて國語に即せぬ傾があり、舊語學の系統に立つものは體系整はぬ傾があつた。かくて折衷的立場に立つものとして十一年には初等日本文典（物集高見）、語學訓蒙（加部嚴夫）、十三年には語格指南（大矢透）等が出たが、かゝる試みの最も優秀なるものは大槻文彥博士の語法指南（十七年に成る言海の卷頭に在り、二十二年言海と共に出版され、二十三年單行本として刊行）及それを增訂した廣日本文典・廣日本文典別記（共に三十年刊）とする。なほ語學指南成立の頃から廣日本文典の完成までの間にも多くの書が出たが、日本小文典（チヤンバーレン）、詞の組立（谷千生）、日本文典（落合直文・小中村義象）、和文典（大和田健

樹)、國語學(關根正直)、日本新文典(岡倉由三郎)、日本文典(林甕臣)等を主なものとする。

舊語學系の文典と歐風文典とのよき學問的協和が要望されてゐた明治十一年末の頃、大槻博士を中心として文法會が組織され、會員は數名にすぎなかつたが十五年までに開會五十餘回に及び、毎に大槻博士議題を立案して討義を重ね、博士の文法學の基礎はこの時出來た。語法指南は言海の指針たらしめたもので、品詞を說いて各單語の性質用法を明かにする事を主としたが、所說穩健公正で世の注目する所となり、又その骨子は廣日本文典に繼がれた。廣日本文典は總論に於いて言語を概說し、文字篇で文字音韻を、單語篇で品詞を、文章篇で文章法を說き、品詞は名詞・動詞・形容詞・助動詞・副詞・接續詞・弖爾乎波・感動詞とし、この外に熟語・接頭語・接尾語を說いた。動詞は性質により自動詞・他動詞、活用により四段・上下二段・上下一段の正格活用、及加・佐・奈・良行の變格活用とし、六種の活用形によつて生ずる種々の態度を法とし、そを終止・連體・不定・中止・連用・名詞・命令の七とした。但し終止法には所謂終止形・連體形・已然形の三活用形の三種があり、又中止法・連用法・名詞法は所謂連用形の有する意義を分別したのである。助動詞は意義上より能相・所相・勢相・使役相・敬相・指定・打消・現在・過去・未來・推量・詠歎・比況を立て、又動詞との接續、助動詞相互の接續を表示し、弖爾乎波は名詞につくもの、種々の語につくもの、動詞・形容詞・助動詞につくものの三類としてその意義接續法を說き、文章法では文の要素・形態・係結・呼應・文脈・語脈の解剖等を說いた。別記にはこの書の註釋・敷衍・參考・考證・辨解・持論・駁論等主としてこの書の論述の根據を記した。要するに大槻博士の文法は折衷の上乘なるものとすべく、明治初年以來の折衷的意企はここに一應の大成をみたものと云へる。

三　後期の大勢　廣日本文典以後文法學は理論的により深められ、又國語の特性により近づけられ一段の進展が見られた。その最も代表的業績は四十一年に出た山田孝雄博士の日本文法論とするが、それ以前にも特色ある業績が少くなかつた。又廣日本文典以前は品詞論に主力を注ぐ傾向が存したが、三十年代には總括的に文章そのものに注目する傾向が生じた。三十三年に出た新式日本文典（岡山正美）は言語の內面的原理たる思想に着目して文章法より說き、文を解剖し（主部・述部・對部・補部・客部等）又文の種類を考へる等の特色を有した。同年に出た初等日本文典（岡澤鉦次郎）も亦文典は單一の文の典則を說くものとし、成分を思想上より考察して、思想の根源たる主素、それの動向形狀を示す從素、主素に添ふ形容素、從素に添ふ副素、文詞を連結する接續素等を立てて說いた。同じ著者に新式日本文典原理（四十年）日本文典要義（四十一年）があり前者は文章を思想活動の樣相に據つて說くの態度が著しく、その思索推論深密を極め、後者は前者の如き原理に基く一般文法事象の解說を主とした。かくの如き文典は稍言語の形式的方面を輕視し、抽象的理論に傾く嫌を免れなかつたが、前半期の淺薄な折衷を事としたものに比して、著しく學問的威容を增した。三十四年に出た日本文法（草野清民）も亦文章論に特色を有し、文章に於ける要素の論考、總主の定立、單文・複文の解說、その他見るべきものが少くなかつた。三十六年に出た日本文法論（金澤庄三郎）は活用言の研究に於いて優れた點を有し、四十一年に出た高等日本文法（三矢重松）は骨子を廣日本文典に採りつゝも、部分的にはそを改訂する所が少くなく、大正元年に出た日本文法新論（金澤庄三郎）は朝鮮語・琉球語等と比較研究をした點に特色があつた。

かくの如き業績は各特色と價値とを有したが、山田博士の日本文法論は文法學の基礎たる理論的研究に最も優れた

批判的理論的文法であつた。語論と句論に大別し、語論に於いては先づ單語の分類法を考究し、諸家の說を批判して後、觀念語と關係語(弖爾乎波の類)とし、前者を副用語(副詞の類)と自用語(更に概念語たる體言の類、陳述語たる用言の類)に分けた。この分類に基き體言(名詞・代名詞・數詞)、用言(形容詞・動詞・形式用言・複語尾)、副詞・助詞を說き、又接辭にも及び、それらの性質及運用を考究し、句論に於いては文を喚體句・述體句に分け、その性質・組織・運用等を說いた。その特色は、(一)文字論・音韻論を除いて純粹語法の學とした事、(二)從來の主要な說を徹底的に批判し論考して所說に充分な根據を與へた事、(三)接續詞は助詞に、感動詞は副詞に入れ、助動詞は動詞の複語尾として品詞の整備を圖つた事、(四)副詞・助詞に組織を與へた事(殊に助詞は古來優れた分類なく、廣日本文典は三類とするも未だ條理に乏しかつたが、この書が格助詞・副助詞・接續助詞・係助詞・終助詞・間投助詞の六種とし、その相互の關係に迄及び、整然たる組織を立てた事は大なる功績とせねばならぬ)、(五)從來混雜してゐた語の性質論と運用論とを分つた事等を主な點とする。かくて折衷に長じた廣日本文典から、よりよく國語に即した理論的文法を得たのである。

なほ同博士の日本文法講義(大正十一年)は前著に據つて簡明にしつゝも新に補ふ所があり、又口語法をも加へた。大正十一年には標準語法精說(小林好日)、十三年には標準日本文法(松下大三郎)等が出、昭和年間に入つても亦種々の業績が出た。概觀して廣日本文典の出現後約十年間は文法史上最も溌剌たる研究の時代とすべく、大正昭和時代は概して明治末期の研究を承けて省察吟味する落付いた傾向が見られる。

四　口語法其他　雅俗文法・語學指南は早くも口語の活用に注目し、前者の別冊雅俗活用便覽には口語の活用圖を

あげ、後者も俗言活用圖を載せた。今俗言活用圖に就いてみるに、動詞は四段・上一段・下一段・加行・佐行變格、形容詞は「ク・イ」と「シク・シイ」の二とし、活用形の終止・連體は差別なきものとし、又各活用形には受けるてにをはを記載する等、動詞・形容詞に關する基本的考察を成就せしめてゐた。その後暫らく著しいものをみないで、三十年代に於いて頗る活潑な研究を見た。三十四年には日本俗語文典(松下大三郎)、日本俗語文典(金井保三)、三十五年には新編日本俗語文典(小林稻葉)、日本俗語文法論(入江祝衞)、三十七年には日本口語典(鈴木暢幸)、三十九年には日本口語法(吉岡郷甫)、等が出、又文部省の國語調査會も東京に於ける教養ある人々の間の口語を調査して、口語法及口語法別記(三十九年、但刊行は大正五年及六年)を作製した。その後も多くの書は出たが、四十四年の日本口語法(保科孝一)、四十五年の文語口語對照語法(吉岡郷甫)、大正十一年の日本口語法講義(山田孝雄)等を注目すべきものとする。これらの中には或は特殊な說を立て、或は方言を主として說くなど異色あるものも存したが、概して主とする所は文語法との相違を明にして、口語法の特色を闡明するにあり、理論的考究の如きは文語法に讓つてゐた。その他てにをは・活用語等部分的の研究も存したが、山田博士の敬語法の研究(大正十三年)の如きは注目すべきものである。そは口語・候文・普通文の三者につき、單語・連語・句の組織等の敬語法を詳說し、國語の一特性たる敬語の法を明かならしめたのであつた。

三　文字及假名遣

一　文字の研究　本期に於ける新しい現象に經世的見地からの國字及假名遣論があり、又文字そのものの研究にも注目すべき業績があつた。落合直澄の日本古代文字考(二十一年)は神代文字に關し篤胤以後の研究記錄等を集めて考

究し、日文傳の說を支持したが、日文傳以上に存在說を有力化する事は出來なかつた。漢字の形象・性質等に關しては高田忠周に漢字詳解(四十二年)その他の著があり、後藤朝太郎にも數種の著があり、漢字音に關しては大島正健・大矢透・佐藤仁之助その他の研究があつた。假名に關しては大正八年に「假名の字源に就いて」(橋本進吉)、大正十五年に「平安朝時代の草假名の研究」(尾上八郎)が出たが、最も注目すべきは大矢博士の研究である。假名遣及假名字體沿革史料(四十二年)、假名源流考(四十四年)を主著とし、前者では諸方の社寺・諸家等の所藏より、平安朝三十部・鎌倉時代二十部の假名を用ゐた古書を得て整理し、各時代に於ける假名字體並に假名遣の沿革を明にし、後者では碑文・佛像光背の銘・その他最も古い假名を研究し、周代の古音と一致するもの有る事を論證した。この研究は韻鏡考・周代古音考・音圖及手習歌詞考等の研究と共に、後假名の研究(啓明會紀要第五)の中に其要がまとめられた。

二　國字論　西洋の文化に接するに及んで、漢字使用の困難より平易な國字を思ふ者多く、旺盛な國字論の流行をみた。前島密は米人ウヰリアムより、學習困難な漢字が支那の國勢不振の因をなす由をきき、漢字を廢し假名を國字たらしめんとする意見を慶應二年・明治二年に當局に建議した。他方南部義籌は明治二年に大學に、四年に文部省に漢字を廢し洋字を以て國字とするの意見を提出した。かくて明治初年より漢字廢止・國字制定が識者の問題となり、或は假名專用を說き、或は羅馬字採用を唱へた。森有禮の如きは英語を以て國語に代へようとの意見を歐米の言語學者に質し、之に憤つた馬場辰猪は英國に在つて英文で日本文典初學を出し森の說を攻擊した。

明治十五年には假名國字論の有力者は集つて「かなのもと」「いろはくわい」「いろはぶんくわい」等を組織し、翌年合して「かなのくわい」となつたが、内部に於いて假名遣に就いて意見が一致しなかつた。併し假名字體の整理、假名

遣の改正その他に就いて調査研究する所があつた。羅馬字論も漸次勢力を得て、十七年には羅馬字會を設立したが、綴字に就いて意見を異にする者(日本式綴字主張者)は羅馬字新誌社を作つた。これらの運動は羅馬字を普及し、又綴字の研究をする事ともなつた。當時英國に在つた矢野文雄は十九年に日本文體文字新論を著して漢字の効用を述べ、有力な漢字保存論を主張した。かくて二十年前後を最盛期として、その後言文一致の文體論が世の注目を引いて國字論は衰へたが、三十年代に至つて又活潑な論議をみた。三十二年に帝國教育會は國字改良部を設けて、假名・羅馬字・新字・漢字の研究を爲し、國語調査委員會も假名・羅馬字の得失・漢字の節減等の調査をその方針の中に入れた。羅馬字運動はその後三十八年にローマ字ひろめ會を、日本式綴字の主張者は四十二年に日本のローマ字社を作つた。之を要するに國字論は國民の能力經濟上よりの論で、概して深い研究の基礎に乏しい主張が多く、何れも充分な運動の歸結を得る事は出來なかつた。

三　假名遣　復古假名遣は維新後も一般に用ゐられたが、十一年頃發音的に改め試みるものがあり、かなの會の中には表音的假名遣を主張する部があつた。十八年には物集高見のかなづかひ教科書が出て、復古假名遣學習の方途を立て、爾後假名遣に關する教科書・辭書・便覽の類が多く出、二十年代には送假名の法を研究する者があり、政府も此頃送假名及濁音符の規定を定めた。三十三年帝國教育會の國字改良部の假名部門は、國語及字音の假名遣を全廢して發音通りにすべき決議を發表し、同年文部省は小學校教科書の字音假名遣を廢し、表音的假名遣による事とした。こは所謂棒引假名遣で、字音の長音に棒を引き、又「ゐ・ゑ・を・ぢ・づ」を廢して「い・え・お・じ・ず」に合併する事及其他に及んだ。この改正に對しては反對が少くなく、世論の高まるにつけて文部省は先の案を他の案と共に高等

教育會議・國語調査委員會・帝國教育會・全國師範學校等に諮り、又臨時假名遣調査委員會を設けて諮つたが、明快な結論は得られなかつた。四十一年には先に小學校に適用した假名遣案を廢し、他日の研究に俟つこととして舊に復した。大正十年に文部省に設立された臨時國語調査會は十三年に假名遣改正案を議決したが、世論の反對があり、教育に適用する迄には至らなかつた。

なほ研究としては大矢博士の假名遣沿革の研究があり、又國語調査會(本居清造擔當)に於いても疑問假名遣(上卷大正元年下卷四年刊)を作製し、古來異説のある疑問の假名遣を蒐集し研究したが、概して此期は研究よりは改正論議が旺盛であつた。

四　語音語義及方言の研究

一　語音の研究　この研究も亦本期に於いて面目を新にした部門で、(一)國語音の性質の研究、(二)音聲學的研究(三)アクセントの研究等を主要事項とする。

(一)明治七年に出た音韻啓蒙(敷田年治)は舊語學の音韻現象を概説し、文法書も亦母音・半母音・子音・清音・濁音・半濁音・拗音・鼻音・促音・連濁・音便・轉呼音等の音韻現象を概説するものが少くなかつた。國語調査會は各府縣に調査を依頼して、三十八年に音韻調査報告書及音韻分布圖二十九枚を出し、全國に於ける音韻現象の大體を明かならしめた。又古代音に就いては、上田萬年博士がP音考(語學創見及國語のため第二所載)で、古代のハ行音はパ行音なるべき事を論じ、學界の注目を引いて反對贊成の論議をみた。大矢博士には古言衣延辨補證の著があり、又假名の研究書も古代音の研究に及ぶ所があつた。大正十三年に出た古代國語の研究(安藤正次)は古代國語の音韻組織な

る章を設けて、比較的廣く古代音に就いて考究し、十四年には日本古代語音組織考（北里闌）が出、又假名遣奥山路の意義の發揮（橋本進吉）、古言衣延分別不可の論議（鴻巣盛廣）等もあつた。

（二）音聲學的研究は主として西洋の音聲學の理法を以て國語音を究明したものであつたが、近時新しい研究が出た。三十五年に國語發音指南（伊澤修二）及國語發音學（平野秀臣）、大正八年に國語の發音とアクセント（佐久間鼎）、大正十二年に國語及朝鮮語發音概說（小倉進平）・十四年に國語音聲學（神保格）等が出、近く昭和四年には佐久間博士の日本音聲學、國語音聲學講話等が出たが、これは實驗的研究に基く新しい研究であつた。これらによつて或は發音學的に研究され、或は分解的に單音・音節等が說かれ、或は實驗調査がなされる等、國語音の性質の明らめられる所が少くなかつた。斯學の進步は大正の末年より近時にかけて目覺しく、大正十五年に設立された音聲學協會は、會報及「音聲の研究」を編して研究の發達を圖つてゐる。

（三）古く平上去等と呼ばれた語調はアクセントと呼ばれて研究の一部門を爲した。二十六年に出た日本大辭典（山田武太郎）にはアクセントを註し、日本音調論を附錄としてアクセントの形式・法則を述べたが、旺盛な學問的研究は近時の事に屬する。大正三年及四年に露人ポリワノフは機械によつて實驗し、その際の協同調査者佐久間博士亦實驗的研究をして大正四年雜誌、心理研究に發表し、大正六年には國語のアクセントを出した。その後國語の發音とアクセント（大正八年）、國語アクセント講話（大正十二年）を出しまとめて國語音聲學講話（昭和四年）とした。これらによつてアクセントの意義・形式・地方的相違・文章中の變化・品詞とアクセントの關係等の多方面が研究された。その他神保格・井上奥本等も注目すべき研究を爲し、文部省も「アクセントとは何か」（大正八年）を出して教育者の參

考たらしめた。かくて近時次第に注目されるに至り、國語の音聲學方面又は方言に對する研究家は、多くこの問題に手を染めるに至つた。

二　方言の研究　方言に關しては明治初年に英人ダルマ、その後チヤンバーレン等の研究があつた。明治十年頃より雑誌類に方言に關する論説研究等の發表せられるものがあり、且各地の方言書の刊行も見た。三十五年設立の國語調査委員會の方針の中にも「方言ヲ調査シ標準語ヲ選定スル」の項があり、後調査事項を示して得た各府縣の調査に基き、音韻調査報告書及分布圖（前掲）口語法調査報告書及口語法分布圖三十七枚（三十九年）を刊行し、以て全國に於ける方言の概況を明にした。同會は又三十七年に方言採集簿（保科孝一擔當）を刊行し、四十一年には全國に更に精細な調査を求めたが、その資料及結果は大正十二の震災で亡んだ。これらに刺戟され各地に方言の採集研究等の事を見たが、國語調査委員會の廢止と共に一時衰へた。近時郷土研究・民俗土俗の學・音聲學等の盛となるに伴ひ、又活況を呈するに至つた。一般には採集・意義の解説等が旺盛であるが、研究としては各地方言の音韻の特質・方言の區劃・發達・變遷等の考究を主とし、柳田國男・東條操等を優れた研究家とする。この研究は言語研究の領域の擴大をきたすと共に、生動する言語の相及理法の闡明を齎したのである。

三　語釋　本期の註釋はその數質に夥しいにも關らず、概觀して前期の研究を通俗化するの傾向が著しく、近時漸く前期を凌ぐ根本的釋義の業績をみると共に、又思想・情趣等の内面的事象への推究も進んできた。語源研究の書も出たが注目すべき程のものはなく、又古語・萬葉の語・近松の用語・諺語・俚言・新語・隱語・佛語・外來語・新聞語等の辭書も出た。ここで注目すべきは、その數三四十にも及ぶ國語辭書であるが、研究的のものは數種を出ない。

最も注目すべき言海(二十二年より二十四年に刊)は所收の語約四萬を五十音順に配し、皆品詞名(用言には活用の種類)を記し、解釋はよく語の本義を把握して簡明適切且概ね妥當で、語源を記す事も多く、辭書としての編制・組織・解釋等凡べて一時期を劃した名著である。次に見るべきことばの泉(三十二年落合直文著、四十一年落合直幸增補、昭和四年芳賀矢一改修)は初約十三萬語、增補本は約五萬を、改訂本は更に約十萬を增し、空前の語數を收めた。初刊以來固有名詞・新語・諸種の學術語までも收め挿繪も入れた。釋義常識的のもの多く簡にすぎ、言海の學問的なのに及ばない。次に大正八年に刊行を了した大日本國語辭典(上田萬年・松井簡治)は所收の語二十餘萬、固有名詞を採らず、成句・諺語の類をも收め、解釋詳細で、殆ど出典を示すが、語源は說かない。又目下大槻博士晩年の勞作大言海の刊行をみつゝある。本期の辭書は文法研究の進步に伴ひ單語の性質を明にし、又古文獻の刊行・搜索も進み、利用し得る資料を豐富にし、又語彙を增し、且つ、西歐の辭書に倣つて編述の方法・組織等に著しい整備をみた。

五　歷史的研究及比較研究

一　**歷史的研究**　歷史的研究も本期に於ける著しい特色で、明治の末年以後に於いて發達した。山田孝雄博士の國語沿革大要(四十一年)は教科用目的の書ではあつたが、斯學最初の業績で、文字・聲音・語彙・文法等の變遷を概說した。同博士は大正二年に奈良朝文法史・平安朝文法史・大正三年に平家物語につきての研究(但國語調査委員會編纂の名義)等の貴重な研究を出し、奈良朝・平安朝・鎌倉時代の語法を明にした。又疑問假名遣及口語法別記(前出)も各時代の假名遣・口語法の變遷に就いて記す所があり、古代國語の研究(前出)は古代の音韻・語詞に就いて考究した。昭和三年には天草本平家物語の語法(雜誌・教育、湯澤幸吉郎)、文祿元年天草版吉利支丹教義の研究(東洋文庫

論叢九、橋本進吉)、國語史上の一劃期(日本文學講座、春日政治)等が出て、何れも桃山時代の語法・音韻現象等を究明し、翌四年には室町時代の言語研究(湯澤幸吉郎)が出て該期の抄物の語法を明にした。昭和六年に出た國語史概說(吉澤義則)は假名・音韻・歌語と文語・中古語・近代語・東西二大方言等に分つて發達變遷を概說した。

その外新村博士の東國方言・足利時代の言語等に關する研究(東方言語史叢考所收)、天平時代の國語・波行輕唇音及FH音等に關する研究(東亞語源志所收)、吉澤博士の本邦音符考其他(國語國文の研究所收)、東西兩京の言葉戰ひ其他(國語說鈴所收)、等も注目すべきものである。之を要するに大正初年頃より著しく歷史的研究の發達をみ、奈良朝以前・平安朝・鎌倉室町時代・江戸時代・明治以後と略五大變遷が認められ、各期の研究が漸次進められつゝあるが、比較的古代に研究の手が屆き近代に粗である。

二　比較研究　國語と印度・ペルシヤ・ギリシヤ・支那・ビルマ語等との關係を唱へる者もあつたが、學界の信ずる所とならず、又マレイポリネシヤ語族・オーストロアジア語族との近似說も存するが、國語に多少の影響を與へる所があるとはするも、同系とは認められぬ。又早くより歐州の言語學者の中に、日本語はウラルアルタイ語族に屬するとの說を立てる者があり、我國人も亦種々考究する所があつた。併し多くの類似點を持ち乍らも不一致の點が少くなく、世界の語族中では比較的近い關係にあるも、近親の度が著しいとはし難く、蒙古語・滿洲語との關係も亦これに近い。之等よりも有力なものに朝鮮語・琉球語との比較研究がある。

明治十二年、英人アストンは日本語・朝鮮語の比較研究を發表して此方面の研究を開き、金澤博士はこの影響を受けて四十三年に日韓兩國語同系論及國語の研究を出して、緊密な關係にある事を强調した。前者に於いては系統的に

音韻・語法の兩方面より比較して、恰も琉球方言の如き關係にあるとし、後者では個々の部分的研究をして同系論の基礎づけをした。之等の研究には學問的考慮を缺く早急な推論が存し、所說そのまゝは贊し難いものであつたが、兩語が近い關係にある事は首肯せしめるものがあつた。その後小倉進平博士は國語及朝鮮語のため（大正九年）を出し、兩語の關係・類似點・相違點につき、正確に事實の解明を爲す所があつた。

琉球語が日本語と同系なる事は德川時代から認められてゐたが、二十八年にチャンバーレンが琉球語の語法辭典を出して、音韻及各品詞に亙つて比較對照し、以て本質的一致の存する事を學問的に明にし、その後研究者續出した。かくて今日に於いては國語の特殊な一方言と見られ、その特殊性が著しく明にされた。アイヌ語との關係に就いてもチャンバーレンは二十年にアイノ研究より觀たる日本の言語神話及地名を出し、十五條をあげて異系統の語なることを明にした。併し單語・地名等の國語に混入するもの多く、その方面の研究は爾後爲された。比較考究は古く悉曇學者によつて爲され、德川時代にも多少みたが、本期は研究の本質を一變し、部分的類似より進んで語全體の系統の考察にまで及ぶに至つたのであつた。

六　組織的研究

言語一般に對する言語學の如く、國語に對して國語學が存するが、前者がよく體系的に概括される學たるに對し、後者は稍もすれば分裂的考究のみが存し、組織的に概括される考究に乏しい憾があつた。文典の編述は舊語學の中樞部を概括したが、語法の學たる性質上包攝すべからざる部門が殘存した。それらをも包攝する概括的考究は、當然國語學の體系を要求し、その中に各研究部門を安定せしむべきである。かゝる意企のもとに、國語研究の全般を概括せ

んとするの考究が明治末期より發生した。

四十二年に出た國語學概論(龜田次郎)は系統論・文法論・音聲論・文字論・品詞論・文章法論を立て、最初の業績たるにかゝはらず、組織整備して最も見るべきものであつた。翌四十三年に出た國語學精義(保科孝一)は國語學の過去・現在・未來に分け、各に科學的研究・實際的研究の項を立てた。所論多くは實際的・應用的方面への見解主張で、ここで云ふ意味での國語學の概括的考究とは爲し難いものであつた。その後暫らくこの種の業績をみず、昭和四年に國語學概説(安藤正次)、五年に國語學概論(小林好日)、六年に國語學通考(安藤正次)を得た。概説は言語と文字・國語と方言・國語の音聲・國語の語詞・國語學史要等を、概論は言語と文字・類推作用・系統・文字・音韻・假字遣・語詞構成・品詞・文構成・口語と文語・方言と標準語、國語の時代等を、通考は國語學の對象・體系・展開及語音・語態・語義・語法の研究等を主要な項目とする。これらの中組織の點から云へば通考最も整然たるものがある。併し概説にも國語學史要の項があり、通考にも國語學の展開なる項で國語學史の大要を述べるが、これは異質的研究を混雜せしめたものとせねばならぬ。なほ近時雜誌の論文等でこの論究が進みつゝあるを見る。

之を要するに本期の研究は中樞部たる文法に於いて、密接に前期の研究に繼續し、その他にも亦多くの連關を有しつゝも、他面に於いて多くの新分野を開拓したのであつた。文法學を除いては開拓的意義に富み、國字・假名遣・方言・標準語等をはじめ、歴史的研究・比較研究・組織的研究等この後研究さるべき多くの道が示された。將來研究の進むと共に、恐らく本期の研究は第二期の研究が第三期に對して有した如き意義を持つに至るべき事が豫想せられるのである。

〔附記〕 簡明を旨としたため、解說すべきもの、論議すべきものの多くを略し、又參照のため注脚とすべき書名・論文名等をも凡て略した。終りに主要な國語學史及解題書を擧げておく。保科孝一氏の國語學小史(三十一年)、及國語學史(四十年)、花岡安見氏の國語研究史(三十五年)、福井久藏氏の日本文法史(四十年)、及增訂日本文法史(昭和九年)、長連恒氏の日本語學史(四十一年)、伊藤愼吾氏の近世國語學史(昭和三年)、吉澤博士の國語學史(國文學講座)、時枝誠記氏の國語學史(岩波講座日本文學)、山田博士の假名遣の歴史(昭和四年)、木枝增一氏の假名遣研究史(昭和八年)、赤堀又次郎氏の國語學書目解題(三十五年)、土井忠生氏の明治大正國語學書目解題(岩波講座日本文學)、龜田次郎氏の國語學書目解題(國語科學講座)、なほ恩師山田孝雄博士よりは諸種の資料を拜借し、又御敎示をも得た事を記して感謝の意を表する。

昭和九年十二月二十五日印刷
昭和九年十二月三十一日發行

國語科學講座
（第十一回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 株式會社明章印刷所
代表者 細谷粘三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院